

人と自然

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター紀要

第6号 2015年度



MOMOFUKU
ANDO
CENTER

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター

人と自然

Human and Nature

Contents

Vol.6 2015

巻頭対談

村井純 × 安藤宏基 人と自然とインターネット	4
-------------------------	---

特集

特集1 指導者養成事業の6年間を振り返る

自然体験活動指導者養成について	岡島成行	13
自然学校委員会 報告	山田俊行	21

特集2 ロングトレイルをめぐる動向

「ロングトレイル ストラテジー」	中村 達	29
イギリス・ウォーキング環境保全の現状		
—英国フットパスの新たな試み	節田紫乃	38
トレイル便り1 北根室ランチウェイ		46
トレイル便り2 浅間・八ヶ岳パノラマトレイル		48
トレイル便り3 中央分水嶺 高島トレイル		50
第3回ロングトレイルシンポジウム		52
挨拶	節田重節	52
	安藤宏基	53
	吉澤 猛	54
青少年教育とロングトレイル	坪田知広	55
スペインの巡礼街道を歩く	大久保春美	58
ロングトレイルを旅する	シェルパ齊藤	64
日本ロングトレイル協会の果たすべき役割と使命	中村 達	69
第1回「山の日」記念全国大会の		
上高地での開催について	加藤銀次郎	72

報告 国東半島峯道ロングトレイル	78
報告 北根室ランチウェイ	82
報告 山陰海岸ジオパークトレイル	84
報告 奥津軽トレイル	87
報告 金沢トレイル	89

特別インタビュー【第5回】

キャンプから人間性の回復を 株式会社スノーピーク代表取締役社長 山井 太	92
--------------------------------------	----

小諸 Tree House Project

	100
--	-----

研究・調査

報告 自然体験と防災教育	
ー自然体験のボランティア体験から育む「生きる力」 佐々木豊志	102

事業報告

自然学校新入職員研修会（11月・12月・1月）	112
自然学校中堅職員研修会（1月・2月）	119
自然学校経営者・管理者研修会	125
自然ガイドステージⅠ登山ガイドステージⅡ安全管理技術研修会（6月・12月）	127
第5回 浅間大学院生セミナー	132
橋谷晃さんと歩くトレッキング講座（6月・8月・1月）	141
浅間・八ヶ岳パノラマトレイル新コース体験ツアー（7月・10月）	147
人と自然 特別講演会	150

巻末資料

安藤百福センター運営組織	152
2015年度事業	153
2015年度上級指導者研修会利用状況	154
2015年度研修利用状況表	156

投稿論文規定	160
あとがき	161

巻頭対談 村井純 × 安藤宏基

人と自然とインターネット



村井 純

慶應義塾大学環境情報学部長・教授

安藤 宏基

安藤スポーツ・食文化振興財団理事長

日清食品ホールディングス株式会社代表取締役社長・CEO

キャンプ経験が原点

岡島 今回は、慶應義塾大学の村井純・環境情報学部長をお迎えしました。村井先生は日本のインターネットの第一人者であり、育ての親とも言われる方です。本日は自然と人とインターネットについて、存分にお話をいただきたいと思います。初めに、村井先生は学生時代、自然体験をしていらして、アメリカにまで勉強に行かれているそうですが、そのお話から。



司会：岡島 成行

安藤百福センター センター長

村井 僕はYMCAの野外教育をずっとしていました。

野尻湖のキャンプの運営をしていたんです。2週間とか、そういう長いキャンプでしたが、日本では当時珍しかった。

岡島 2週間のキャンプですか？

村井 長いキャンプっていうのは、日本ではなかなかできなかったんですけど、それをずっとやっていました。大学時代はそのキャンプカウンセリングをしていたんですが、インターナショナル・キャンプカウンセラー・プログラムっていうのがアメリカにあって、それに参加しました。ニューヨークで教育を受けて、6月から9月ぐらいまでだったかな、アメリカのキャンプを学んできました。大学時

代はずっとそんなことをしていたもんで、だから僕は大学に長くいることになった。

岡島 2年で終わる教養課程を4年かかっていますね。

村井 だって、キャンプが忙しくて試験受けられないんですから。

岡島 それで、コンピューターを専攻するのですね。

村井 僕は、基本的には人間しか興味がないんですよ。人間がどうやって自然環境の中で生きていくかということにしか興味がなかった。工学部なので結局はコンピューターの世界に入るんだけど、コンピューターは大嫌いだった。なぜかと言うと、コンピューターが中心になって人間が群がっているみたいなの、そういうのはすごく面白くない。人間が真ん中にいてコンピューターが支えるのなら話は分かるんです。コンピューターが周りにいて人間を支えるということは、コンピューターを繋がなきゃいけない。それでインターネットの研究を始めたんです。

岡島 当時のコンピューターはすごく大きかったし。

村井 それで、計算するだけだから、人間のために役立つっていう意識ないじゃないですか。ミサイルの弾道計算ができて良かったねっていうのは、これは全然人間を助けているのではないんですよ。でも、ワープロができたりして、だんだん変わってきた。人間のためにそういうテクノロジーができるっていう考え方が実現できるようになってきたので、コンピューターの勉強を始めたんです。

岡島 だから、インターネットですよ。興味あったのは。

村井 そうですね。使いにくかったコンピューターがあらゆる人間の営みに何か貢献できるような態勢になってきた。インターネットがこれだけ普及して、デバイスも普及して人間のために使えるようになってきた感じです。

岡島 村井先生は一貫して人間に興味を持ってこられたんですが、その背景には若いころの自然体験があるんですね。

村井 私の人生の背景にはずっと YMCA のキャンプがある。それは間違いない。

IoT の時代

安藤 人間を中心としたコンピューティングっていうのはいいですね。ところで基本はデバイスですか？

村井 いや、違います。データです。最初はコンピューターを繋ぐっていうインターネットだと思うんです。そうするとコンピューターを使っている人間が繋がってくる。つまり人間のネットワークとコンピューターのネットワークなんです。IoT っていう言葉が最近流行っているんだけど、T は Thing だからデバイスだっていうふうに思っちゃう。

岡島 IoT って英語でどう言うんですか？

村井 Internet of Things です。Internet is for everyone とかそういうキャッチフレー

ズを昔使っていたくらいで、実は、人間が繋がっているイメージの方が強い。それに対し、「もの」も繋がるんだよ、という話になったんです。でも、デバイスじゃないんですよ。デバイスっていうのはね、例えばこういう腕時計が心拍を理解できるとかね、例えば空調がこうやって回ると空気中の細菌なんか分析できる、ということを指します。これに対し、IoTの基本は、例えば、空調が分析できていることを住んでいる人の健康にどうやって役立てるか、というように「応用」することですね。つまり、人間から学ぶんですよ。だから、基本はデータなんです。そして今、人間の振る舞いとか人間の知恵をどうやってデジタルデータとして学べるか、そんなことができるようになってきた。だから IoT は今すごく面白いってみんなが言うんですが、実はデバイスではなくて、やっぱり人間から学べるようになったっていうことなんです。

岡島 データの応用、ですか？

村井 例えば、メガネの JINS が今月出した眼鏡には小さいセンサーが 2 つ付いてるんです。人が自分の眼球を上げたり、動かすでしょ。そうすると、それぞれの目から電波が出て、磁力が出るんですね、人間の体から。

安藤 そこでセンサーによって何を測るんですか？ 目の動き？

村井 基本的には微電力ですね。

安藤 目の動きで何を測るんですか？

岡島 何の役に立つんですか？

村井 目玉が上に行くか下に行くか、右に行くか左に行くが分かるようになるんです。そうすると何が良いかって言うと、人間寝るとね、必ず目玉は上に上がるんですよ。だから寝ている人の目を開くと、白目なんですよ。そうするとね、この眼鏡かけていると、眠くなっていることがすぐ分かるんです、目玉がこうやって上に上がっていくんです。これに目をつけたのが自動車会社ですよ。

岡島 危なくないから。

村井 だから運転手が眠たくなってきたら、少しスローダウンさせる。これは安全が確保できるでしょ？ こういうのがね、これからの高齢化社会で大事になります。

安藤 今のバックミラーは、人間の目の動きを全部センサーで見ている、さっきの話のように、目玉が上を向いてくると、アラームが鳴るんですよ。

村井 そうです。それと同じです。だから、それをいかに安くできるかの競争です。シートベルトも凄いんですよ。身体に巻いているから、血圧まで分かっちゃうんです。つまり人間からいろんなことを学べるっていうのは、例えば、社会全体の健康を上げていくとか、安全な交通社会を作ろうとか、そういうことにきちんと結び付けていけるポテンシャルがあるんです。

安藤 僕はね、ちょっと分からない。IoT ってそういうことなんですか。

村井 そうです。IoT ってそういうことです。

安藤 そういうことか。いや、僕は理解が違ったなあ、IoT って。Internet of Things だと、物になりますよね。

村井 だから、名前が悪いんですよ。

安藤 今のは先生の見解ですか？ それとも定義としてあるんですか。

村井 定義は特にないけど、私が定義するとすれば、ガバナンスというような意味があります。

安藤 先生、それはIoT じゃない。ちょっと名前変えられた方がいいですよ。

村井 そうですね。

安藤 今言っておられることは非常に重要です。でも、IoT って言っちゃ駄目ですよ。

村井 そうそう。IoT という語句からは、普通、分かんないですよ。どうしてIoT と言うことになったか、歴史的に見ると、それまでバラバラだったデバイスがインターネットに繋がったからできるようになった、という背景がある。シートベルトとか眼鏡とか、バラバラの tool、thing が繋がるようになってこの話が実現しているの、言葉としてIoT となった。しかし、本来の意味が分かりにくいって言うのは仰る通りです。

安藤 T は Things じゃないですね。

岡島 そう、別な T を探したらどうですか。

安藤 まあ、なんだろう。テクノロジーなんだろうね。

村井 そう、ほんとはね。だから、そういう意味ではインテリジェント ICT とかね。アーティフィシャル・インテリジェンスっていうのもいいかも。

安藤 だけど先生、IoT の話は面白い。人間を解析して人間を守る。

村井 そうです。

安藤 ここ、ミソだね。

村井 例えばね、農業を分析するでしょう。そうすると、上手な農家と下手な農家ってすぐに分かってくるんですよ。上手なノウハウっていうのは、やはり上手な人間から学ぶんです。医者の特レーニングも飛躍的な進歩の可能性があります。

安藤 da Vinci なんかにあれ、もうみんな見ながら手術をするんだね。内視鏡の手術なんっていうのはすごい。大きなビジョンの前でね、ロボットアームで行う。どこを切るのか、静脈、動脈、神経、リンパ、臓器、全部が解析されていてね、そこでロボットアームで切るわけですよ。それをみんな見ているわけだ。執刀している人が喋りながらやっている。これ、いい学習なんですね。

村井 その手術とその会話がベースになって、その次にはもっと良くなっていく。それからね、今考えているのはテレビです。日本では特に、良いテレビを年寄りが買ってる。年寄りのテレビってますますいいんです。

安藤 年寄りが持ってるテレビは、すごくいいものが多いんです。

村井 これが全部インターネットで繋がるんです。それを病院に繋ぐでしょ、そうする

と、遠隔地にある在宅患者の治療ができるようになる。それが全部記録に残るんです。医者診察の結果が全部記録に残るっていうのは、これまでは手術だけだった。今は、ちょっと皮膚見せてよとか、足の裏見せてっていうのが画像で残るようになってきた。すると、皮膚病とか目の病気については、画像が大量に残るので、ものすごく分かりやすくなってくる。今は、皮膚病について、過去の病例があつという間に分析される。マッチングすると、大体答えが出てくる。つまり、人間から学び、人間を育てるってことに使っているわけです。これが大事なんです。

安藤 だから先生、IoT の代わりに一番適切な言葉を考えてみたら？

村井 そうですね。分かりました。

安藤 でも、このコンセプト、すごい、すごいね。

岡島 だから、大変な進歩に繋がる可能性がありますね。

村井 そうです。

若者の可能性

安藤 ところで、海外の大学へ行って学ぼうという学生が減っているのが問題ですね。

村井 ものすごい勢いでおしりを叩いて行かさないとは駄目ですね。CEO は若い頃、コロンビア大学に行かれたんですか？

安藤 はい。

村井 うちの娘がね、コロンビア大学をこの 6 月に卒業したんですが、日本人が少ない。娘の同級生も韓国人と中国人ばかりだそうです。

岡島 どこでも中国人が多いみたいですね。

村井 日本人は圧倒的に減っています。

安藤 それはね、日本がいい国になったんですよ。あえて、外に出ることない。でも、商社は困っているんじゃないの。経済はまったくのグローバルです。僕なんか、海外旅行するけれども、この国はどこだったかっていうのがね、分からんことが多いわけだ。文字を見て、サンスクリットだからどこどこ、と分かるんだけど、モールの形が世界中すごく似てる。

岡島 どこでも英語が結構書かれていますしね。

安藤 モールに入っている店もね、コーナーはもう決まってるんだね。どこの企業が入っているかというパターンが全世界共通になっている。これを見ていたら気が付くんだけど、今の若者は世界共通因子のほうが高くね、そして個性的です。年寄りの僕なんかの年代とは価値観が違うんで、困っていることがたくさんありますよ。コマーシャルなんか全然駄目だね。例えば、高校生に焦点合わせてコマーシャルを打つでしょう。まあネットでもアピールするわね。しかし、年寄りがね、そんなコマーシャルはやめろ、って言うんだね。

- 岡島 分からないって言うんですね。
- 安藤 こんな迎合的な、チャラいようなものやるなって、私の携帯にボンボン入ってくる。批判だらけですよ。でも、ネットでは大絶賛ですよ。ツイッターから YouTube から、もう最高に絶賛なんですよ。それ見せられたら、誰もね、文句言えなくなる。企業内でギャップだね。すごいギャップですよ。だから、世代交代、それを意識しないといかん。
- 村井 最近びっくりしたことがありましたよ。学生に、高校のとき何やってたって聞くと、アイドルやっていましたっていうのがいたんですよ。なんだろうなと思ったら、地方のスーパーマーケットなんかで、AKB のまねごとみたいに、歌って踊っている女の子たちがいるんですよ。
- 安藤 真面目にやっているわけ？
- 村井 お稽古事みたいになっているんです。なんだそれって思ったら、ミス・ワールドの候補に環境情報学部の学生が 2 人いたんですよ。この 2 人は、実は高校のときアイドルをやっている子だった。でも、ミス・ワールドのファイナリストの 8 人になっちゃうと、今度は襷をかけて世界中に行くんですよ。学生時代に外交大使みたいなのをやるでしょ。するとね、ほかの学生なんかより全然しっかりしてくる。それこそ、世界が分かってくる。日本が訴えるべきところは何とか、環境問題がどうだとか、高齢社会に対してのメッセージをきちんとスピーチできなきゃいけないとか、そういうトレーニングをさせられる。
- 岡島 これまでにない価値観ですね。クールジャパンもそうですよね。今までの常識ではね、そんなものできやしないと思ってた。
- 村井 ゲームとかアニメ。そういうことを国の審議会レベルで議論するのは駄目ですよ、かなり怒られましたね。
- 岡島 マンガは駄目？
- 村井 そうそう、けっこう苦戦してたんですよ。アニメとマンガ。
- 岡島 でも、産業的にはかなり大きいでしょう。輸出産業としては。
- 村井 特にアジアでコピーライトがちゃんとしてくれば凄い。若者はマンガで生きてますからね。例えば囲碁はマンガで広がったんですよ、世界中に。『ヒカルの碁』っていうマンガです。あの監修をしたのが SFC（慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス）の学生ですよ。梅沢由香里っていう女の子。囲碁をインターネットでやるんですよ。彼女があんなストーリー作ったんだけど、あのマンガがヨーロッパで読まれたから、囲碁がヨーロッパに広がった。日本が好きな層っていうのはアニメが好きで、日本文化が好きで、そして日本が好きなあまり、囲碁をやっているんですね。たぶんカップヌードルも好きでしょう。それでなんかこう、一緒くたになっているわけ。
- 安藤 海外の人間が興味を持っているのは、日本がアピールしているのと違う点だね。

観光分野で日本のバリューっていうのはめっちゃくちゃ上がっていますよ。ホテルでも日本のホテルは割安なんです。楽しい国の一つなんだ。

岡島 自然も残っています。僕は青森にいるから分かるけど、北東北なんてものすごく綺麗な自然が、まだ手付かずで残っているんですよ。

村井 先週、国際会議でオーストラリアの人と話をしていたら、みんな長野に行くっていう。スキーです。

岡島 みんなインターネットで民宿に直接アプローチするんです。

安藤 検索して、好きなところ行ってんの？

村井 ツーリズムはインターネットが圧倒的ですね。

岡島 中小企業にインターネットを普及させると、もっと面白いことになる。

村井 うまく行っているところを調べると、経営が代替わりしたところなんです。これがインターネットを使っている。親父のときはやらなかったけれど、俺の代になったらうまくできた、っていうのが全部そこなんです。

インターネットを自然体験に生かす

岡島 それで、最後に1つ。日本人は今、自然と接する時間が少なくなっています。それを、インターネットの力を借りて普及させることはできないか。もしくは自然を知るツールとしてのインターネットの可能性はどうでしょうか。例えばeラーニング。安藤百福センターで指導者養成の科目を3科目作って、YouTubeにアップしています。これはほんと初歩のことだと思うんですが。

村井 自然から学ぶことっていっぱいあるわけです。人間が1人でできることって限界があるけど、何か調べていくとか、何かに出会っていくとか、そういうことから学んでくることっていっぱいあると思う。一方で、自然環境はどう変化させられているとか、あるいは、どういう動物がどこでどんなビヘイビアをしているのか、というようなことをしたらいい。「人間から学ぶ」と同じように、動物から学ぶとか自然環境から学ぶということを追求したらいい。これ、エビデンス・ベースト・ラーニングなんです。

岡島 エビデンス・ベースト・ラーニング？

村井 つまり、根拠がある。例えば、シカはこういうことをやるっていうのは、昔から言い伝えられているかもしれないけど、夜中にカメラ付けておくと、実はこういうことをやっていたんだと分かってきたりするんですね。

岡島 日本では縄文以来、トチの実を湯がいたりとか、いろんな技術があって、生活の知恵があったでしょ。それ、消えていってるわけですね、今。後20~30年すれば、80歳ぐらいの人がみんな死んじゃったら、なくなっちゃう。その技術をエビデンスとして残せるんじゃないでしょうか。

村井 そうそう。

岡島 ラーメンでもね、CEO が前から言っておられるけど、アメリカのラーメン、日本人が食べてもうまくないとか。味は違うんですか。

安藤 違いますね。

岡島 それも、エビデンス・ベースにすると、もっと分かってくる。

安藤 うん、味はねえ、やっぱり食文化という長い間の学習の結果なんですよ。

村井 それ、人間からしか学べないじゃないですか。おいしいって思ったとか、おいしいものを作るとか、人間からしか習わないでしょ、料理って。

安藤 味はね、伝播ですよ。食（しょく）っていうのはね、やっぱり最初に食べたものがね、一番おいしいんだ。それでね、最初に学習したものがおいしくて、大きくなってから学習したものは、またそれはそのおいしさを持つんだけど、やっぱり潜在的なおいしさというもののベースは、これは変えがたいものがある。190 何ヵ国、これだけの国があってね、各々の国が食文化を持っているんです。歴史があれば全部食文化があるわけだ。

岡島 そうなんですよ。

安藤 生きてくためにね。それを調べていくと、バラバラなんですよ、これは。だから、こんなもの好きなのかっていうようなことがある。

村井 カップヌードルって、それに合わせてるんですか。

安藤 全部、合わせてる。

村井 わあ、すごい。

岡島 これ、おもしろいですね。エビデンス・ベースにしたら。

村井 最高だな、これ。

岡島 自然と人間とコンピューターの関わりって限りがないようですね。

安藤 あ、ですね。僕はやっぱり自然体験っていうのもネットの世界で、バーチャルになってくると思うんですよ。一方で、人間は脳のある部分に肌感覚で、感じるものを全部ファイリングしているんです。その脳が使っている量というのはものすごく広いついていうんですね。それは、人間はリアル、現実というものとバーチャルとの間で行き来して、それが現実なんだ、ということを理解するためではないか。そのためにも肌感覚が必須ですね。

岡島 再認識ですね。

安藤 存在というものを確認しているんですよ。だから自然体験のなかで一番重要なのは、自分の体験なんです。

岡島 自分で体験する。

安藤 山に行って、川に行ってね。何を捕まえるのもいい、自分で飯食うのもいいし、何をしてもいいんだけどね、これは結局、肌感覚なんです。人間が生きていくための最低の肌感覚であって、これは必須なんです。

村井 それは大事ですよ。それはね、うん。

安藤 これを持ち合わせんと、人間って滅亡するんだと思う。人間が滅亡するときというのは、バーチャルとリアルというものが分からなくなったときでしょう。僕は、これが分からなくなる子によく会う。これは夢だったのか、これは現実だったのか。このネットの世界がずっと進んでいくと、バーチャルの世界がずっと広がってきて、これは事実なんだかそれともバーチャルなんだか分からなくなる。でね、バーチャルの方が気分いいときが多いんです。現実の方が厳しいの。

村井 そうです。

岡島 やはり、体験を通してものを学ぶことが基本だということですね。人間はまず、しっかりとした肌感覚を養い、その上で、来るべきインターネット世界に立ち向かうことが重要だということを再認識いたしました。本日は長い間、ありがとうございました。

(2015 年 11 月 東京・日清食品ホールディングス株式会社本社にて)

参考文献

中西茂『異端の系譜 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス』中央公論新社，2011.

村井純『インターネット』岩波新書，1995.

村井純『インターネットⅡ』岩波新書，1998.

村井純『インターネット新時代』岩波新書，2010.

特集 1

指導者養成事業の 6 年間を振り返る

自然体験活動指導者養成について

岡島 成行(安藤百福センター センター長)

背景

1980 年代初頭からわが国に独立自営型の自然学校が生まれ始めてきた。子どもたちを預かり自然の中で様々な体験、教育活動を行い、その授業料で経営するという形態である。それまではボーイスカウトや YMCA といった青少年団体が主としてこの分野での活動を行っていた。青少年団体が野外教育をベースに教育活動に主眼を置いていたが、自然学校はそれに加え、環境問題や過疎問題といった社会的な課題を解決しようという意思を内在させていた。

20 世紀は人類が「一方通行の発展」に邁進した時代であった。病気は減り、飛行機は発達し、情報革命とも呼ぶべき発展を成し遂げた。しかしながら、人類は今も大きな課題に直面している。テロや新たな感染症、地球規模の環境問題などである。

なかでも温暖化、熱帯雨林の消滅、砂漠化などの地球環境問題は深刻である。特に温暖化は、気候変動を引き起こしながら我々の日常生活を脅かすようになってきた。地球環境問題の根本には「一方通行の発展」がある。人と自然との関係を一方的に人類の側から裁断してきたことである。広い宇宙の中の、ごく小さい惑星に生きていることを忘れ、人類が自然を「征服」し「支配」することができるという思い上がった考えが、地球環境問題を引き起こしているのである。

宇宙の大きさと人間の小ささを実感し、この先も永続できる生活を維持するには、自然の摂理に従いながら生活するしか方法はない。そのことを誰もが認識すべきであり、そのための教育が必要である。環境教育、環境思想であるが、なかでも幼少期、児童期、青年期それぞれに自然と人間、また動物や植物などとの関係について、感じ、触れ、考える癖をつけることこそが最も重要な根本対策であるはずだ。そういった直感的な信念から自然学校が生まれてきたのである。

時代の要請なのだろう。アメリカでは 1960 年代にすでにレイチェル・カーソンが『センス・オブ・ワンダー (Sense of Wonder)』で感性が鋭い幼少期に自然と触れ合うことの重要性を訴え、最近でも 2005 年にリチャード・ループの『あなたの子どもの自然が足りない (Last Child in the Woods)』がベストセラーになっている。

自然学校が徐々に広がるにつれ、新入社員教育や職員教育としての指導者養成事業が求められるようになった。このため日本環境教育フォーラム（JEEF）は 1999 年、自然学校のためのプロ指導者養成講座を開設した。さらに 2000 年 5 月には、青少年団体、環境保護団体、自然学校などが大同団結し、自然体験活動推進協議会（CONE）が設立され、CONE 指導者養成が始まった。以後、わが国では自然体験活動の指導者養成は、JEEF のプロ養成とボランティアを主とする CONE 指導者養成という 2 つの流れが共存する形となった。

安藤百福センターができるまで

しかし、ビジネスを基本理念に持たない自然学校や青少年団体は、資金不足に悩まされるのが常で、指導者養成にまでなかなか手が回らない状況だった。指導者養成は見返りのない投資のようなもので、お金はかかるが収益は期待できず、むしろ赤字になる。

指導者養成事業のような課題については本来、国や地方公共団体が先頭に立つべきなのだろうが、当時、国立少年自然の家、青年の家ではそんな気を微塵も見せなかった。そのため、CONE 設立後、民間の資金を募り、独自の指導者養成制度を運営していく方針を固め、トヨタ自動車をはじめ、東京電力、損保ジャパンなど、環境に理解のある企業に声をかけ、資金を募る計画を立て始めた。

そんな折、安藤百福氏が私を呼んでくださった。百福氏は「衣食足りて礼節を知るようになってきた日本人だが、スポーツや健康などはまだ十分ではない」と考えていたようで、特に子どもたちの将来について心配しておられた。百福氏のお話は非常に感銘深いものがあり、子どもの将来を考え、私たちと一緒に自然体験の普及に努めていただけるというお話だった。百福氏は CONE の最高顧問に就任してくださり、私はその後、5 年にわたり百福氏とお話しさせていただく機会を得た。その中で、民間主導のトレーニング・センターの設立についてご支援いただけるようお願いした。現在の状況は子どもたちに自然体験をさせるには指導者が不足していると説明し、その上で指導者の養成にはお金がかかり、民間企業からの支援が必要であることを伝えていた。

しかし、2007 年 1 月、安藤百福氏が突然お亡くなりになった。百福氏との話にあった自然体験活動指導者のトレーニング・センターの話は立ち消えになると思っていたところ、安藤宏基・日清食品社長（当時）のお計らいで、トレーニング・センターができることになった。夢のような話に関係者一同大喜びだった。文部科学省も大いに歓迎し、トレーニング・センター設立は一気に実現性を帯び、建設予定地の選定やセンターの設計へと進んだ。設計は私の知り合いだった隈研吾氏に引き受けていただいた。

一方、トレーニング・プログラムの内容にはまだ不備があり、改良すべき点が多かったため、JEEF と CONE の有志が 2 年を費やしてほぼ完成させた。この間、資金面でも安藤スポーツ・食文化振興財団のお世話になることができた。

その結果、2010 年 5 月 21 日、長野県小諸市に安藤百福記念自然体験活動指導者養成

センターが開設された。21日のオープニング・セレモニーには、文部科学省スポーツ・青少年局長をはじめ、わが国の自然体験の指導的立場にある方々、団体が参加し、安藤百福センターは名実ともに日本の自然体験活動のメッカとしてデビューした。

自然体験活動指導者養成の基本設計

安藤百福センターでは、年間300人の上級指導者を輩出する計画だった。その背景には、①自然学校だけでも年間200～300人の指導者養成が必要であること ②公立の少年自然の家が指定管理に出される傾向にあり、教員が行っていた指導者としての活動が民間に任されるようになり、こちらも年間200～300人程度の指導者を用意する必要がある、と思われたからである。指導者制度の概要は図1のような形で、JEEFとCONEとの養成段階では互換性を持たせ、無駄のないような形に仕上げ、安藤百福センターは順調にスタートできた。

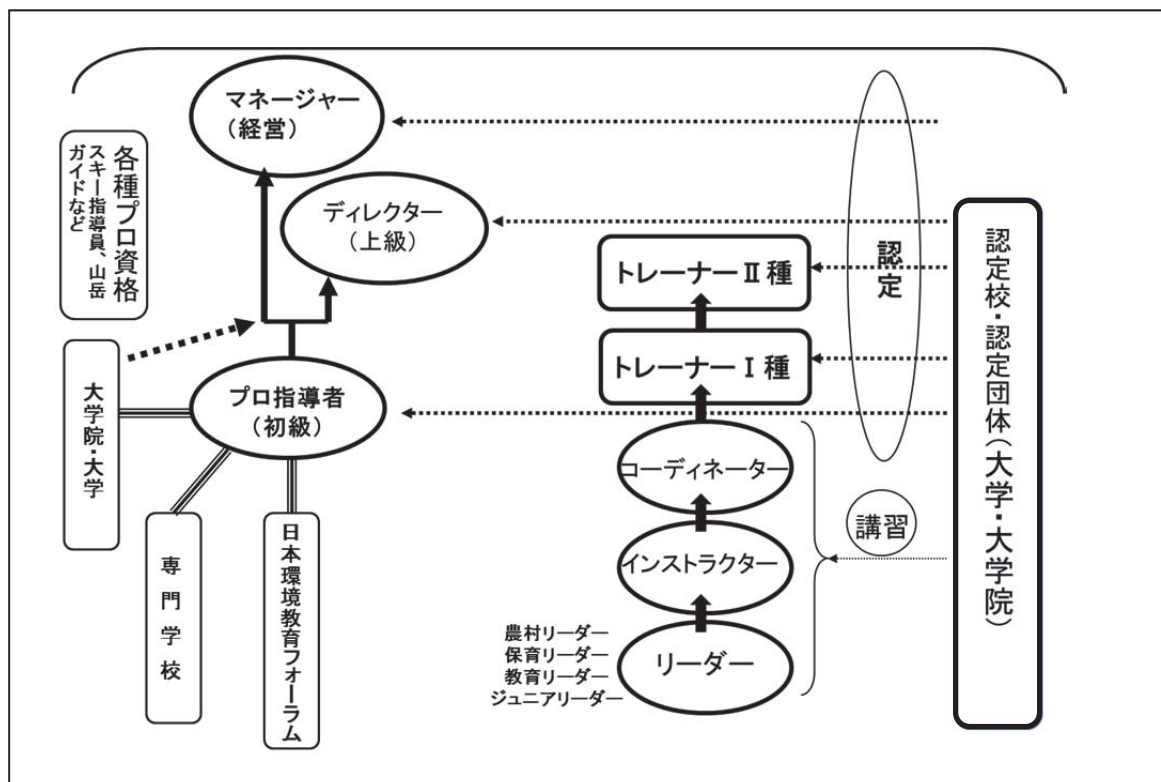


図1 自然体験活動指導者制度 概要

図1の左側のプロ指導者（プロ初級）、ディレクター（プロ上級）、マネージャー（経営）と、右側のCONEトレーナーⅠ種・Ⅱ種を上級指導者とし、安藤百福センターではこの部分を養成する計画で、CONEのリーダーやインストラクター、コーディネーターの養成は行わない方針だった。また、図1以外の指導者養成のプログラム（各自然

学校独自の研修、山岳ガイドやスキー指導者養成など）についても、上級指導者養成に値するプログラムについては上級指導者養成と認定することとした。この結果、初年度はCONE指導者養成186名、自然学校関係141名、山岳ガイド46名の計373名の上級指導者を養成できた。このほかアウトドアフォーラム、国際アウトドアシンポジウム参加者123名なども含めて429人の上級指導者を認定した。

しかし、2011年度の安藤百福センターの報告では、上級指導者養成は109人だった。CONEトレーナー養成が31名に激減し、JEEFが31名、山岳ガイドが30名、その他17名の計109名というカウントだった。シンポジウム参加者を指導者養成から外したこともあるが、自然学校関係273名が抜け落ちていたため、前年度に比べ上級指導者養成数が大きく落ち込んだ。

CONEが減ったのは、国立青少年教育振興機構との間で新たな制度を確立するための議論が進行中であり、この新制度が落ち着くまでは一時中断といった形になったからだった。また、自然体験活動推進法の成立が実現する見込みとなり、指導者養成のシステムが大きく変化する可能性があったことも大きな要因だった。

この法律案では、公立の少年自然の家（当時約500校）が運営を民間委託する場合には、危険防止のため、一定の資格を所持した指導者が必要になる、という項目が予定されており、将来必要となる上級指導者は毎年300人以上になると積算されていた。しかしその後、政権が変わり、法律案は消え（2016年秋の国会に同様の法律案が提出される可能性がある）、公立の少年自然の家の多くは自然体験とは関わりのない業者に委託され、現在では無資格の指導者を抱えた少年自然の家が危険をはらんだまま運営されている。

ところで、自然学校関係の200名以上が上級指導者養成からカットされていたのはなぜだろうか。これは事務局が自然学校関係の研修内容を理解しないまま、「図1の上級指導者に該当しない」という理由から計算しなかったのだと思われる。図1の左側に大学・大学院や専門学校、スキー指導員、山岳ガイド、各種プロ指導者、日本環境教育フォーラムと記されている中に「自然学校」が明記されていなかったことが原因だろう。

自然学校関係者の間では、日本環境教育フォーラムの指導者養成は自然学校全体の指導者養成であるという共通理解があったため、あえて「自然学校」という名称を図1に書き入れなかったのだが、第三者の立場からは、自然学校が独自に行う研修は養成事業ではない、とみなされたのである。

この計算の狂いが後に問題となるが、このときにはっきりと上級指導者養成について、自然学校側の概念を関係者に徹底しておくべきだった。また、自然学校に関しては、安藤百福センターがJEEFから運営を引き継いだ際、全国の自然学校から「指導者養成について弾力的に運営すべき」との要請があり、プロ初級と上級の取り扱いについて、各自然学校の自主的な判断を優先することになったのだが、この点が事務局にきちんと伝わっていなかった。図1の概念が独り歩きしてしまい、実態と乖離が生じたとも言え

る。そもそも自然学校の指導者認定は、参加団体が推薦してきた方を認定する制度で、実技や日常の仕事については推薦団体を信用することが前提となっている。認定は、最終的なチェックを行うことに重点が置かれているのであって、日数をかけた研修が目的ではないのである。

念のため、集計から漏れ続けていた自然学校関係の数は概算で 2012 年度 245 名、13 年度 250 名、14 年度 260 名、15 年度 180 名の計 935 名。このすべてについて研修内容を精査し、追加講義を行うなどの措置を講じた後、安藤百福センター認定のプロ指導員（初級、上級）とすべきである。

NEAL－官民合同事業への挑戦

自然学校のプロ養成と CONE の指導者養成は民間の横断的な指導者養成システムであり、筑波大学をはじめ大学関係者や国公立の少年自然の家の指導者などがまだ参加していなかった。これを是正してオールジャパンの指導者養成システムを構築しようと、CONE と国立青少年教育振興機構（以下、機構）とが合同で事業をする計画が持ち上がり、2014 年から具体的に動き始めた。安藤百福センターもこれに参加した。

その結果、CONE の制度を NEAL（Nature Experience Activity Leader）と名称変更し、CONE のトレーナーⅠ種・Ⅱ種を統合した上で「主任講師」とすることになった。また、国の機関としてより慎重に指導者養成システムを形成していきたいという機構側の意向から、リーダー、インストラクター、コーディネーター、主任講師（トレーナー）のカリキュラムも再編成することになり、リーダーから試行を重ね、1 年ごとに実施していくことになった。このため新制度への移行は、当初予定より大幅に時間がずれ込むことになった。

リーダーのカリキュラムの試行からコーディネーターの試行まで 3 年を要し、主任講師、すなわち CONE の上級指導者養成事業は 2016 年になって試行が行われるという状況にある。このため、安藤百福センターの CONE 指導者養成事業に大きな狂いが生じる結果となった。

自然学校指導者養成制度の整備

一方、安藤百福センターの自然学校指導者養成事業はかなりの進展を見せた。

1 年間の養成事業である初級プロ養成は、時間が長く、また授業料も高いため、一般に参加しにくい面があり、参加者は徐々に減る傾向にあった。これに対し、各自然学校では研修生制度が進んできた。これは、1 年間の研修の後、成績の良い者が雇用される制度だが、この制度にも欠点があり、座学等の総合的な視野を養う機会に恵まれなかった。こうした状況を見て、自然学校の有志が集まり、安藤百福センターのプロ養成と研修制度を合体することで現実的な養成制度を再構築することになった。

2014 年から e ラーニングを取り入れるなど制度改革を進め（P.21 からの自然学校委

員会報告参照)、2015年度は制度を整備した上でプロ初級110名、上級45名、マネージャー7名の計162名の指導者養成を行った(この数字には前述の各自然学校の自主的な研修参加者数は含まれていない)。2016年度はさらにカリキュラム検討を重ねており、自主的な研修をプロ養成事業とみなし、補講等を施すことで認定する道を開くなど、年度途中でかなり完成形が見えてきている。しかしながら、一連の改善状況は広く伝わらなかったため、自然学校のプロ養成に関しては前述の通りの誤解が残る結果となった。このため、2016年度には安藤百福センター内に自然学校指導者認定委員会を設置し、プロ養成の認定をより公平にすることで誤解のない制度に整備する予定である。

日本山岳ガイド協会、日本ロングトレイル協会などとの提携

2011年から日本山岳ガイド協会との提携により自然ガイドの養成を事業化した。技術的にはレベルは高くないが、それまでの経験、知識などを考慮し、さらに「プロを目指す」ということから上級指導者と認め、2011年に30名、2012年に48名を養成するなど、積極的に養成事業を進めるようになった。2016年度中には安藤百福センターが日本山岳ガイド協会に参加し、自然ガイドの養成を始めるとともに、将来的には登山ガイドの養成も行っていく計画だ。

また、ロングトレイルへの支援を積極的に行っており、2015年度からは日本ロングトレイル協会の事務局を安藤百福センター内に設置し、活発な活動を始めている。ロングトレイルのガイド資格はまだ検討されていないが、日本山岳ガイド協会の登山ガイド、自然ガイドなどの資格を活用する案が出ている。

そのほかスキー指導者との連携や海・川などの水系の自然体験活動指導者の養成事業の推進など、安藤百福センターとして対応していかなければならない課題は山積している。とはいえ、一朝一夕にできる性質のものではないため、じっくりと多様な意見をまとめ上げていく努力が求められる。

職業としての自然体験活動指導者

現在、日本には2,000校以上の自然学校が存在する。そのうち10%は沖縄にある。1980年代初めには数校の自然学校しかなかったことを思うと大変な増え方である。

しかし、そのほとんどが数人で経営する小規模なもので、経営的には零細企業といえる。スタッフの給料も一般企業に比べると安い。先に述べたように、ビジネス感覚よりボランティア意識のほう強い人たちが多く、経営的に大きく成功している自然学校は極めて少ない。

とはいえ、彼らは貧乏ではない。多くは山の中や人里離れたところに勤務地があるため、お金を使うことが少ない。給料が安くても困らない。むしろ都会で高い給料をもらってお金をたくさん使う人たちより貯金が多い。こうした状況が徐々に知られるようになり、自由な生き方を望む若者が増えているのも確かである。

約 2,000 校の自然学校で働くスタッフの数は、1 校平均 5 人として 10,000 人ということになる。自然を舞台に活動し、プロと言われる人たちの中ではかなり多い数である。スキー指導員は約 3 万人と言われるが、スキー指導員を主たる職業としている人は非常に少ない。岩手県の調査では、スキー指導員の職業で一番多いのは公務員で、全体の 33.3%、次に会社員 32.3%、教員 8.7%で、職業としてスキー指導員をしている人はいなかった。山岳ガイドは各レベル合わせて約 1,600 人で、職業としている人は 40%、540 人。そのうち約 100 人が夏は山岳ガイド、冬はスキー指導員として活動している。

このように、「自然を舞台に食べている」人は、日本ではまだ少数派である。その中では、自然学校の指導者の数は非常に多いと言えるだろう。

しかし、こうした若い指導者たちの多くは無資格で働いている。見よう見まねで仕事を覚え、工夫してプログラムを開発しているのだが、どうしても視野が狭くなり、独りよがりの指導者になりがちで、経営者たちの悩みの種だった。その解決策として、自然学校の経営者が集まって共同の指導者養成事業を始めたのが JEEF のプロ養成だった。

現在、何らかの資格を有して自然学校で働いている人は少なく、その教育が急務となっている。事故が起きたり、評判を落とすようなことが続くと、自然学校全体の信用が落ち、ひいては自然体験活動、アウトドアの普及に大きなマイナスとなる。無資格のスタッフは 90%以上と見られ、こうした人たちの再教育を急がなくてはならない。安藤百福センターの役割が期待されるどころだ。

自然学校をはじめ、自然体験のそれぞれの現場で良質な指導者、スタッフが配置されるようになれば、自然体験活動の評判は高まって国民の多くが自然の中に分け入るようになり、新たな生き方を模索することになるだろう。子どもたちも自主性、創造性を取り戻すだろう。それこそが安藤百福氏の願うことなのである。

日本の自然体験活動の将来展望

日本でもアメリカでも、いや世界各地で子どもの自然離れが危惧されている。一方、日本では自然に恵まれている地域の子どもたちの方がスマホやゲームに興じている時間が長く、東京など大都会の子どもたちの方が自然体験の機会が多い、とも指摘されている。大都会に住む親は、自然から隔離された状態の子どもたちを見て何かおかしいと気づき始めており、そのため自然学校に参加させたり、積極的にアウトドアに出かけたりしているからだ。こうした状況は、アウトドアに熱心な先進国とその余裕のない発展途上国との関係にも当てはまることである。

子どもに限らず大人も自然から隔離されているような状況では、人と自然の関係について正常な感覚を持つことは不可能だろうし、自然への畏敬の念を持つべくもない。

暗記中心の受験勉強の弊害が説かれ、より創造的で挑戦する気概を持つ子どもに育てたいと言われ始めて久しい。しかしながら、多くの日本人は目先の個人的な利益を追求するあまり、人間本来のあり方について深く考える時間が少ない。しかしこれは、日本

人だけでなく世界共通の現象かもしれない。

はじめに指摘したが、文明が爛熟している現代、最も必要なことは人類の生き方への自覚であり、この先長い間どのように生きていくか、長期的展望を持った哲学・思想の創造ではないだろうか。

そういった方向へ歩み出す第一歩として、自然の中に入り込んで、感じ、考える機会が求められているのである。自然体験活動は今後、子どもだけでなく大人にも、またシニア世代にも必要になってくると思われる。ビジネスとしての急激な展開は難しいかもしれないが、環境問題をはじめ地球的規模の諸問題に対応するための最前線の作業として、自然体験活動の展開は大きな意味を持つ。誰もが抵抗なく自然の中に入っていられるように導く仕事は静かに広がっていくはずであり、アウトドア一般、自然学校、青少年育成活動などを包含する自然体験活動は、21世紀に最も期待されてよい分野だと思う。

安藤百福氏が指摘していたことはまさにこの点であり、安藤百福センターはこの精神を継承し続けなくてはならない。

参考文献

西村仁志『ソーシャル・イノベーションとしての自然学校』みくに出版, pp.134-156, 2013.

立花隆『宇宙からの帰還』中公文庫, 1985.

レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』上遠恵子訳, 佑学社, 1991.

リチャード・ループ『あなたの子どもに自然が足りない』春日井晶子訳, 早川書房, 2006.

岡島成行「自然体験活動指導者の役割」人と自然 4 号, pp.59-64, 2014.

大田原康志「自然体験活動指導者認定制度について」人と自然 4 号, pp.74-78, 2014.

岡島成行「日本における自然学校の意義」人と自然 5 号, pp.68-73, 2015.

日本環境教育フォーラム『第 5 回自然学校全国調査 2010 調査報告』日本環境教育フォーラム, pp.3-6, 2011.

伊藤章一・栗林徹「スキー指導員の意識に関する研究 岩手県基礎スキー公認指導員の実態と意識調査を中心にして」岩手大学教育学部研究年報第 51 巻第 2 号, pp.163-172, 1992.

自然学校委員会 報告

山田 俊行（トヨタ白川郷自然学校 学校長）

安藤百福センターでは、2014 年度に自然学校委員会を立ち上げ、新しい時代に即した自然学校の指導者制度の再検討を続けてきた。2015 年度はその 2 年目にあたり、初級指導者 110 名、中級指導者 45 名、上級指導者 7 名の研修を行った。研修は事実上各級の認定事業とみなし、新たな指導者認定制度が確立された時点（2016 年度完成予定）で正式認定される見込みである。すなわち、2015 年度には初級から上級まで計 162 名の上級指導者を育成した、とみなすことができる。なお、3 年目の 2016 年度にもこの研修会を行い、研修制度を完成させるとともに、安藤百福センター内に自然学校指導者制度認定委員会を設置し、新認定制度を軌道に乗せていく方針である。

自然学校委員会委員

委員長 岡島 成行（安藤百福センター センター長）

委 員 田中 啓介（ホールアース自然学校 執行役員）

砂山 真一（一般財団法人ポジティブアースネイチャーズスクール代表理事）

辻 英之（NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター 代表理事）

山田 俊行（トヨタ白川郷自然学校 学校長）

主催 安藤百福センター

共催 公益社団法人日本環境教育フォーラム

研修内容 (A) 新入職員研修会 2014～2015 年度
(B) 中堅職員研修会 2015 年度
(C) 経営者・管理者研修会 2015 年度

参加者 初級 110 名、中級 45 名、上級 7 名 計 162 名

(A) 自然学校新入職員研修会

全国の自然学校に所属する新入職員（研修生を含む）を対象としたプロ初級指導者養成会を開催した。参加資格は、自然学校の現場ですでに働いており、OJT として 6 ヶ月以上の経験を積み、自然学校のプロとしての基礎技術を習得していることとした。社会人として必要とされるコミュニケーションスキル（特に人に伝える技術）の習得、および自然体験教育に携わる者としての基礎教養を身に付けることに重点を置いた内容を用意した。

現行の初級指導者養成事業は 6 ヶ月の OJT と 2 ヶ月の座学とで成り立っているが、新たな研修制度は OJT のほか、2 泊 3 日の研修および多様な e ラーニングを取り入れ

ることにより教習内容のレベル維持を図った。

【目標】

- (1) コミュニケーションスキル（特に人に伝える技術）の基礎を身に付ける
- (2) 自然体験教育に携わる者としての基礎教養を身に付ける
- (3) 自分たちの仕事の社会的関係性を知る

【対象】 自然学校（または類する団体）の1～2年目職員（実習生含む）で、概ね20～30代の方。また、半年以上の現場経験を積んでいること。

■各回の概要 合計 110 名受講

- | | | |
|--------|-----------------------------|-----------|
| (1) 東京 | 2015 年 1 月 13 日（火）～15 日（木） | |
| | 会場：オリンピックセンター | 受講者数：23 名 |
| (2) 京都 | 2015 年 3 月 3 日（火）～5 日（木） | |
| | 会場：青少年野外活動総合センター「友愛の丘」 | 受講者数：17 名 |
| (3) 長野 | 2015 年 11 月 25 日（水）～27 日（金） | |
| | 会場：安藤百福センター | 受講者数：20 名 |
| (4) 京都 | 2015 年 12 月 7 日（月）～9 日（水） | |
| | 会場：宇多野ユースホステル | 受講者数：17 名 |
| (5) 東京 | 2015 年 12 月 14 日（月）～16 日（水） | |
| | 会場：オリンピックセンター | 受講者数：20 名 |
| (6) 熊本 | 2016 年 1 月 20 日（水）～22 日（金） | |
| | 会場：元気の森かじか | 受講者数：13 名 |



長野会場の集合写真

■研修内容概要

科目	講師	内容
自然学校原論 ※	岡島成行 氏（安藤百福センターセンター長、青森山田学園理事長）	日本における自然学校が、どのような経緯で今に至り、現状はどうなっているのか、その歩みと特徴を理解する。
環境教育論 ※	阿部治 氏（立教大学教授、日本環境教育学会会長）	持続可能な社会を目指した環境教育/ESD の現状を知り、今後の課題について考える。
野外教育などの各種概論【事前学習】	—	課題図書を読み、自然学校職員として知っておくべき各種概論を学び、基礎的な教養を身に付ける。
伝える技術（1） 文章の書き方	赤羽博之 氏（書きものナビゲーター、耕文舎代表社員）	書類作成が好きになるコツを学び、業務力向上に繋げる。
伝える技術（2） インタープリテーション	山田俊行 氏 （トヨタ白川郷自然学校学校長） 辻英之 氏 （NPO 法人グリーンウッド 自然体験教育センター代表理事） 田中啓介 氏 （ホールアース自然学校執行役員） 砂山真一 氏 （一般財団法人ポジティブアースネイチャースクール代表理事）	インタープリテーションの基本的な考え方を学び、実習ではフィードバックを参考に、自己の伝える技術向上に繋げる。
伝える技術（3） KP 法	川嶋直 氏（公益社団法人日本環境教育フォーラム理事長）	KP（紙芝居プレゼンテーション）法の基本的な考え方を学び、思いや考えを整理したプレゼンテーション実習を行う。

■事業評価

- ・組織内では若手ながらすでに事業を任されている者が多く、研修会に臨む意識は高かった。また、取り組みの様子、筆記試験の結果、ふりかえりシートの内容から、概ね目標は達成できたと感じた。
- ・基礎教養科目（自然学校原論、環境教育論）は当日の講義だけでは不十分だったので、2 年目より e ラーニング化を実現。各自でじっくりと学習することができた（提出レポートにも表れていた）。

(B) 自然学校中堅職員研修会

2015 年度には、自然学校の勤務 3 年から 10 年の中堅職員を対象とした研修会を 3 回開催した。事業の企画担当者としての認識を高めることを主目的とした。中級受講者は、技術的分野のレベルは十分であるとの認識から、研修のコンセプトを「ビジネスマインドを鍛える」こととした。また、3 回の研修会の中心テーマをあえて変え、どの部分を研修しても中級（旧プロ上級）指導者の養成となるよう計画した。2015 年度の研修会の受講者は、内容的にも中級指導者と認められた。2016 年以降申請があれば中級指導者として認定する。

■研修会タイトル

「自然系ビジネス・スタートアップセミナー～ビジネスマインドを鍛え、新時代の幕開けへ～」

セミナー (1) 「情報発信力を鍛える」

セミナー (2) 「顧客の巻き込み力を鍛える」

セミナー (3) 「共感力を鍛える」

【対象】 事業の企画担当者（概ね 3～10 年の中堅職員）

合計 45 名受講

終了後、安藤百福センターより修了証を授与

■セミナー (1) 「情報発信力を鍛える」

日 程：2016 年 1 月 13 日（水）～14 日（木）

講 師：山田 泰久 氏

（CANPAN センター 代表理事）

会 場：オリンピックセンター

参加者：15 名



■研修内容概要

カリキュラム	内容
情報発信力の強化	各種ツールとそのパフォーマンスを整理する。
情報発信の事例から学ぶ	実際の事例を紹介しながら利用者目線でアイデア出しのワークを行う。
情報発信から成果志向へ	情報発信からコミュニティづくり・成果志向へと続くプロセスを理解する。

■セミナー (2) 「顧客の巻き込み力を鍛える」

日 程：2016 年 1 月 28 日（木）～29 日（金）

講 師：但馬 武 氏（ホーム 代表）

会 場：オリンピックセンター

参加者：17 名



■研修内容概要

カリキュラム	内容
エンゲージメント戦略の基礎	団体の経営理念・Core Value・Vision を確認し、達成目標を設定する。
エンゲージメント戦略の推進	タグラインやタッチポイントを整理し、コミュニティデザインに繋げる。
エンゲージメント戦略の構築	グループワークによって自身の団体のエンゲージメント戦略プランを作成する。

■セミナー (3) 「共感力を鍛える」

日 程：2016 年 2 月 6 日（土）～7 日（日）

講 師：井上 英之 氏

（INNO-Lab International 共同代表

慶應義塾大学特別招聘准教授）

会 場：安藤百福センター

参加者：13 名



カリキュラム	内容
「私」という主語を取り戻す	気になっていることや人生の歩みをふりかえり、自分自身の源泉を再認識する。
マイ・プロジェクトの作成	「自分自身」と「社会」の背景から、実現したい社会のビジョンを描く。
行動計画をまとめる	ビジョン達成のための具体的なアプローチを整理し、明日からの行動に繋げる。

■事業評価

取り組みの姿勢、ふりかえりシートの内容から、「社会との関係性を意識したビジネススキル・マインドを養う」という目標は概ね達成できたと感じた。

特に、これまで関わりの少なかった異分野からのインプットが、これからの自然学校業界の発展を期待させる内容が多く、意識が大きく変わったという声が多数を占めていた。



(C) 自然学校経営者・管理者研修会

高い経営能力を持つ人材、すなわち自然学校プロ上級指導者であり、経営者・管理者への道に進む人たちを対象に、2015年度、研修を1回行った。これは安藤百福センターとして初の自然学校経営者・管理者向け研修会であった。ドラッカーのマネジメント理論に触れながら、成果とは何か、時間をどう考えるかを中心に、ダイアログ（対話）を重視した研修会を行った。安藤百福センターより修了証が授与され、初級、中級プロ指導者とともに、2016年度にはプロ上級指導者と認定される道が開かれている。

日 程：2016年2月4日（木）～5日（金）
講 師：清水 功也 氏（フリーランス、
九州社会デザイン研究所準備室長）
対 象：入職10年以上の自然学校経営者・管理者
参加者：7名（定員8名）
会 場：オリンピックセンター



■カリキュラム（共通）

番号	科目	内容
1	自己紹介プレゼンテーション	各組織の紹介と課題などを発表し、全体で共有する。
2	セッション1「成果」	エグゼクティブとしての成果とは何か、成果を上げる能力の修得はどうすればよいか考える。
3	セッション2「時間」	時間の考え方を学び、成果に繋げる方法を考える。
4	アクションプラン	成果を上げるためのプランを考える。

■事業評価

- ・ドラッカーという新しい視点は大きな収穫だったという共通の感想だった。課題解決のきっかけ作りになったという意味では、概ね達成できたと感じた。
- ・今回のように、異業種・異分野の講師からは大きな学びに繋がるようだ。また、第2回、3回とフォローアップ研修会の開催を望む声も共通していた。
- ・これからの自然学校業界は、他業種の方ともっと繋がる機会をつくるべきだと強く実感した研修会だった。今回の学びが、組織だけでなく社会を変えていくことになると信じている。

《2016 年度への展望》

申し込み状況から判断すると、個別のスキルアップ研修のニーズは高かった。このためプロ指導者の養成事業は 2016 年も継続したい。ただし、一部内容の変更や新たな講師による講義を付け加えるなど、参加者にとってより魅力のある研修会へブラッシュアップして実施すべきである。また、2016 年には認定制度をオーソライズして広く一般にアピールし、全国に 1 万人以上いる自然学校のプロ指導者を指導者制度に位置付けるように働きかけ、より良い自然体験を満喫できるよう準備をしていくことが望ましい。

《自然学校プロ指導者制度の今後について》

この 2 年間の委員会を通して何度も話題に挙がったことは「自然学校研修という表現では参加者が集まらないのではないか。もっと具体的なテーマを前面に出そう」ということであった。それは自然学校という言葉に含まれている、もしくは含めようとしている内容が広範囲にわたるために、結果として焦点が定まらない企画になりがちだということである。

そこで委員会としては、自然学校の現場で必要とされているスキルのうち、ごく一部のスキルに絞った研修会を企画することにした。各地の関係者へのヒアリングから見えてきたことは、ニーズがあるのは具体的なスキルアップ研修であるということであった。それも一般的な事業展開時に必要なスキルであって、自然学校業界に特化した内容ではない。分類して言えば業務の効率化、事業目標の共有、自らの考えをまとめ伝えること、マネジメントなどである。研修会は総じて集客力もあり好評であった。

このことは何を意味しているのか。それは自然学校業界の質の向上が社会から求められているということかもしれない。あるいは、各自然学校の管理者の組織運営意識が高まったということかもしれない。いずれにしても、この研修を総合的にカリキュラム化した認定制度が必要とされており、研修会もしくは認定会が継続されることは、業界全体にとってプラスになると実感している。

一方で、自然学校業界に特化した研修内容については検討が行われていない。この検討作業を行うためには、自然学校業界とは何かという定義が必要となる。つまり、ここに含まれる事業体の範囲を明確にしなければ対象が見えてこないのが、研修内容を決めようがないということである。

例えば仮に「アウトドアや自然の中で広義の教育を行う事業体」と定義すると、「アウトドアで行う教育だからこそ学べるものとは何か」「自然の中での教育は社会に必要か」などをテーマにすることができる。あるいは「自然の中やアウトドアでの体験を商品にしている事業体」と定義すると、「なぜ自然の中で活動することにこだわっているのか」「自然の中で活動する事業体が持つべき理念は何か」などがテーマになるだろう。

今後、議論を深めるためには、自然学校の概念の再整理と、業界としてまとめたい事業体の範囲を決めることが必要であると考え。

特集2

ロングトレイルをめぐる動向

「ロングトレイル ストラテジー」

中 村 達

(特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会 代表理事)

概況

ロングトレイルが注目されている。この現象は、ここ数年以上続き、なお全国に広がりを見せている。ブームと言われているが、流行やトレンドといった現象ではない。なぜなら、ロングトレイルは短期間で整備できるものではなく、地域社会に認知され全国から利用者が訪れるまで、少なくとも5～6年の歳月が必要とされるからである。その間、整備や運営組織は、ボランティアによる人的労働力に頼る必要がある。したがって、ロングトレイルの制作と整備運営は、参画者の情熱と信念に支えられていると言って過言ではない。だから、ブームとかで片づけられるものでは決してないのだ。

2012年末、ロングトレイルが『日経トレンドィ』で、2013年のヒット予測ランキングの第1位に取り上げられて以降、全国各地にロングトレイルの整備が広がっている。

2011年に発足した日本ロングトレイル協議会は、昨年11月に特定非営利活動法人の認証を受け、日本ロングトレイル協会として新たにスタートした。2015年度末現在、全国で18のロングトレイルが加入しているほか、加入を準備しているトレイル運営団体も全国に多数存在している。

ロングトレイルは様々なメディアで取り上げられ、ムーブメントをいっそう押し上げる役割を果たしている。さらに、昨年は米国の西海岸を南北におよそ4,260kmにわたって貫く、パシフィック・クレスト・トレイル（PTC : Pacific Crest Trail）を舞台にした米国映画『わたしに会うまでの1600キロ』（原題 Wild）が全米でヒットして、日本でも公開されて話題となった。ドラッグと酒におぼれ、離婚を経験した主人公がPTCを歩き、様々な困難や危険を克服して、本来の自分を見つけるという実話である。

また、今年7月末には、ロバート・レッドフォード主演の米国映画『ロング・トレイル!』（原題 A Walk in the Woods）が全国で公開された。この映画は、還暦を過ぎた主人公がアパラチアン・トレイル（AT : Appalachian Trail）を歩くことで、これからの生き方を考え直すというストーリーで、アメリカンアウトドアズや米国のロングトレイルもよく表現されている。この映画は、日本ロングトレイル協会が「推薦」をしている。



©2015 BIG WALK PRODUCTIONS,LLC ALL RIGHTS RESERVED.

日本ロングトレイル協会 推薦映画『ロング・トレイル!』

国内では、当協会が監修を担当した『知識ゼロからのロングトレイル入門』が、幻冬舎から 8 月に上梓された。ロングトレイルの入門書として、大変分かりやすく記述されている。

また、TV では BS ジャパンの「日経プラス 10」で、30 分にわたりロングトレイルが取り上げられたほか、NHK ではゴールデンタイムの「にっぽん紀行」に 30 分の特集として、北根室ランチウェイが紹介された。そのほかロングトレイルは、全国各地の放送局でも数多く報道されている。





中日新聞



JR 東日本「トランヴェール」(奥津軽トレイル)

一方、新聞報道はロングトレイルの概念だけでなく、具体的にどこをどのように歩けばいいか、その魅力は何なのかなど、より踏み込んだ記事内容になってきていると思われる。地方紙ではそれぞれ、全国の当該地域のトレイルを取り上げている。

ロングトレイルに関する報道は、毎年その勢いを増しているようで、今年から始まった「山の日」やインバウンドにおける外国人観光客の自然指向も、いっそうこの報道に拍車をかけるものと予想する。



中国新聞



東京新聞

NPO 法人化と安藤百福センターへの事務局移転

～「歩く」は自然体験活動の基本～

昨年12月に、日本ロングトレイル協議会は特定非営利活動法人の認証を受け、名称を日本ロングトレイル協会と改めて、事務局を安藤百福センターに移転した。これは、活動が

全国的に広がり、法人格を取得する必要が出てきたことと、急増するマスコミや地域からの問い合わせなどに対応するのが主な目的である。そして、将来的にはロングトレイルや「歩く」という情報の集約地になればと思う。

また、安藤百福センターにおいては、インバウンドや地域の活性化などに対応するとともに、「歩く」を自然体験活動の中核の一つとして位置付けようとしている。

「歩く」は運動の基本であり、歩くことによって地勢や植生の変化、あるいは天候の移り変わりを感じ、考察することが極めて重要である。このごく当たり前の活動が、この国の自然体験という分野で、やや脆弱になっていたように思われる。

ヨーロッパではアルプス山麓などで、夏休みには子どもたちのハイキングが盛んに行われている。トレイルの起点となる駐車場には、大型のバスが並び、子どもたちがバックを背に、自由に山塊を歩いている姿を、あらゆるトレイルで見ることができる。

国土の地形を利用した質の高いダイナミックな活動が、子どもたちの自然体験活動のモチベーションを上げるためには必要である。



ヨーロッパでは家族連れや学校のハイキングが随所で見られる（イタリア ドロミテ山塊）

日本の地勢は山岳丘陵地帯が大半であり、歩けば山に突き当たるという特徴がある。しかしながら、これまでの自然体験活動は「歩く」と山、つまり「山歩き」を乖離させてきたきらいがある。そこで、日本山岳ガイド協会と連携しながら、これから需要が増えると予想される自然ガイド資格を、各地のロングトレイルと連動して、自然体験活動に「歩く」が広く取り入れられるような活動も行いたいと考える。

全国に広がるロングトレイル



会員トレイルは18となった（2016.3.31 現在）

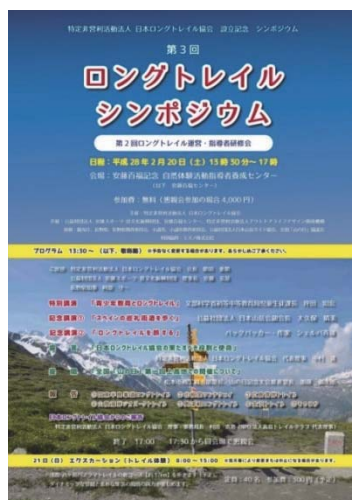
ロゴデザイン ＜日清食品ホールディングス㈱デザイン
ルーム制作協力＞

日本ロングトレイル協会のNPO法人化に伴い、新たに広島湾岸トレイル、山陰海岸ジオパークトレイル、金沢トレイル、奥津軽トレイルなどが会員となり、加入団体は18となった。これらのロングトレイルの総延長はおよそ1,800kmで、延伸や新たなロングトレイルの誕生が予定されている。

ロングトレイルシンポジウムとフォーラムの開催

～ロングトレイルのあり方を考えるシンポジウムと、地域住民が理解を深めるフォーラムの開催～

ロングトレイルのあり方や課題などを考察し、同時に情報交流を目的とした「ロングトレイルシンポジウム」を安藤百福センターで開催している。2015年度は第3回となり、「歩く旅」をテーマにして、スペインの巡礼街道やバックパッカーのシェルパ斉藤氏の講演などを行った（後述）。



また、ロングトレイルの整備や利用には、地域の理解と協力なくしては不可能である。そのため加入のトレイルには、ロングトレイルフォーラムの開催を奨励している。

2015 年度は滋賀県の「高島トレイル」が、創立 10 周年を記念して開催した。また、広島湾岸トレイルがルートを選定したのを機にフォーラムを開催し、およそ 300 人の参加者があった。



第 10 回ロングトレイルフォーラム in 高島のエクスカージョン（高島トレイル）

浅間・八ヶ岳パノラマトレイルの整備と利用

旧安藤百福センタートレイルの名称を「浅間・八ヶ岳パノラマトレイル」に変更するとともに、センターの位置する地域を中心に、御牧ヶ原台地や千曲川沿いなどのトレイルを整備し、総延長距離はおよそ 80km（予定を含めると約 120km）となった。

一昨年あたりから、このトレイルをセンターでの研修プログラムの一つに取り入れる利用団体が多くなった。また、周知が広がるにつれて、このトレイルを歩く一般のハイカーを見かけるようになったのも、最近の特徴である。地域の人たちがこのトレイルを利用してくれるのは、本来の目的の一つでもある。

また、日本ロングトレイル協会には、ロングトレイルとは何か、どういうものかという問い合わせが、特にマスコミ関係者から多数寄せられている。そのため、「浅間・八ヶ岳パノラマトレイル」は、トレイルを知ってもらうためのプロトタイプとしての機能を持ち始めており、その意義は大きいとも言える。



御牧ヶ原をエクスカージョン



森の中のトレイル

ブームではロングトレイルはできない

ロングトレイルは、ブームやトレンドだからといって、すぐにできるものではない。まず、構想を練り、仲間を集め、運営組織を作らねばならない。ルートを選定ができて、地権者の了解を得なければコースさえ作れない。

組織の立ち上げ、事務局の設置、ルートの調査、地権者の許諾などとともに、ルートがほかの自治体に繋がる場合は、自治体間の話し合いも必要となる。これが他府県にまたがるとなれば、さらに複雑な折衝をしなければならない。

そして、予算の確保という大問題の解決に労力が割かれる。この大問題は、トレイルが完成しても絶えず運営団体を悩まし続けることになりかねない。

これらの基本作業に数年はかかる。様々な課題や問題をクリアしながら、この基本作業を行いながら、同時にできるところから、道標の整備やトレイルマップ、つまり地図作りの作業となる。

トレイルがある程度できた段階で、エクスカージョンなどを行いながら、ルートの最終確認をするとともに、広報活動が必要である。また、前後して協会では、トレイルフォーラムの開催を奨励している。これは、当該地の住民や関係諸団体に、ロングトレイルとは何か、どんなコースを通るのか、地域において期待される貢献とは何かを議論し、理解を深めるために行っている。

前述のように、平成 27 年度は、高島トレイルと広島湾岸トレイルで 2 回開催した。高島トレイルでは約 100 名が、広島湾岸トレイルでは約 300 名の参加があった。このフォーラムでは地元メディアが大きく報道し、その期待の大きさがよく表れていた。

このように、一つのトレイルが組織を作り、ルートを決定して整備し、市民にアピールして実際にトレイルを利用してもらうに至るまでには、少なくとも 10 年近い歳月を要するのが一般的である。

ロングトレイルは、企画から運用までに相当な年月がかかるので、ブームであるとか、人気だからとか、トレンドが理由でできるものでは決してない。完成までの人的労働力は大変なものであるし、まして、トレイルを持続可能なものとして末永く維持していくためには、相当な努力が必要である。

しかしながら、全国各地にロングトレイルが誕生して、さらに整備中や構想されているものはかなりの数にのぼるものと推定される。そこには、自然、環境、健康、コミュニケーション、レクリエーション、アウトドアズ、地域の活性化、雇用、そしてインバウンドなどのコンテンツが地域社会に強いニーズとして存在している。

見えてきた課題

ロングトレイルをテーマにした論文の執筆も熱心に行われている。私が知っているだけで、10に近い首都圏の大学、大学院生、あるいは研究者の間で研究が行われ、すでに東京農工大学大学院生が修士論文を書き上げている。[※]

論文のテーマは、ロングトレイルによる地域の活性化や創造、歩く文化としてのトレイルなどで、その研究成果が期待される。大学生や若い研究者が、ロングトレイルをテーマにして学際的に考察してくれることは、日本のアウトドアズにとっても画期的なことである。

前述したように、ロングトレイルはなおいっそう注目されているが、ともすればロングトレイルを整備する側にスポットが当たりがちである。ロングトレイルが徐々に周知されてはいるものの、歩く側、つまり歩くニーズを高め、トレイルハイカーを増やすことが何よりも重要である。

ロングトレイルの楽しさ、面白さ、その意味などを自然環境の保護とともに啓発する必要がある。イベント的に事業を行うだけでなく、地域をあげて、四季を通じて、集客への努力と啓発も大切である。

例えば、ロングトレイルの全ルートを通す、スルーハイカーはまだまだ少数であるし、歩き通すための様々なサービスシステムも不十分と言われている。セクションごとのアクセスサービスや、宿泊施設の整備なども大きな課題である。トイレの整備やゴミ処理はもちろん、各ロングトレイルの特徴を生かしたビジネスモデルの構築と、雇用の創出も急がれる。

さらに、インバウンドで訪れる外国人ハイカーのための情報も、決定的に不足している。明治時代の初め、いわゆるお雇い外国人が3,000人ほど日本を訪れた。その中で彼らの多くが国内の高い山々をはじめとする自然を歩き、その素晴らしさを称賛したと言われている。

時代や背景は異なるが、同じような状況が発生しているのではと思う。日本のトレイルを歩きたいのだが、という声も海外から聞こえている。しかしながら、いまだ国内には英語版の地形図の発行はないし、山岳地域に特化した登山ガイドブックの英語版すら発行されていない。



外国人ハイカーが増えてきた北根室ランチュウェイ

日本には類まれな山岳地帯がある。亜熱帯から亜寒帯に至る植生と、急峻な地形がある。そこに、山旅が楽しめるロングトレイルが、続々と誕生しているのだ。

様々な課題や問題も多いが、ロングトレイルがブームと言われてはいるものの、先駆けのロングトレイルでも、誕生して、たかだか10年でしかない。

全国には信仰の道が数多くあり、1,200年以上の歴史を持つ。そんな視点で見ると、ロングトレイルがレジャー、教育、健康、癒しなどのニーズにこたえながら、持続可能な「道」として機能するには長い歳月が必要であろう。このムーブメントを若い人たちをはじめとする次世代に、いかにして繋いでいくかが最大の課題である。

※2015 年度 修士論文 「ロングトレイルの教育的意義 ～歩く旅人を育てる道～

Educational significance of Long-trail –Trails develop backpackers」

東京農工大学大学院 農学府 修士課程 共生持続社会学専攻 環境社会関係学分野 環境教育学研究室
14532005 柄 晃裕 主指導教員 朝岡幸彦

謝辞 日本ロングトレイル協会の活動とロングトレイルの普及に、公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団、ならびに同財団理事長・安藤宏基氏、同財団副理事長・安藤徳隆氏より多大なご支援をいただいております。ここに深く感謝申し上げます。

特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会

イギリス・ウォーキング環境保全の現状 — 英国フットパスの新たな試み

節田 紫乃（フットパス研究家）

イギリスの映画や小説の中では、よく散歩するシーンが出てきます。登場人物たちが庭、公園、田舎道を、語り合いながらブラブラ歩いていく。外と一緒に歩き、秘密を打ち明けたり、正直な気持ちを伝えたりする。そしてときには、ひとりで怒りや寂しさを抱え、自然の中へ身を投じるように歩くといったような、ひとつのキーポイントとして描かれることが多く、そこには英国独自の日常風景が映し出されているように思います。イギリス人は歩くという行為が好きで、生活の一部としてごく当たり前のこととしてとらえています。例えば、家族や友人宅を訪れると、食事前後に必ずと言っていいほど、みなで近所を散歩します。そんな彼らの情熱とこだわりが、全国に地球6周できるほどのフットパス（歩行専用道路）網を作り上げるという、他国では見ることのないユニークなシステムを生み出しています。

そんなウォーキング文化がある英国でも、その環境保全は、近年大きな課題となっています。特に、国や自治体の大幅な予算削減、高齢化社会、人材不足、遊びの多様化、デジタル化社会、新しい価値観、不健康な生活習慣など、日本同様の問題や変化に国全体が直面しているなか、どのように適応しつつ、次世代に歩く文化を継承していくか、みなが模索しています。

その環境保全の要となるのが、歩く道であるフットパスを維持していくことです。それは、①道の整備、②道の利用の二点が両輪となって回ることで、はじめて成立します。フットパスの存在が法律上認められてからほぼ70年が過ぎた今、状況は刻々と変化し、従来通りのやり方ではフットパスを守ることができなくなっている、両輪がうまく回らない現実がそこにあります。

フットパスは基本、各自治体が管理する決まりになっています。ところが、2008年のリーマンショック以降、財政難に見舞われた自治体の体力が落ち、フットパスの管理が困難になってきている、それにより道が放置されてしまう現象が各地で起こっています。そうになると、フットパスがあること自体に疑問を持ち始める声も出始めてきます。その一方で、ただ指をくわえて状況が良くなることを待っていても仕方がないと考え、少ない予算と人材でどうやりくりするか、試行錯誤しながら解決策を見出そうと奮闘している地域や団体も出てきました。その中で、①整備ボランティアの活用、②UKの海岸線全開通、③健康問題の解決策となるウォーキング、④自宅の庭からで

きる自然保護、⑤チャレンジ精神を刺激するスポーツの人気など、新たな芽が出てきています。

整備ボランティアの活用

整備ボランティアを活用することは、以前からありましたが、それはあくまでも補助的な役割でした。それが最近では、自治体が管理できなくなったエリアを彼らが主体となって管理していく形に変化してきています。例えば、シェイクスピアの故郷、ストラトフォード・アポン・エイボンがあるウォリックシャー地方の自治体は、予算の関係で道路管理部職員を 15 人から 5 人に減らしたため、フットパスが管理不十分となりました。そこで、ストラトフォードにあるランブラーズ*¹・グループは、整備ボランティア活動を開始します。道路管理部は、ボランティアの保険と整備に必要な道具を提供し、ボランティア側は、月に 2 回 7~8 人で作業をしています。整備が完了した箇所には、”Improved for you by Ramblers volunteers”と書かれたプレートが団体の PR も兼ねて設置されます。また、町の観光案内所には、グループによって発行されたウォーキング・ガイドブックが販売され、観光客や地元の人々に地域を歩いてもらうきっかけも提供しています。逆にリンカンシャー州にある AONB*² 指定のリンカンシャー・ウォルズでは、自治体の職員が中心となって整備ボランティアチームを結成し、要請があった場所を修理・改善していくという形をとっています。毎年 5 月に開催されるウォーキング・フェスティバルでは、16 日間で 100 以上のツアーが行われ、地元以外からも多くの人が参加します。



このイベントでも、ボランティアが大きな原動力となっています。ツアーの中には、実際に整備ボランティアがどのような成果を上げているのか見学するコースもあり、人々に関心を持ってもらい、さらなるボランティアを集め、寄付を募るといった地道な努力をしています。チャリティー団体、そして地域によっては地方自治体が、ボランティア活動やフットパス整備規定などを分かりやすく説明したマニュアルを提供しているケースもあり、誰でも気軽に活動ができるような工夫もされています。このように地域によって多少取り組み方は違いますが、みなが連携しフットパスを存続させ、多くの人々に歩いてもらい地元の良さを知ってもらおうと努力し始めています。今後は、サイクリング、乗馬、ランニングといった他目的で道をシェアしている団体とも連携をとり、さらなる実態調査や管理態勢を強化していこうとしています。

UK の海岸線全開通

2007 年に環境大臣により、イングランドすべての海岸線にアクセスできる **England Coast Path** を 2020 年までに全開通させる計画が発表されました。全長 4,500km の道は、すでに 2012 年に開通したウェールズの 1,400km と合わせると、世界でもっとも長い海沿いのトレイルのひとつになります。毎年イングランド海岸部への旅が約 7,000 万件、14 億ポンド（日本円で約 2,000 億円）以上を消費するというデータ^{*3}が出ており、多くのアウトドア、マリンスポーツ愛好家たちだけでなく、観光業関係者をも湧かせました。しかし喜びも束の間、リーマンショックにより計画がしばらくの間、ほぼ停止状態に。2014 年によりやく国から追加予算が下りてからは順調に進み始め、現在南部エリアは、ほぼ一本に繋がりそうなところまでできています。国内だけでなくインバウンド市場の点からも、大いに期待できそうなナショナル・トレイルになる予感がします。

健康問題の解決策となるウォーキング

現代社会で人々は、便利で快適な生活ができるようになった反面、運動不足やストレスで健康を害する人が増加しています。健康問題は日本同様、イギリスでも大きな社会問題となっています。そんななか、90 年代から、健康のためのウォーキングが注目され始め、今では **Walking for Health**^{*4} という名の下、国レベルの活動にまで発展しています。**Walking for Health** は、健康上何かしらのサポートが必要な方々に、歩くことで健康になってもらおうと、定期的開催されるグループ・ウォーキングのことです。地方自治体と各地域の **NHS**（健康保険機関）の指導の下、癌患者支援団体 **マクミラン**^{*5} からの資金で、ランブラーズ協会がウォーキングの実施をサポート。ここ最近、歩くことが心身ともに健康になる一番の方法であるというデータも多々発表され、医療費削減、社会保障問題の解決にも繋がっていくのではないかと、大変注目されている活動です。健康歩き事業に 1 ポンド投資すると、国民保険は 7.18 ポンド削減できるというデータを、**Natural England**^{*6} が発表しています。とはいえ、フットパスが全国にある英国においても、何かきっかけがないとなかなか地元の人は歩かないようで、いかにそのような方々を外へ連れ出し、仲間と一緒に歩いてもらうか、まだ課題は多くあるようですが、少なくとも参加した人たちからは、良い反応が出てきているようです。特に心のケアに大きく貢献していて、単純に楽しめるということが、継続に繋がっているそうです。

今後は、医療現場でも “**prescriptions from illness to wellbeing**” — 従来の治療のための医薬品処方箋から健康で幸福になるための運動の処方箋（緑の処方箋）を、直接患者に渡してもらう。医療とウォーキング活動の連携の向上により、さらに参加しや

すいシステムを構築し、参加者（患者）に理解を深めてもらおうと、今年一部の地域で実験的に実施されています。そして緑の処方箋を、ただ歩くことからバードウォッチングなどのアクティビティ、フットパスや保護区の整備ボランティアへの参加を促すなど、もっと幅を広げていこうという動きが、活発化してきています。

また通勤・通学という観点からも広がりが見えます。徒歩、または自転車の移動 **active travel** の推奨です。sustrans^{*7} という団体は、車移動を減らすことで、いかに道の安全が確保され、健康的で緑豊かな暮らしができ、持続可能な社会が形成できるかを訴えています。Sport and Recreation Alliance^{*8} の下、sustrans、ランブラーズ協会などが集まり、ロンドンオリンピック後のレガシー（遺産）として、アウトドア・スポーツやレクリエーションを推奨し、そのために都市部のさらなる緑地化推進や安全なルート作り、国立公園などを地元住民の健康改善に役立てる構想などを政府に提案しています。それにより、アウトドアや観光業がさらに発展し、地域の医療負担が減り、財政難でカットされた環境保全活動費への新たな解決策となるのではと期待されています。

自宅の庭からできる自然保護

イギリスでは、身近な自然をテーマにした TV 番組が最近、高視聴率を叩き出しています。また、春の風物詩となっているチェルシー・フラワー・ショー^{*9} では、色とりどりの野草が咲き乱れる草原をイメージしたものや、野生動物に優しいガーデンデザインといった自然を意識したものが最近のトレンドとして注目されています。観光庁が2015年に行った観光目的調査によると、国内旅行では、第一が自然観察という結果^{*10} となりました。イギリス人の自国の農村や田園風景に対する思いは、郷愁や愛着という感情を超え、ひとつの精神の礎となっていると言っても過言ではないほどです。それに加え、グローバリズムとデジタル社会への反動から、人々が自分たちのルーツを振り返り、自然を求める気持ちが強くなってきています。この現象は19世紀の産業革命時代以降、幾度となく訪れ、その都度レクリエーション、自然賛美などの動きが活発化しましたが、最近のブームは、それだけではあきたらず、疑似体験的なものを含め参加型のものが人気を博しています。その動きは、自然保護団体の活動にも変化をもたらしています。例えば、Wildlife Trust（王立野生動物協会）の”Living Landscape”キャンペーン活動があります。これは、保護区に現存する野生生物を守るだけでは自然保護としては不十分であり、彼らが数を増やせる環境を広げることで、生物多様性の世界を実現しようという目的で始まりました。具体的には、自宅の庭や校庭に野生動物が住めるような工夫、例えば庭の囲いは垣根にする、鳥たちが食す植物を植える、害虫を駆除してくれる鳥たちの巣箱を庭に設置する。そして自然観察をする。つまり、自宅に自然保護区を作ってしまうというものです。このような働きかけは、ほかの



保護団体はもちろん、先ほどのチェルシー・フラワー・ショーを主催している RHS（王立園芸協会）でも、積極的に推進しています。さらに、RSPB（王立鳥類保護協会）では、自然保護区を人工的に作るプロジェクトが進んでいます。協会はエセックス州ウォルシー島の湿地帯を購入し、そこへロンドンで行われている **CrossRail**^{*11} という新たな鉄道路線工事で掘削した土を船で

輸送し、それを盛って高低差を作り、多種多様な野生生物が住めるような場に変えようと作業が続けられています（2020 年ごろオープン予定）。このように、今まではレクリエーションとして自然観察を楽しんでいた人々が、自ら保護区を作り、モニタリングし、自然を育む動きに変化してきています。それによりさらに興味が広がり、多くの人々が自然観察での旅を楽しんでいるということだと思います。

チャレンジ精神を刺激するスポーツの人気

2016 年 4 月に開催したロンドンマラソンでは、約 3 万 9,000 人のエントリー枠に、25 万人近くの人たちが応募したことが話題になりました。マラソン、サイクリング、トライアスロンなど、個々が限界に挑戦するようなストイックなスポーツ人気が、35 歳から 50 歳の世代を中心に広がっています^{*12}。MTV やエクストリーム・スポーツなどの音楽、ファッション、スポーツの融合に影響され、個性や自分磨きなど己に敏感な世代が今夢中になっているのが、真の自分と向き合うような上記のスポーツではないかと推測します。アウトドアの舞台にも進出してきており、チャレンジ精神を刺激するような国内イベントも増え、新たなフットパスの使い方を提案しています。

例えば、毎年 1 月に行われる **The MONTANE® Spine Race**^{*13}。ナショナル・トレイルのペナイン・ウェイ（431km）を真冬の 7 日間ほぼ不眠不休で完走するというウルトラ・マラソン大会が近年始まり、徐々に参加者を増やしてきています。また、トレイルランニングも英国では人気です。代表的なものは、湖水地方で春から秋にかけて合計 9 大会開かれる **Lakeland Trails**^{*14}。トレラン以外にもウルトラマラソンやウォーキングのレースも行われます。レース後は音楽ライブなどで盛り上がるフェスの要素もあります。もっと気軽に参加したい人には、毎土曜日、全国各地の公園で行われている **parkrun**^{*15} が人気です。園内 5km の短い距離を走り、各自のタイムをバーコードを使って記録していくというものです。参加費は無料で、誰でも（犬も）参加できます。このような新しいブームが、どのように今後フットパスの存続とウォーキング文化へ

影響を及ぼすのか、大変興味深いところです。

簡単に、イギリスにおけるウォーキングの環境保全の現状を説明させていただきました。つい最近（2016年6月）、英国は国民投票でEU離脱が決まりました。これによりEUによる補助金や規制が変更され、リーマンショック以来の大波となり、ウォーキングの環境保全がまた変化することが予想されます。不屈の英国魂「ジョン・ブル精神」*16で、この苦境をどう乗り越えるのか、今後も見守り続けたいと思います。

註

- *1 The Ramblers 英国におけるレクリエーション・ウォーキングとその環境保全活動をしているチャリティー団体。全国各地にウォーキング・グループがある。
- *2 Area of Outstanding National Beauty 特別自然景観地域。
- *3 プレス・リリース、Deputy PM commits millions to speed up completion of coastal paths, England's coastline : key facts より
<https://www.gov.uk/government/news/deputy-pm-commits-millions-to-speed-up-completion-of-coastal-paths>
- *4 Walking for Health は、イングランドでの活動。ウェールズでは、Let's Walk Cymru、スコットランドでは、Paths for All として活動している。
- *5 イギリス最大のチャリティー団体のひとつ。このチャリティー団体への寄付PR目的で設置されたロングトレイル、The Macmillan Ways は、イングランド中央部を東西に横切るルートで、470km ある。
- *6 環境省の傘下にあるイングランドの自然保護や改善のための政府外公共機関。
- *7 1973年のオイルショックにより、1977年ブリストルにて、徒歩、自転車、公共交通機関で移動することで、健康と環境に良い生活を送ろうと立ち上がった団体。
- *8 フットボール協会やラグビー協会などを含む、イギリスにあるスポーツ、レクリエーション関連320団体を総括する組織。スポーツの推進や活動サポートだけでなく、政府への政策提言もしている独立機関。
- *9 毎年園芸家たちが最先端のガーデニングデザインを競い合う世界的なイベント。5月にロンドン・チェルシーで開催される。
- *10 Visit England, The Value of Activities for Tourism 2015 より
- *11 CrossRail は、ロンドンを横断する新たな路線。ロンドン中心部は、42kmのトンネルを通るため掘削作業をし、それによる約500万トンの土砂をウォルシー島に運ぶ計画。

- *¹² Department for Transport・Local Area Walking and Cycling Statistics: England 2014/15、The Telegraph Outdoor Adventure & Travel Show, Statistics Based on 2015 Show を参照。
- *¹³ ブリテン島の背骨と言われているペナイン山脈を歩くということで、**Spine Race** という名が付いている。イギリス・アウトドア用品会社 MONTANE は、いくつかのエクストリーム・スポーツイベントのスポンサーをしている。
- *¹⁴ ヨーロッパ型のトレイルランニングの大会をイギリスでも開催したいと、2004 年から始まる。第 1 回は 80 名ほどの参加者が、去年は 1 万人まで増えた。靴のメーカー、アシックスがスポンサー。
- *¹⁵ 2004 年ロンドンにあるブッシー・パークから始まった。今では世界 10 ヶ国以上で行われている。
- *¹⁶ 風刺画などで使われる、頑固で不屈で誇り高いイギリス人の性格を具現化したキャラクター。

節田 紫乃 （せつだ しの）

1970 年東京生まれ。イギリス・ファルマス大学大学院広告学科卒。約 13 年間、国内外のテレビ・映像制作に、グラフィック・デザイナー、プロモーション・プロデューサーとして携わる。2004 年に渡英し、現在エセックス州の片田舎に、ヴァイオリン職人の夫、愛犬と共に暮らす。ガーデナーとして活躍するかたわら、イギリスを深く理解するために、ウォーキング文化をリサーチし続けている。

北根室ランチウェイ

トレイルの概要と魅力

北根室ランチウェイは、北海道東部、根釧台地の大酪農地帯と摩周湖外輪山をほぼ半周する 71.4km のトレイルである。「ランチウェイ」の名にふさわしく、広大な共同牧場や酪農家の庭先を通り、北海道ならではの雄大な景色を満喫できるのが最大の魅力。また、牧草地の境界にあるマンパス（牛は通さず人だけが乗り越えられるくぐり戸）も楽しみのひとつ。比較的標高の低い酪農地帯を抜けると、後半は西別岳や摩周湖外輪山を巡る山岳の道となり、変化に富んでいる。

※ランチ（Ranch）は「大牧場」の意味。

トレイルは以下の全 6 ステージからなり、2 泊 3 日で歩くのが一般的。

ステージ 1：中標津町交通センター～開陽台（14.8km）

ステージ 2：開陽台～レストラン牧舎（10.1km）

ステージ 3：レストラン牧舎～養老牛温泉（9.2km）

ステージ 4：養老牛温泉～西別岳山小屋（16.8km）

ステージ 5：西別岳山小屋～摩周湖第一展望台（11.3km）

ステージ 6：摩周湖第一展望台～J R 美留和駅（6.2km）



現在の整備状況

「歩く」という行為を通じて北海道を体感してほしいとの思いから、地元酪農家を中心とした有志により、2005 年からルート作りや道標の設置をスタート。2011 年 11 月

までに全線が開通し、供用を開始した。年 3～4 回の草刈りと道標の追加を定期的の実施している。

利用状況とその効果

2015 年頃より徐々にハイカーが増え始め、2015 年の年間利用者は 1,000 人を超えた。2016 年は 2,000 人以上になると見込まれる。

今後の課題

利用が増えるにつれて、ハイカーのマナーが問題となっている。牧場や牧草地は私有地となっており、トレイルは酪農家の理解と協力の上で成り立っているが、農道を横に並んで歩いたり、牛に触ったり、牛舎に入ったりする人が現れている。また、2 泊目で利用される西別岳山小屋では、既存の登山者との摩擦が生じることもある。

トレイル上の交通機関の確保も課題。現状では、途中に公共交通機関がなく、タクシーを利用しなければならないため、ハイカーからの要望が増えている。

その他

2015 年には NHK「につぼん紀行」に取り上げられたが、基本的にメディア対応は慎重に行い、日本ロングトレイル協会に合わせ取材を受けている。

また、トレイルランニングの使用も許可しており、2014 年から年 1 回ツアーを行っている。



トレイル便り 2

浅間・八ヶ岳パノラマトレイル

トレイルの概要と魅力

浅間・八ヶ岳パノラマトレイルは、長野県の東部、雄大な浅間連峰や八ヶ岳連峰を望む風光明媚なエリアにある。安藤百福センターを起点に、畑や田んぼ、雑木林など、多様な里山の自然と歴史を楽しめるコースとなっている。天気の良い日には北アルプスの穂高岳から白馬岳まで遠望でき、大パノラマを堪能できる。

周辺は、標高 700m 程度の里山から 2000m 超の山頂へと急峻な地形になっている。昼夜・年間の気温差がとても大きく、そのため里山に生息する動植物から、本来ならば 3000m 級山岳地帯に見られる高山性の動植物までが、この狭い一帯に混在しているのが特徴である。

また、この地域には、古くは東山道（とうさんどう）、江戸時代には中山道（なかせんどう）や北国街道（ほっこくかいどう）が通っており、様々な歴史や文化、伝説にも触れることができる。

本トレイルは、初心者でも歩きやすい 1 時間程度のコースから、数日かけて山々のパノラマを楽しむコースまで、距離や高低差、風景など様々。スケジュールや天候、体調などに気をつけながら、目的に合わせて「歩く旅」を楽しんでいただきたい。



現在の整備状況

センター周辺のコースとして、2011年に布引観音コース（5.0km）、蓼科・八ヶ岳展望コース（4.5km）、浅間・森林浴コース（4.0km）、御牧ヶ原コース（9.3km）を整備した。2015年からは、より歩きごたえのあるコースとして、千曲川コース（約16km）、軽井沢コース（約38km）、蓼科コース（約40km）の整備を計画・推進しているほか、浅間連峰の稜線に繋げる構想もある。

利用状況とその効果

センターの利用者が研修等で利用しているほか、トレイルを目当てに訪れる方も徐々に増えており、休日には多くの地元の方々が歩いている。それに伴い、トレイルの認知度も高まりつつある。

今後の課題

行政などとも連携して、トレイルの認知度をさらに高めていく必要がある。新しいコースに関しては、地権者などに了承を得て、道標を各所に整備するのが喫緊の課題となっている。

その他

日本ロングトレイル協会の事務局を安藤百福センターに設置しているため、マスメディア等で取り上げられる機会が増えている。



浅間山を望む（軽井沢コース）



田園地帯をゆく（御牧ヶ原コース）



眼前に広がる浅間連峰（蓼科コース）



断崖を仰ぎ見る（千曲川コース）

中央分水嶺 高島トレイル

トレイルの概要と魅力

マキノの愛発越（あらちごえ）から今津の山並みを経て、朽木の三国岳（さんごくだけ）へ至る 80km に及ぶ道、高島トレイルは、日本列島の日本海側と太平洋側を区切る中央分水嶺の中央部にあって、東西南北の気候や植生を併せ持つ、とても貴重な存在である。

この道のあちこちから望むことができる琵琶湖と若狭湾は、このトレイルが中央分水嶺であることを教えてくれる。ブナ、ミズナラ、アシュウスギの混生林をはじめとする多彩な森は、琵琶湖水源の森として我々の命を育み、木地師の時代から今日に至るまで、自然と人間の共生の暮らしが営まれてきた。

高島トレイルには、このような森を持つ 12 の名山（乗鞍岳、三国岳、赤坂山、大谷山、大御影山、三重嶽、武奈ヶ嶽、二の谷山、行者山、駒ヶ岳、百里ヶ岳、三国岳）があり、京都に近い歴史的風土であることから、共生の森として、若狭越と呼ばれる 12 の古道（愛発越、黒河越、栗柄越、近江坂、水坂峠、搦谷越、小原越、駒ヶ越、池河内越、木地山峠、根来坂、ナベクボ峠）が、高島トレイルを越えている。

このトレイルは、藪に埋もれていた古道や、かつて使われていた集落と集落とを繋ぐ山道、地元の人々がコツコツと整備してきた登山道などを繋ぎ合わせて完成したトレイルであり、高島の文化・歴史に思いを馳せながら、豊かな自然を楽しむことができる。



現在の整備状況

地元山岳会や日本山岳ガイド協会の協力を得て、春の雪解け時期を中心に、倒木除去や道標整備などを行い、梅雨時期には晴れ間を利用してトレイルを覆い隠すシダ類の除去も行う。トレイルの一部の山は地元集落の財産となっており、集落の方々と高島トレイルクラブとの協働でトレイルを



守っている。

利用状況とその効果

2015年度には約40,000人程度のハイカーが訪れており、ピークであった2008～2009年の約50,000人からは減少しているものの、日帰りハイクから宿泊型ハイク（民宿やペンション活用）が増えており、近畿圏のハイカーのみならず、東海、関東、東北からのハイカーが増加している。地域活性への貢献としては、この宿泊型ハイクが増加していることは非常に望ましいことである。



今後の課題

登山口へのアクセスは、大きな課題として、早急な対応が必要である。前述したように、遠方からのハイカー増により宿泊型ハイクが増加すると、ますます登山口へのアクセスの問題が浮上してくる。公共交通機関の不便さは、市役所とも問題点を摺り合わせながら解決の糸口を探ってきたが、官公庁の予算やルールの中なかでは限界もあるため、民間の運転代行業者による車両回送やレンタカーの活用、既存のローカル線の運行については、ハイカーが利用しやすい時刻の増便などを検討している。



また、トレイル整備計画から昨年で10年が経過し、やはりマンネリ感は否めなくなっており、既存の80kmからの延伸（琵琶湖西岸から琵琶湖一周）や、ハイキングだけではないトレイルの活用（青少年教育、企業研修など）に積極的に取り組む。

その他

高島トレイルのメディア露出は、以前のような目新しさはなくなったため、専門誌などで特集を組まれることは少なくなった。しかし、国内トレイルの先進地としての存在感を失うことがないように、旅行社への企画提案（販売）や、登山用具販売店への営業、各種イベントへの参加、SNSの活用など露出の機会を増やすように心掛けている。

また、掲載をタブー視していた旅行雑誌（一般的な観光地ではないため安全性の面から）への掲載も、特集記事などで安全面や必要な装備、知識などをしっかりと掲載することで、専門誌よりも多くの購読が期待でき、ファミリー層や青年層などへのPRに繋がるものと期待している。

第3回ロングトレイルシンポジウム

特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会 設立記念 シンポジウム

- 【日 時】 平成 28 年 2 月 20 日(土)13:30～17:00
- 【主 催】 特定非営利活動法人 日本ロングトレイル協会
- 【共 催】 公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団
安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
特定非営利活動法人 アウトドアライフデザイン開発機構
- 【後 援】 観光庁、長野県、長野県教育委員会、小諸市、小諸市教育委員会、
公益社団法人 日本山岳ガイド協会、全国「山の日」協議会
- 【特別協賛】 ミズノ株式会社
- 【参加トレイル】 北根室ランチウェイ(北海道)・奥津軽トレイル(青森県)・
信越トレイル(長野県)・浅間ロングトレイル(長野県・群馬県)・
霧ヶ峰・美ヶ原中央分水嶺トレイル(長野県)・
ハヶ岳山麓スーパートレイル(長野県)・
塩の道トレイル(長野県・新潟県)・
南アルプスフロントトレイル(山梨県)・白山白川郷トレイル(岐阜県)・
金沢トレイル(石川県)・山陰海岸ジオパークトレイル(鳥取県)・
国東半島峯道ロングトレイル(大分県)・高島トレイル(滋賀県)
- 【司会進行】 村田浩道(日本ロングトレイル協会)



挨拶 節田 重節

(特定非営利活動法人 日本ロングトレイル協会 会長)

みなさん、こんにちは。今回のシンポジウムは、いわば全国のトレイルの中央集会的な位置付けでありまして、毎年 2 月にこの小諸の地で開催しております。今回、長野県の吉澤観光部長にわざわざおいでいただきました。また、日清食品ホールディングスの安藤 CEO には昨年につき、おいでいただきましてありがとうございます。その他、ご来賓の方、ご登壇者の方、そしてご来場のみなさま、本当にお忙しいなか、ありがとうございます。協会一同、御礼申し上げます。

先ほど村田事務局長の話にありましたように、2011 年に任意団体の日本ロングトレイル協議会としてスタートしておりますが、昨年、長野県に申請しまして、新たに NPO 法人 日本ロングトレイル協会としてリスタートしております。安藤財団の理事長でも

あります安藤 CEO には、ロングトレイルに対して大変深いご理解と多大なご協力をいただいております。さらにはこの協会の名誉会長にもご就任いただいております。また、安藤徳隆 CMO には顧問もお引き受けいただいております。さらに財団のご協力で、協会の事務局をこのセンター内に置かせていただくことができました。みなさんご存じのように、長野県小諸市は、いわば日本の本州の中心にあると思います。我々アウトドアズマンにとっては、この小諸あたりこそ日本の中心であり、アウトドアの中心であり、メッカではないかと思っております。その小諸に事務局を頂戴できたことを、大変ありがたく思っております。

先ほど村田事務局長の話にもありましたように、おかげさまで現在 18 団体になっております。当初の 7 団体からかなり増えておりまして、今回もいくつか報告があると思いますが、北は青森県の奥津軽トレイル、次が千葉県の南房総ロングトレイル、山梨県南アルプス市の南アルプスフロントトレイル、長野県松本市の美ヶ原高原ロングトレイル、石川県の金沢トレイル、岐阜県の白山白川郷トレイル、鳥取県の山陰海岸ジオパークトレイル、最後に広島県の広島湾岸トレイルが加わっておりまして、18 団体となっております。その他、各地でいろいろなトレイル構想が進んでいると聞いておりますが、恐らく近いうちに 30 団体ぐらいになるのではないかと思います。

みなさま方には、今後ともご指導、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。本日は誠にありがとうございました。



挨拶 安藤 宏基

(公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団 理事長)

みなさま方、今日は雨模様で足元の悪いところをご参加いただき、ありがとうございます。この第 3 回ロングトレイルシンポジウムの開催おめでとうございます。そして NPO 法人として日本ロングトレイル協会が設立されましたけども、ロングトレイルに関するご協力、その努力の結果として、NPO 法人として形付いてきたことについて、大変ありがたく、厚く御礼を申し上げる次第でございます。多くの方のご協力があって、このような形の NPO 法人としてスタートすることができましたことにつきまして、誠にうれしく思っております。

安藤スポーツ・食文化振興財団は、創業者の生誕 100 年を記念しまして、この百福センターを設立したわけでございます。生前から創業者は、自然体験につきまして、日本の青少年の心身育成にはこれが一番だと。勉強ばかりではなくて、やはり自然の中で子どもたちの心身が育成されていくんだということを全国的に広げたいんだということで、岡島先生にお願いしまして、上級の自然体験活動指導者育成をスタートさせていた

できました。様々な分野があるなかで、ロングトレイルというのが、青少年に限らず中高年につきましても一番重要だということを感じまして、大変僥越ながら私も参加させていただくことになりました。

こういうなかでございますけども、私ども、いったい何ができるかということをいろいろ考えております。まず一つ、ホームページにつきましてリニューアルさせていただいたということです。そして、丸いマークに足跡のマークが3つ付いておりますのが、ロングトレイルのマークでございます。このような形でデザインも提案させていただき、この協会の所有として示させていただいております。もちろんこのセンターを設置しまして、みなさま方が気軽にご利用していただけるということも、重要なことと考えております。またこれからは、道標問題などもあろうかと思えます。山岳事故に対する危機管理につきまして、道標も単なる道しるべではなく、GPS 機能等が付いたものも現在検討しております。これはみなさま方のご要望に応じ、財団、そして日清食品も協力させていただきたいと思っている次第でございます。

ロングトレイルは、レクリエーションであつたり森林浴であつたり、歴史的な文化に触れることや土地の人々との触れ合いなど、多くを含めまして、総合的なものとしてこれからの時代に向けての生涯スポーツとして大変重要なものだと感じておりますので、今後ともこの活動につきまして下支えをさせていただきたく思っております。大変大きなビジョンといたしまして、中村代表理事は、数年後には 5,000km までになるだろうということを描いておられます。微力ではございますけども、ご協力させていただきたいと思っております。今日は大変お忙しいなか、お集まりいただきましてありがとうございました。



挨拶 吉澤 猛（長野県 観光部長）

みなさま、こんにちは。本日、第3回ロングトレイルシンポジウムがここ長野県の小諸市におきまして、このように盛大に開催されますことを、心からお祝い申し上げます。昨年2月のロングトレイルシンポジウムに続きまして、第3回シンポジウムが当地において開催されることを、長野県としても誠にありがたく思っているところでございます。

私どもは現在、本県の強みであります雄大で自然豊かな山岳や高原、そして美しい景観などを生かす形で、世界水準の山岳高原観光の実現を進めております。そのなかでも県内のロングトレイルは、本日お集まりのみなさまのご尽力によりまして、全国トップレベルの数となっております。世界水準の山岳高原観光の実現に欠かせない貴重な観光資源になると認識しております。近年、各地の地方自治体では、外国人観光客の誘致が

積極的に行われております。長野県におきましても、東アジアや東南アジアなどの市場を中心としまして、プロモーションを展開しているところでございます。日本ロングトレイル協会におきましても、海外から多くの人を引きつける持続可能なトレイルの設置と整備が設立目的の一つとお聞きしておりまして、今後ロングトレイルを活用した旅行商品の造成や、日本国内のトレイルの魅力を直接現地の旅行業者やメディアに伝えるなど、長野県としてもみなさまと共に取り組みを考えたいと考えております。

また長野県では、昨年から、県内のアウトドア事業者のネットワーク化と、情報発信を行うため、関係事業者によりますアウトドア推進協議会の設立と、ウェブサイトの構築などを支援しております。県内のロングトレイル関係者のみなさまにも、今後アウトドア推進協議会と一緒にになりまして、長野県のアウトドアを盛り上げていただくことを、併せてご期待申し上げるところでございます。

結びになりますけれども、本日ここにお集まりのみなさま方のお力で、長野県内、そして全国のロングトレイルが今後ますますにぎわうこと、そして、ご列席のみなさまのご健勝とますますのご活躍をお祈り申し上げまして、お祝いの挨拶といたします。本日は本当におめでとうでございます。

特別講演 青少年教育とロングトレイル

坪田 知広（文部科学省 初等中等教育局児童生徒課長）

みなさん、こんにちは。私は最初の方のフォーラムからずっとお付き合いしています。当時は、観光庁の観光地図作り担当の室長でございました。次に観光庁にいるうちにスポーツ観光推進室長になりまして、スポーツと人の交流、またインバウンドなどを結び付けるというなかで、「そうか、ロングトレイルもスポーツだな」と認識いたしました。そのときは論争があって、登山はスポーツじゃない、トレイルも違うという方とかなり論争したような思い出があります。

私が現在所属している児童生徒課は、子どもに関することは何でも行う課です。まさに自然体験活動の推進というのも仕事です。修学旅行も担当しています。もっとも出番が多いのはいじめとか不登校ですけども、普段から漢方薬のように、子どもたちの情操教育をしっかりやっていくことで、いじめになる・する状況を防ぎ、たくましい子どもを育てることがあります。不登校の子どもたちの中にも、満天の星空を見て元気をもらって登校できるようになるという子どももいることは確かです。今日お集まりの全国のロングトレイルを推進されている方々にネゴシエーションをして広げていただ



き、観光にもいいというなかで、教育に役立つのならお金を出そうかということが増えれば、みなさんのためになるのではないかと考えています。

実は、学校教育法にも、第 21 条の 2 項というところに、「学校内における自然体験活動を促進し、生命および自然を尊重する精神、ならびに環境の保全に寄与する態度を養う」と、書いてあったりします。また学習指導要領にも「集団宿泊活動や自然体験活動など豊かな体験を通して、児童の内面に根ざした道德性の育成が図れるよう配慮しなければならない」等々、何回か出てくるんですね。だから座学の道德の授業も大事だけど、学校に対してはですね、外で集団宿泊活動や自然体験活動などが一番、道德性を育みますよ、と説明している。宿泊は効果ありますよ。それも 1 泊ではなくて、できれば 2 泊ですよということです。いずれにしろ、法令でちゃんと位置付けられています。

ほかにもこの学校教育法というのは、普段の教育活動を規定する法律ではありません。いじめ防止対策推進法という法律が 2 年半前にできています。いじめが放置されている学校があったらですね、すぐトレイル歩きましょうよ、トレイル行かせましょうよ、と PTA の会長とともに進言していただくと、その学校が次の年から利用するようになるということでございます。そこで、まずロングトレイル各地のみなさんには、近くの学校を巻き込んでいただきたいですね。この前、北海道の某新聞から北根室ランチウェイについて、教育効果を教えてほしいという取材がありましたので、あらゆる効果がある、とお答えしたところです。

自然体験活動に関する調査をすると、93.7%が何らかの宿泊体験活動をやっていて、その中で自然に親しむ体験活動も 87.9%ということですが、宿泊でも 1 泊 2 日でどちらかというキャンプファイヤーだけが楽しみだったり、思い出作りの的なものが多かったり、単にみんなで一緒に寝泊まりしたというだけで終わっていないかな、というのが感じるところです。そのため、都会の子どもだったら農作業や枝打ちなど、山の子どもだったら海のほうに行ってもらって、漁師と共に地引き網の体験をしてもらうなど、本物の体験をお勧めしています。その中で農山漁村という、民泊も含めた体験を一番お勧めしているわけでございます。もちろん全国には、国が設置しております青少年教育施設もございます。民間でやられている様々な体験活動の場もございますので、最大限活かしながら、地場での体験をしっかりと地元の人と交流しながらやっていただきたいと考えています。

これは最近のエビデンスですが、何か体験活動を行ったら必ず数字で効果が出ないと、その予算は切られてしまいます。そのために、グラフなどを多用することになっていいますが、自然体験、宿泊活動を行ったら嫌なことがはっきり言えるようになったというような、ビフォー／アフターに関するデータがあります。それから積極性が向上したということ。子どもは一度修得したら、なかなか後退しません。だから 10 歳くらいまで、あるいは 14 歳くらいまでに、できるだけ濃い体験をさせたいものです。特に自然の中で行うことが、非常に効果があるということです。誰とでも仲良くできるようにな

ることや、自分で主体性を持って計画を立てられるようになること、人の話をきちんと聞くことができるようになったり、集団で行動しますから、役割を果たそうという意識が向上します。山の生活で、早起き、早寝の習慣もつきます。

次の効果として、優しさ、思いやり、ですね。このグラフに見るように、2泊3日より3泊4日、3泊4日より4泊5日とすればするほどいい。1年くらい預けると素晴らしい子どもたちになる。東京・武蔵野市は、長野県で6泊7日、セカンドスクールという名前で小学校6年生を活動させているんですね。武蔵野市は若干お金があることもあって、ほとんど食費くらいしか保護者から取らずに、後は市が負担して行っているということで、長続きもしているし、6泊7日くらいになるとすごく効果が高いということでございます。安藤財団さまでも、スポーツと自然体験、そして食文化をテーマにされていますね。食の大切さへの気付きが、特に長い宿泊体験の中では現れてきます。

今、なぜ自然体験の長い宿泊体験活動がなかなか進まないのでしょうか。学校を離れると学力にマイナスになる、塾の夏期講習が入っていますから勘弁してください、といった話になるわけですね。それを防ぐ一番の手は、「いや、自然体験したほうが学力も上がるんですよ。知っていましたか？」といったことを話すことです。全国学力学習状況調査では、体験しているほど国語も算数も学力が高い。理科なんて一番分かりやすいですよ。今は、学習塾が自然体験活動をそのようなことでフォローしていると言います。

学校の宿泊体験活動をどんどん支援しようということで、3分の1が補助金なので、やっぱり地方は二の足を踏むんですが、「よしやってやろう！」というところは、手を上げていただいているということもあります。それと、ロングアクティビティラーニング推進事業ということで、長期宿泊体験活動は、特にこんなに効果があるってことを一度出そうという調査研究事業を初めてやろうとしています。ロングトレイルというすごい資源をお持ちのところはですね、プログラムをしっかりと組んでいただいて、お声をかけていただくと非常にいい。

このように、いろんな支援策を講じているわけですが、何より大事なのはそれぞれの関係者がいろんなことを信じて、一つになって、ということですね。観光庁に関しては、あまり市町村境とか県境って関係ないですよ。一つのロングトレイルがどこをまたいでも一つだというような一体感とかですね、テイストが必要ですし、地図も自分の町内の地図だけで、後は真っ白い崖になっているような地図がよくありますが、それじゃ駄目だと思うんですよ。広域連携をお互いさまっというのでやっていただくのが大事なと感じます。

最後に、安全対策の面をどうするのかということです。それはまさに山の上で迷わないという、まさに先ほど安藤さまからありました、しっかりと道標を統一して見やすく整備していただくということ、また最近のGPSなどを使ったそういう対策。GPSも将来的には1mとか、10cmとかの誤差もなくなるというようなのが迫っているという噂もありますので、そういうのも大いなる手段になると思います。後はやっぱり人ですね。

これは文部科学省も人材育成機関ですからやっていかなければいけないというふうに思いますので、しっかりそこも育てていきたいと思います。一つ事故が起きるとみんな引いてしまいます。最近、一番マイナスだったのは、こちらからも近い軽井沢の高速バス事故だと思います。あのようなことがあると、学校側は、どう安全なバスを見抜くのかということになる。またバス全体が、安全対策を取ると値上げします。あんまりいい話ではなかったなというふうに思っていますが、これを機にですね、本当に安全な観光バスという形になって、子どもたちでも安心して山のほうへ自然体験に行ってもらえるようなバックアップをしていきたいなと思っています。そういうことも含めてですね、日本ロングトレイル協会が、まさにハブになって、いろんな省庁とか、いろんな市町村とか、いろんな団体を繋いでいただいて、いろんな情報共有と対策の提案をしていただきたい。それと、山の日「8.11」。今年から生まれますけども、何をしたらいいか、各省が何をしたらいいかということ、このロングトレイル協会さんもどんどん各省に提言していただいて、より良いものにしていくというようなことの役割も担っていただくと、我々行政も非常に動きやすいです。各省の連携も取りやすくなると思っています。また世界への発信というのも、大きなポータルとしての仕事になってくると思いますので、大いなる期待を最後に申しまして、私のプレゼンとさせていただきます。ご静聴ありがとうございます。

講演 スペインの巡礼街道を歩く

大久保 春美（公益社団法人 日本山岳会 副会長）

みなさん、こんにちは。日本山岳会副会長をしております大久保と申します。NPO 法人日本ロングトレイル協会設立記念シンポジウムで、このような話をする機会をいただきまして、ありがとうございます。



今日、ご参加のみなさんの中で、スペインの巡礼街道を歩いたことがあるという方はいらっしゃるでしょうか？ ちょっと手を上げてください。4人ほどですね。私は若いときにはひたすら高いところを求めて歩いて来ました。33歳くらいまではけっこうハードな山を登っていたんですが、その後、結婚して子どもを生んで仕事をしてという間、長いブランクがありました。子育てしながらも少し山は登っていましたが、いつかゆっくり時間ができたら旅をしたいなというのが、定年になった後の夢でした。で、そんななかで、2013年ですから2年前の6月から7月、1ヵ月強と、昨年11月に1ヵ月くらい、日本山岳会の仲間3人とスペインの巡礼街道を歩いてきました。3人のう

ちの仲間の1人は、今年の8月で80歳になる吉田さんという人です。私よりも元気でした。旅のゴールはサンティアゴ・デ・コンポステーラというところで、エルサレムやローマに並ぶキリスト教の三大聖地の一つです。歩く・泊まる・食べる、もうひたすら毎日毎日これの繰り返しの日々ですね。その中で歩くのにも楽しみがあり、泊まるのにも楽しみがあり、食べて飲んで楽しみがあり、という3つそろった旅をしてきました。

少し巡礼路についてお話をします。ヨーロッパ各地からサンティアゴに続く道があります。私が歩いたのは、フランスの一番下のところからで、たくさんある巡礼路の中で唯一、世界遺産に指定されているところになります。

巡礼路は約800km、厳密には775kmでしたけども、巡礼を歩いているとですね、みんなサンティアゴに向かっていくのかなと思うと、ときどきすれ違う人がいるんですね。ドイツから歩いて来たとか、パリから歩いて来たとか、いろんな各地からサンティアゴに向かって、すでに何千km歩いて、また自分のふるさとに帰っていく。失礼ですけど、あまり洗濯してないような服を着た、髭ぼうぼうで、という人たちにたくさんお会いすることがあります。道によってはですね、巡礼の宿舎だとか、ルートがなかなか見つけにくいというルートもあると聞いております。

巡礼のガイドブックというか、旅のガイドブックを2種類紹介します。右側は日本のガイドブックで、日本カミーノ・デ・サンティアゴ友の会さんが発行しているもので、今日持って来ましたが、これだとちょっとリュックサックに入れると重いので、日本にいる間にたっぷり、大体必要なことは読み込んでおいて、これは持って行かないで、もう一つ持って行ったのがこういうものです。こちらを開いてみると、中身はこんな感じになっております。英語・スペイン語・フランス語で大体の概要が書いてあって、これはサン＝ジャン＝ピエ＝ド＝ポル（Saint-Jean-Pied-de-Port）から、ロンセスバリエス（Roncesvalles）までの25.1km。このルートはちょうどピレネー越えのルートなんですけども、ルート上に舗装の道がどのくらいあって、土の道があって、それから標高差が書いてあって、こういうふうに行くところの標高差が大体絵で示してありますので、これですごく分かりやすいです。そして、サンティアゴをスタートして、こうやって0.5km先、そしてここから下がり3.1、3.1から2km、2kmの地点から2.4kmというふうに、ルート上に距離が示してあって、このAがここからここまで2.4kmのところはこのA、アルベルゲがありますよ、と。アルベルゲというのは巡礼宿のことです。このコーヒーのマークはバル、喫茶店と酒場が一緒になっているようなところですので、大体地図を見ていけば、分かるようになっております。

平均年齢77歳の3人組でしたので、本当に毎日、人を抜くことはない。ただひたすら抜かれるだけでしたけども、日によっては10kmちょっと、長いところでは25km、疲れ具合を見ながら休みを入れたり、半日歩いてそこに大きな世界遺産があるようなところであれば、観光を入れるというふうに毎日を過ごしていました。

次に道や宿が整備されている、と書きましたが、フランスの道のほうは巡礼宿が

非常にたくさんあります。公営のものとプライベート、民営のものもたくさんありますので、泊まる場所に困ることはありませんでした。ただ、約束事として、公営のアルベルゲは連泊できないということです。よほど具合が悪かったりするときには、例外だというふうに聞いてはおります。

寝袋も着替えも、一切背負って歩きます。私の荷物は、まあもともと私は山屋ですから、たぶんパッキングとか荷物を選ぶのは上手なんだろうと思いますけども、大体 **7kg**。シュラフから毛布から、雨具から入れて **7kg** くらいでした。スペインや現地の人たちも、日本でいうと富士山登山くらいの気持ちで一生に一度は巡礼の道を、という人がたくさんいらして、そういう人たちは軽身で歩いています。このような人に向けて、次の宿へ荷物を宅配するサービスがありました。

なぜ巡礼かと問われれば、ということでしたけど、先ほどお話ししたように、実は **60** 歳までずっと仕事をしたり、社会活動をしたり、家庭のことがあったりとか、私の中では常に段取りの生活で、いつかはあんまり段取りしないでゆったり時間を過ごしたいなという気持ちがあって、ちょうどそういう気持ちとスペインがぴったり合ったのかな、という気がします。自然とか文化とか様々なことに触れられると同時に、すべて自分で創り出していく旅は、私の好みに合ったのかな、という気がします。

旅の具体的な話をしますと、巡礼手帳というのを持っていないと、アルベルゲは泊られません。あらかじめ日本で発刊してもらった手帳があって、行く先々のアルベルゲやバルでスタンプを押してもらいます。日本のものは最高に素晴らしいって、どこに行っても言われるんですけども、きれいでいいですね。このスタンプの数がなくなると、途中の教会などで新しいものを発行してもらい、ゴールをしたところの巡礼事務所でちゃんと内容を確認してもらって、巡礼の証明書してもらいます。そして、巡礼と指定されるためには、歩くか自転車か馬のいずれかという決まりがあります。1つずつは小さいですけども、サン＝ジャン＝ピエ＝ド＝ポルのオフィスで、「今これからスタートするんですね」という、スタートのスタンプを押してもらいます。この貝殻と瓢箪、それから杖ですね、これが三種の神器と呼ばれています。馬に子どもさんを乗せて、もう1人小さい子をお父さまが背負って、お母さまは大きい荷物を背負って、テント暮らしという人もいました。自転車もいました。

たくさんある写真の中で特徴的なのは、見渡す限りの麦畑、見渡す限りのブドウ畑。この日は、たぶんこっちの山のはるか向こうから歩いて来ているわけですが、毎日毎日こういうような繰り返しです。暑くてつらいんですけども、ときどき振り返ったときに、今朝歩き始めたところがもう見えなくなっている、この「ああ、前に進めばここまで来るんだなあ」という、そのときに感じるなんとも言えない達成感、それが非常にいいものなんじゃないかな、と私は思います。

夏は昼間暑いので、朝の**5**時くらいからスタートします。これはちょうど日の出を見ているところですね。お昼過ぎには着いて、おいしいビールを飲んで夕方までちょ

っと昼寝をして、という生活です。フランスの道にはこういう黄色い矢印があり、人の民家の壁にも書いてあったり、いろいろな標識があるので、迷うことはなかったです。

もう一つ、先ほどのガイドブックに村の名前が次から次へと出てくるんですけど、村の入口には必ず町の表示があって、村はここで終わりというところには、標識に赤い斜線が引いてある。地図を見ながら「ああ、村はもう過ぎた」という感じで見ておりました。

ホテルなどはほとんど泊まりませんでした。これは教会のアルベルゲ。今年 1 泊 6 ユーロでしたけど、2 年前は 5 ユーロでした。日本人はこういうマットレスが床に敷いてあると、とてもほっとしますね。こういうところも何ヵ所かありましたけど、ほとんど 2 段ベッドだったり、4 人ごとに仕切りがあったりというようなところなんです。ですので、耳栓は必需品です。もう庭には女性も男性もお構いなくパンツまでいろいろ、下着も干しています。ただ夏のシーズンは乾きやすいので、着替えは 1 組だけ背負っていけばいいということです。アルベルゲにはキッチンが付いているところと付いていないところがありますけど、できるだけキッチンのあるところで自炊をして、それからいろんな国の人とコミュニケーションを図る。これもまた泊まる上での楽しみでした。

これは食いしん坊の大久保です。村の中のレストランで、アルベルゲがあるところは大体小さいレストランがあります。2〜3 年前は 8 ユーロくらいのところもあったんですけど、去年は、2 品好きなのを選んで、サラダとパスタを選び、飲み放題がうれしいサービスで、12 ユーロくらいです。牧畜が盛んな国ですので、ハムもソーセージもベーコンも何切れでも買えますので、「ハム 3 切れください」って言って、サンドイッチにしたりしました。果物も 1 個 2 個と数で買えますので、これも翌日の食事にしました。歩きながら食べる楽しみもありました。

これは世界遺産のレオンという大きい都市ですけど、そういう古い歴史と出会うこともできます。韓国はキリスト教徒が多いので、非常に韓国の若者が多い。同じ顔付きをしているので、韓国の人からよく話しかけられたり、こちらも話しかけたりしますので、非常に親しく話をする機会が多かったです。見れば分かるんですけど、みんな派手なんですね。すぐ分かるんですけど「アンニョンハセヨ」とか言いながら、お互いにとても勉強になりました。

長く歩いていると地域が変わって、そこの植物も農作物も村の文化も様々ですので、楽しめます。教会がアルベルゲを経営しているところもけっこうあります。人気のあるところは、門が開く前からずーっと並んでいます。私たちもビールを飲みながら開くのを待っていました。巡礼者のためのミサなどもありますので、私はキリスト教徒ではありませんけども、ミサには参加させていただきました。こういうシスターたちの歌声を聞くこともできますし、巡礼者はとても癒やされます。いろんな国の人たちが一緒にミーティングをする中で、国の紹介があったり、歌を歌ったり。私はどういう目的で巡礼をしているんだという、巡礼の目的を話し合ったりしながら顔見知りになると、翌日

以降の抜きつ抜かれつの中で「ハーイ」とか「昨日の歌は良かったよ」とか、私たちも年寄り集団ですので、若い人たちはよく声をかけてくださった。

基本的なことです、泊まることについては巡礼宿が、フランスの道については十分なほど整っています。昨年 11 月はオフシーズンで、半分くらいはクローズしてあったので、行程を選ぶのには、多少いろいろ調べながら進んで行きました。この 2 年間で、2013 年には公営は 5 ユーロだったのが、6 ユーロに値上がりしていました。食べるということに関しては、レストランとか、それからスーパーがあります。スペインはシエスタといって、お昼寝の時間とか昼休みが長くて、買い物のタイミングを逸してしまうと、なかなか物が手に入らなかったりしますので、その辺に気を付けていけばあまり問題ないかな、と思いました。水とワインが同じくらいの値段で買えるので、「水とワイン、どっちがいいですか？」ってレストランで言われると、「もちろんワイン」という感じでやっていましたけど、自炊のときにもスーパーで 1.5 ユーロか 2 ユーロくらいで、大きなワインボトル 1 本くらい買えますので、3 人で十分という旅の毎日を送っていました。1 日 4,000 円程度と書きましたけど、これはけっこう贅沢なレベルです。食事・自炊にしても、ヨーロッパの若者たちは、夕飯は何も入っていないパスタと水を飲んだりとか、クッキーと水で夕飯を済ませたりとか、ヨーロッパの若者はずいぶん質素だな、という印象がありました。

今日、写真を探して見つからなかったんですけど、トイレの話だけしておこうかと思っています。800km の中で、よくある簡易トイレは 1 ヶ所だけありました。本当に私が出会ったのは 1 ヶ所。それもとっても汚くて、とても使う気にならないようなトイレでした。朝、歩いている途中でどうしてもトイレに行きたいときは、バルに入ります。バルがあると、お茶を飲んだついでに必ずトイレをして、また歩き始める。どうしようもないときは、道端でやっていました。あまり臭くないというか、大きい方が落っこちていても臭くないのは、乾燥しているせいかな、と私は思っていました。行程の中で「トイレするな」の表示は 1 ヶ所だけ、たった 1 つの村にありました。絵が描いてあって、大便をぽとぽとと落としている写真にバツと書いてある図が、1 ヶ所だけ置いてありました。その辺、日本は湿気があるし、臭いだろうな、と思いました。スペインは臭くないなと思いながら、でも、ちょっとトイレしたいなと横道にそれると、そこには紙がいっぱい散らかってありました。私はなるべくビニールに紙を入れるようにしましたが、そのあたり、とっても大きな課題ではないかな、という気がしました。

2013 年と 2015 年で経験した違い、これはもう、私の主観的なことですが、2013 年は 5 月から 7 月までハイシーズンでした。ですので、いろんな国との交流が多かったというのが印象です。やはりハイシーズンで、お天気もいいし、お花も咲いているし、ベストなシーズンに行くといい。2015 年は 11 月で、日本の秋と同じようで、特に西のほうに近づいていましたので、雨だとか霧が大分多かったですね。人が少なく、人とのコミュニケーションがほとんどなかった。それから気が付いたのは、2 年前はやはり

人と人との情報交換をしていたんだけど、スマートフォンとかタブレットの利用者がずいぶん多くなって、タブレットなどで、自分で情報を得ている姿をたくさん見ました。私自身は荷物も多いですし、スマホを持っていたけども、普通にインターネットをすると値段がすごく高くなってしまいますので、一切使わないでおりました。宿にもレストランにもバルにも、昨年 11 月に行ったときには「Wi-Fi が使えます」「パスワードはこうこうこうです」とか、ほかには「受付にパスワードを聞いてください」というのがありました。2013 年と 2015 年のインターネット環境の進み具合というのは、ずいぶん変わったな、というのが私の印象です。

私自身、ずっと障害のある人のスポーツを行ってきて、いろんな障害者と接する機会があるんですけども、障害のある人もいました。それから知的障害なんだろうな、発達障害なんだろうなという人たち。今回、抜きつ抜かれつしたイギリスから来た家族がいたんですけど、やっぱり不登校の、たぶん中学生くらいだと思うんですけど、どこの国にもある問題なんだなと思いながらも、ときどき話を交わしたりしながらいました。そんな経験をした 1 ヶ月のような気がします。

まとめに入らせていただきますけども、歩く、前に進むことの大切さを本当に体で実感することができました。巡礼者に対するスペインの人のおもてなしはとっても自然体で、特別な目で見えるわけでもなく、普通に町の中で、特別なおもてなしをするわけでもなく、自然体でありました。すべてのコースに対して安全であって、歴史遺産を大切にしているということを感じました。繰り返しますけども、歩くこと・食べること・泊まること、それぞれストレスを感じず生活することができました。環境については申し分ないところです。たぶん、普通は気がつかないところでも、たくさんの奉仕活動が展開されているんだろうなということは憶測できます。道の整備だけではなくて、アルベルゲなども公営のアルベルゲについては宗教団体や様々な団体のボランティアの人が、ハイシーズンにはヨーロッパの各国から来て、ボランティアでアルベルゲを運営しているというように思われるところもありました。したがって、アルベルゲに行ったらスペイン語が通じなくて「英語なら私は分かるわよ」というような受付の人もずいぶんいらっしゃって、「どこの国ですか？」と聞くと、ヨーロッパ圏だったりしていました。あと標識もそうでしょうし、1 日の行程の中で丸 20km 近く、一切民家も何もないようなところもありますし、荒れている道もありますけども、いろいろな村や町、様々な道路がルート整備されていますので、そういう面で国の支援もあるんだろうな、ということは推測できました。

多くの時間を過ごすことができましたけども、結局考えて、頭に浮かぶことは自分の人生だとか、自分の周りの環境に感謝をする、そういう気持ちに気付けた巡礼の環境に、私がもう一度感謝をするということだったと思います。ご清聴いただき、ありがとうございました。

講演 ロングトレイルを旅する

シェルパ 斉藤 (バックパッカー・作家)



僕は18歳まで松本にいました。山に囲まれた環境にいたんですけども、そういうところで生まれ育つとどうなるかっていうと、そこにいたくなかったんですね。周りが全部、山。今だと素晴らしい環境だと思っているんですけど、周りは全部山だと、ここで終わりたくないというのがすごく強かった。18歳まで松本にいたんですが、高校卒業のときに家業が倒産してしまいまして、それで家も全部取られてしまって、身一つで東京に出て行ったんです。ですからここで終わりたくないというのは、結果的に倒産によって、夜逃げによって始まりました。そのときに、人間というのは身一つ、コンパクトに背負えるだけの荷物でどこでも生きていけるんだ、というのを体験しました。自分で寝るところを見つけ、お金を稼ぎ、食事も自分でまかなえばいいということですね。ようするに、バックパッキングの旅、しかも自分の足で歩いて行くっていうのは、それじゃないかと思っています。

ちょっと写真をお見せいたしますと、実際、世界あちこち行きたいと思ったのが、松本に生まれたというのも関係あるんじゃないかと思っています。自転車であちこち旅をしました。当時は世界中どこでも行くっていうのに、自転車っていうのが飛行機にも積んでいけるし、それから交通機関がないところへ、どこへでも行けるという意味では、非常にバランスが取れた乗り物だと思っていました。それで僕は一度も就職しないまま、卒業してからいきなりフリーライターになりまして、時間は山ほどあった。もうお金をいかに安く上げるかと、自転車であちこち旅していました。それで最後、帰るのどうしようか、どこで旅を終えようかと思って、気付いたのがですね、世界で一番高い山が見える麓まで自転車で行ってみたいと思いまして、これが当時の写真ですね。もう30年近く前になります。自転車で、エベレスト街道というところをほとんど担いで行きました。普通はルクラという町まで飛行機で移動しますが、飛行機に乗るお金がなかったものですから、ジリというところからずーっと延々と担いで担いで、最後、エベレストのベースキャンプまで行くことができました。標高5400mあると思うんですが、そこまで自転車を担いで行きました。それで一応世界最高峰を見られたし、「やった」ってことで日本に帰ったんですね。そこで当時、ちょうど100号記念だったんですね、『BE・PAL』という雑誌が。今も連載しているんですが、そこで「お前体力あるし、時間があるし、金ないから、うちで連載やれよ」と言われて、100号記念として東京から大阪まで、東海自然歩道っていう長距離自然歩道があるから、それを全部歩いて毎号ルポしないかって言われました。ネパールから帰ってきたばかりだし、しかもシェルパ

族みたいな顔をしてるので、「シェルパ斉藤」って名前になって、かれこれ 26〜27 年になります。

日本には、当時はロングトレイルが全然なくて、東海自然歩道っていう長距離自然歩道をずっと歩くことになったんです。フリーのライターだったので、本当に仕事が毎月あるっていうのはすごくうれしいことですし、しかも「うまく行けば本にしてやる」と言われて、喜んで引き受けたんですけど、書くネタがなかったらどうしよう、という不安がすごくあったんですね。ところが実際に歩いてみると、毎号いろんなことがある。だから自分がここではこれをしよう、ここに行ったらこういうのが名物だからそこを紹介しようとかですね、一応考えては行ったんですけど、何も考えなくても歩いていけば向こうからドラマがやって来る。それは、今やっているロングトレイルの旅なんかもそうなんですけど、あれをしよう、これをしようって考えて下調べをしていくのもいいんですが、ただ歩くことによっていろんな出会いが生まれるし、思わぬ発見がある。歩く旅の面白さってそこだな、と思ったんですね。

例えば車で移動している方に、道端の方はまず声をかけない。ところが歩いてると、「どこから来たの？」という声をかけてくるし、それからすぐに疲れちゃうっていうのが逆にいいんですね。疲れたら休むっていう、休んだことによって発見があるし、出会いがある。例えばですね、犬がついて来ちゃったりとか、それからいろんな方と仲良くなったりとか、それをそのまま書いていけば本として最高に面白い。

それで僕は、さらに旅の面白さにますます惚れ込んだんですね。いろんなことができる。それまでは、「遠いところに行かなければ」「すごい発見がないと」なんて思っていたんですが、こんな東京から大阪までってところを歩く。そんな厳しいところではなくて、そこを歩くだけでもいろんな出会いがあって、ドラマがあるっていうのは、じゃあどこを旅しても面白いんじゃないか、と思いまして、それからずっと 30 年近く旅をしています。

基本的に好きなのは、やっぱり歩く旅ですね。食料から寝泊まりできるものも全部背負って、自分の足で歩いて行く旅がすごく楽しいですね。

それから 2002 年ですね。ちょうど日韓ワールドカップがあった年に、毎年必ず世界各地を歩いて旅しようと思いまして、単純にできているトレイルを歩いていこうと思ったんですね。まずネパールから始めました。世界的に誇れるトレイルの中で、ネパールの中から何か 1 つ選ぶとしたら何かって言われたら、僕はアンナプルナー一周を選んだんですね。それは、トロン・パスっていう 5600m 近い峠を越えるんです。ムクティナートとか、ジョムソンを越えてぐるっと一周するんです。しかし、なぜ有名なエベレスト街道じゃなくて、この地を選んだかっていうとですね。エベレスト街道って言ってしまえば、ルクラっていう町から出て、最後カラパタールっていう 5600m くらいのところまで行くんですが、同じ道を通らなきゃいけないんですね。ようするに、カラパタールに着いた、でおいしいじゃなくて、またルクラに戻って行かなきゃならない。僕は、同

じ道を通るのがあんまり好きじゃなかったんですね。僕にとってトレイルって何かって言うと、常に違う景色を見ていきたい。さらに、地図の中に1本の線を描きたいんです。その意味で言うと、エベレスト街道のような街道はですね、ルクラからカラパタールに行って、同じ道を、より線が濃くなるだけだなど。それよりもアンナプルナはぐりと一周するので、ここからここまでぐるっと歩いたぞと。僕の中のロングトレイルは、そういうイメージが強くなりました。

大体世界のロングトレイルをあちこち歩いていると、2パターンあります。1つは、このネパールみたいに、もともとある道。特にネパールなんかは山奥のほうに行くと、それしか道がないんですよ。モータリゼーションとか発達してないので、結局どんな偉い方もお金持ちの方も、車が通れないから歩くしかない。そこにはかつて日本もそうだったんでしょけど、昔の旧街道とかがですね、必ず1日歩けば旅籠みたいなのがあったりとか、茶屋があったりとか。それはまるで自分が江戸時代にタイムトリップしたような感じも味わえる。

それがやっぱり一つの面白さで、もう一つは日本なんかも目指すでしょうけども、歩く旅を楽しむために作った道ですね。そこを歩く。で、これはヨーロッパなんですけど、もっとも有名なオートルートと呼ばれている、言ってしまうと「高い道」というふうに訳されるんですけども、これもずっと国境を越えて行けるんですよ。僕が歩いた道はフランスのシャモニ。モンブランの麓の町から国境を越えてスイスに入って、マッターホルンの麓にあるツェルマットという町まで2週間かけてずっと歩くんですけど、ゴールのツェルマットのすごくいいのが、ちゃんとキャンプ場があるところです。ツェルマットって普通に泊まるとすごく高いです。ホテルなんか泊まるとけっこういい料金取るんです。ですから、シャモニやほかの町なんか行っても、大体いいホテルはあるけど、そばにはキャンプ場もある。ですからそうすると、お金持ち以外の、本当にお金のない若い旅人なんかでも宿泊ができる。安く旅ができる。そういうキャパシティの広さというか、敷居の低さは、すごくヨーロッパの旅に感じますね。素晴らしいと思います。例えば、これなんかも一応ホテルなんですけど、同じホテルの中の1階の上の部分、天井の部分はちゃんと山小屋形式です。ですから、さっきのスペインのアルベルゲもこんな感じなんですけども、相部屋でドミトリーで、しかも下のホテルは1泊5,000~6,000円から8,000円、1万円近くするんですが、ここだと1,000円とかそれくらいで泊まれちゃうんですね。

これは南米のペルーですけども、昔の道を歩く。ですから日本で言えば、もともとある歴史ある道を自分の足で歩いていく。ここは個人旅行が許されてないですから、ツアーに参加して行くってことになるんですけども、これはこれで面白いです。いろんな国の方と仲良くなれますから。食事なんかも全部用意されています。最後、3日目の朝なんですけども、朝早く出て、向こうを見るとマチュピチュが待っている。ですから、普通に行っても感動するんだけど、自分の脚でインカトレイルっていう昔の道を歩いて行

くと、自分で歩くことによって歴史的考察ができる。日本でも、歴史ある道を歩かせるロングトレイルというのに、すごく魅力を感じると思います。歩くことによって、いろんなことを考えられるんです。それは時代考証とかですね。例えば、ここは坂本龍馬が脱藩していった道かなとか、なぜこの道を武将は選んだのかとか、いろんなことを考えながら行くっていう意味でも、日本はそういう可能性が高いと思います。

これは、有名なニュージーランドのミルフォード・トラックというところで「世界一美しい散歩道」と訳されたりもしますが、ここが面白いなと思うのはですね、1日のキャパシティが決まっているんですよ。必ず40人。40人といってもですね、ガイドもちゃんと雇って、ロッジに泊まる団体を40人。それに対して、自分で荷物を全部背負って、食料も自分で作って。そういう方をインディペンデントウォークって言うんですけど、それも40人。だから1日80人しか通れない。しかも、みなさん船で渡って行くんです。これがガイドウォーク。ここに泊まると食事を用意されるし、シーツも全部用意される。インディペンデントウォークの使う山小屋には、ベッドがあって、自分で食事を作ったりするところもある。1日ここに泊まったら、必ず翌日出て行かないといけない。ここは全部、一方通行なんですよ。スタート地点が決まっていたら、ゴール地点まで、ミルフォードの最後のところまでずっと、マッキンノン・パスを越えて行くんですけれども、すれ違うことがないんですね。1日決まっているから、次の団体が出たら、本当のところてん方式に押し出されていく。そういう意味では、自然環境もしっかり保てますし、料金もしっかり取ってやっている。こういう方法もあると思います。

これは北極圏ですね。スウェーデンは、今は「王様の散歩道」と訳される道があります。実際、王族も歩いたりしていたらしいんですけど、この時期は一応山小屋もある中で、山小屋以外どこでもテントを張っていいということになっています。彼らの考え方としては、自然はみんなで分かち合うものだ、国民で享受するために自然はあるんじゃないか、というんですかね。

これはエチオピアですね。歩いてしか行けないところに入り込んでいく面白さっていうのがあります。エチオピアは、こういうふうにならなくて歩くというシステムがなかったところを、歩けるように整備したのが、C・W・ニコルさんです。彼はエチオピアのシミエン山岳国立公園の初代公園長です。

多くの方が目指すものは、やっぱりアメリカのアパラチアン・トレイルじゃないかなと思います。これに関しては、僕なんかよりも加藤則芳さんが話すべきトレイルですし、加藤則芳さんは、いろんな書物を書いているので、それをぜひとも読んでいただきたいと思います。僕はほんのちょっと1週間くらい歩いただけなんですけども、それでもやっぱりいいなと思ったのは、標識が分かりやすい。これが3,000kmくらいずっとあるんですけども、こういうタグ、ペンキが塗ってあるんですよ。曲がるよってというのが本当にもう、直感的に分かりますね。で、こっちに曲がっていくと、ちゃんとそちら側のほうに次の道がある。テントを張らなきゃいけないんですけど、そのシステムもしっかり

しています。途中、こうやって熊なんかに出会ったりもしますが、大丈夫です。安全です。犬を連れていらっしゃる方がけっこういらっしゃいますし。素晴らしいのは、歩いている方々をもてなす地元の方々ですね。ここでも、お年寄りや年金暮らしの方が、自分の町を通る方々を片っ端から泊めるんですよ。僕も泊めてもらったんですけど、それぞれにお金を使って、毎日毎日、食事や洗濯もするし、しかも送り迎えもしちゃうんですね。食事も食べ放題で好きなだけ食べろと。こんなことをきちんとやっているって、素晴らしいと思います。

これはヨーロッパ、スコットランドなんですけども、ここなんかでも牧場を歩かせてもらっています。北根室ランチウェイなど、雰囲気もすごく似ているんですけど、牧場とかも自己責任で開けて、それをまた閉じて通って行くと。で、こうホテルがあって、そのホテルの近くには必ずバーがあって。泊まり賃もこうやって宿泊代を安く上げて、バーで飲む。

この2人は初日からずっと一緒に、たぶんおじいちゃんと孫娘だな、いいなと思っていて、最後に話を聞いたら、「これはわしの自慢の孫娘で、まだ10歳なのに100km歩くんだ」なんて、ちょっと自慢げに言う。僕の子どもが、もう23~24歳になって、一緒に歩くのも通り過ぎたんですけど、僕はこれを目指そう、孫連れバックパッカーになりたいと思った。孫と一緒に歩く旅をするというのは、今の僕の目標でもあります。言ってしまうと、この子のお母さんなりお父さんなりが、このおじいちゃんと2人だけで行かせてくれるという信頼関係を築いているって関係も素晴らしいし、お年寄りに対して尊敬の念もありながら、いろんなことを孫娘に教えつつ歩いて行く。こういう文化をぜひとも日本にも作ってもらいたいと思います。

それと、よくロングトレイルを歩くっていうときに、山とかきついところを歩けなくなったから、これからはロングトレイルでいいやってことで、ロングトレイルにしまったというような、実は本音かもしれないけども、そうやってほしくない。若い人が、例えばほかの国なんか見ていると、スペインなんかもそうですね、本当に世界中から若者が集まってきて、で、これはこれで面白いと思ってやっている。それで誇りを持って歩いているというのが素晴らしい。

日本では山登りする方の中に、上に来られないやつらが麓をうろうろ歩いているぞ、とロングトレイルを見下している人も少なからずいるんです。でも、そういう環境に僕らは持って行きたくない。これは面白い旅なんだって自信を持って、若い人も歩ける環境を作っていただきたい。ロングトレイルってカッコいいじゃない。例えばそれは、ニュージーランドなんかでもアメリカでもヨーロッパでも、みんな若い人たちが自分の荷物を背負って堂々と歩いているってカッコいい。ですからそういう、今アウトドアメーカーなんかでもカッコいいファッションとか、そういう方向に行ってほしい。あくまでもリタイア組が歩くのがロングトレイルだって、そういう方向性は避けていただきたいなと思います。

これからみなさんに目指してもらいたいと思うのは、世界に発信してもらいたいなということです。さっきのスペインもそうですが、世界各国からいろんな人が集まってくる。例えば、四国のお遍路なんかは世界から集まっていますけども、日本のロングトレイルってこんなに面白いぞってことを、世界中の旅人が来て歩けるような感じに持っていつていただきたいなと思います。実は僕、これからですね、今年から「日本のトレイル紀行」という連載を考えています。日本のロングトレイルの良さを伝えていきたい。これから 2020 年のオリンピックに向けて、世界に発信できる観光資源としても、観光以外の面白味としてロングトレイルがあるっていうことも伝えていくには、みなさん頑張って、日本のロングトレイルを盛り上げていつていただきたいと思います。僕の話は以上でおしまいです。どうもありがとうございました。

提言

日本ロングトレイル協会の果たすべき役割と使命

中村 達

(特定非営利活動法人 日本ロングトレイル協会代表理事)



みなさん、こんにちは。日本のロングトレイルがいったいどうなっているかというのを少しお話ししたいと思います。これまでの講演で、大体ロングトレイルはこういうものかというのがお分かりになったかと思いますので、後はかいつまんで要点だけ申し上げたいと思います。

ロングトレイルってこういう道を歩けばいいよねという、そういうイメージかなと思います。去年、日本で発売された『わたしに会うまでの 1600 キロ』。これが映画化されまして、アカデミー賞にノミネートされました。山とかそういうものをまったく知らない女性が、ドラッグとか男性問題などで離婚して乱れるんですね。その人が、このトレイルを歩いて自分を再発見するという実話なんです。これが映画化されて、大ヒットして、その本はオバマ大統領も読んだと、それくらい衝撃を与えた本でございます。アメリカっていうのは、そういうものが話題になるような国なんだというふうに思います。

これはヨーロッパのトレイルですね。先ほど白い矢印、マーキングがありましたけど、これはヨーロッパです。これが岩とか木に塗ってあります。この通り進めば行ける。そのような簡単なものが随所にあります。これはイタリアのドロミテです。子どもや学校が多いんです。これは正しいことだと思います。もうどこに行ってもこんな感じです。びっくりしました。トレイルって、日本のトレイルと違ってマウンテンバイク OK なん

です。自転車 OK、もちろんトレランも OK、ウォーキング OK、なんでもありなんですね。そういう意味では自由に遊べるようになっている。

これはもうご存じですね、日本のアウトドアのトレンドです。山ガール。今ちょっと落ち着きましたけど、中高年が相変わらず山を歩いています。そのほか、外国人観光客、これインバウンドですね。それから地方の活性化、地方創生、先ほど話に出ましたけど山の日。今年の 8 月 11 日、上高地でその記念イベントがあります。それがオリンピックに続く。そういう意味では歩くっていうのが、非常に面白い時代に来たなと思います。

日本のアウトドア人口は、登山が約 850 万人。一時 1,000 万人を超えたんです。どうして超えたか。その前までは 600 万人だったんです。じゃあ、登山人口が増えたのでしょうか。このデータを取ったところは、『レジャー白書』ですね。そこの研究員に電話しまして、「これおかしいんじゃないか？」って聞いたら、実は調査方法が変わったと。調査をネットに変えたら、若い人が多くなった。で、もう一つは登山の定義がされてないんです。ここは非常に大事です。登山人口が 800 万人なんて、10 人に 1 人が山に登っている計算になるんですね。そんなおかしい国はないやろ。ヨーロッパ、特にアメリカなんかですね、非常にアウトドアが盛んです。累計でいきますと、10 億単位の人間がなんらかのアウトドアアクティビティをやっている。その中で登山は何人いるのか、ハイキングは何人いるのか、と聞いていたら、約 3,500 万人、ハイキング人口がいるんですね。ところが、登山人口は 250 万人なんです。どうしてかというと、登山というのは岩と雪と氷。これが入っているところを登山と言うと、はっきりしている。いわゆるトラディショナル・マウンテニアリングなんです。日本は高尾山登山も冬の富士山も、みんな登山なんです。登山人口が 1,000 万人を超えたという特集を、山と溪谷社が出しました。

それともう 1 つは、名称の問題をよく聞かれるんです。名前。じゃあハイキング、トレッキング、マウンテニアリングなどいろいろあるけど、どれが正しいんやと。アメリカの雇用統計は、しっかり出ています。特にアウトドア統計は、しっかり出ている。その中には、日本で使っているトレッキングという言葉はありません。全部、ハイキングです。いわゆるマウンテニアリング、クライミングとハイキングです。非常に幅広い中に、バックパッキングがあります。その辺が定義なんです。この辺がですね、しっかり定義をしていかないと、混乱するだろう。ぜひ一度検討していただきたいというふうに思います。我々の日本ロングトレイル協会でも、この辺の名前、名称は、はっきりしないといかんだろうと思ってます。

じゃあ、ロングトレイルって何なのってよく言われるんです。ロングトレイル。トレイルを作っている人がトレイルって言えば「まあそうやな」っていう話。ものすごくいい加減な話なんですね。そういう言葉って、実はないんです。ところが今から 3 年前に、ロングトレイルというのは、やっぱり誰かが使って商標権取って、使えなくなったら困ると思ひまして、実は日清食品さんに「お金がかかりますが、商標権を取ってください」

とお願いをしました。条件は、誰でも使えるのが条件ですとお願いしたら、取ってくださったんですね。これで安心ですので、自由に制限なく使っていただけるというふうに思います。

これも関係あるんですが、去年 1 年間のメーカーの出荷額です。アウトドア用品、1,800 億円くらいです。小売りにいきますと、3,000 ちょっくらいマーケットですね。ただし今は、みなさんご存じのように、ファーストファッションがあります。ファーストファッションの機能性ウェアは、この数字に入っていないんですね。某ユニクロさんとかですね、みなさん着ておられる某ヒートテックとかは、入っていないですね。それを入れるとかなり大きなマーケットになってくるのかなという気がしますが、アメリカの比ではありません。アメリカは巨大です。例えばアウトドアで、毎年どのくらいの雇用を作っているかと言いますと、約 600 万人です。これは警察とか鉄鋼とか金融とか、そういったものよりも大きい。それがアメリカのアウトドアマーケットですね。

先ほど斉藤さんから話がありましたけども、ロングトレイルで最高というのは、日本アルプスの稜線やと思います。ここはもう快適なハイキングルートですね。ところが、ここの駄目なところは、冬は歩けない。強烈な吹雪で強烈な気候ですから、歩けない。ロングトレイルというのは、地域の活性化に何らかの形で寄与している。例えば、観光や人材の雇用ですね。そういう意味では、残念ながらアルプスは強大すぎて、高いところにありますから、なかなか地元の活性化とは結び付かないということがあります。そこはちょっと違う。我々の言っているロングトレイルというのは、地域の活性化とか雇用とか、あるいは自然体験とか旅とか、そういう要素が強くて、安心して歩けるっていうんですかね、そういうところをロングトレイルというふうにしましょうと言っているんですが、残念ながら日本というのは、先ほどのスペインの巡礼街道のような、ああいう広々とした場所は少ないんですね。やっぱり山になっちゃう。どこに行っても里山でも、やっぱり山歩きなんですね。ですから、きちとした装備をする必要がある。取材で「ロングトレイルで何が必要ですか？」って言われると、「基本的にはハイキングと一緒に、健康な山歩きです。ですから、必ずしっかりと装備をして歩いてくださいね」というふうに申し上げています。これは日本の特徴かなと思います。

定義について、これもちょっと抽象的でやや曖昧ですけども、こういうことを一応定義にしています。年間を通して歩けることが大きなポイントやなという気がします。

先ほども紹介がありましたけど、3 トレイルほど来られませんでしたけど、今は 18 団体あります。実は明日、総会がありまして、この顧問のみなさんというのは一部、何人かは設立総会で議決されていません。その後にご承認をいただいた方もおりますので、明日、正式に承認を受ける予定です。日本を代表する企業のみなさんが「分かりました。やりましょう」というふうに言っていただいて、非常に意を強くしているところでございます。

私が把握していて、今、開設しているところは薄い水色のトレイルですね。これ以外

にもまだたくさんあります。たぶん東北のほうにもあると思いますし、九州にもあるでしょう。こういうところができ上がっていくと、大体カウントで 30 近くあります。これからもっと出てくると思います。

みなさんのお手元にお配りいただいたと思うんですが、日清食品さんのデザインルームに無償で作っていただいたロゴでございます。見飽きるほど見られているかも分かりませんが、『日経トレンディ』で注目されて以来、ロングトレイルがあらゆる雑誌に出てくる。それとこういうふうに新聞記事にですね、ほとんど毎日とは言いませんが、毎週出ています。全国 18 トレイルですから、もうあらゆるところが出ます。今日はちょっと急用で来られなかったんですけど、広島湾岸トレイルも出てきます。このように全国にトレイルがあります。

私どものロングトレイル協会というのは、例えば、あるトレイルを認定するというようなことはしておりません。そのトレイルを見に行くのに、何十 km もあるトレイルを調査するわけにはいかない。一応、基準だけを決めていまして、後は各トレイルでしっかり自己判断でやってほしい。むしろロングトレイル協会というのは、ゆるやかな情報啓発のネットワークです。どんどんトレイルができて、日本列島に 5,000km くらいできればいいな、と思います。そこに内外からたくさんのハイカーとか、あるいは自然好きの人が来て歩いて、特にインバウンドで外国の方々がバックを担いで、しっかり歩いている姿が出てくれば、日本のアウトドアも少しは品格が上がるんじゃないかな、と思います。時間が来ました。どうもありがとうございました。

提唱

第 1 回「山の日」記念全国大会の上高地での

開催について

加藤 銀次郎

(松本市商工観光部部長・山の日記念大会推進室長)



松本市山の日記念大会推進室というところで室長を務めております、加藤銀次郎でございます。私、生まれも現在の居住も、上高地のふもと、旧安曇村というところなんです。今でもそこにいて、あまり外へ出たことがない。私、山大好きですし、松本山雅（サッカーチーム）も大好きで、今年年男のまさに山猿でございます。どうぞよろしく願いをいたします。

みなさん、この写真を見ていただきたいなと思っております。この写真、長野県側から見ました乗鞍岳の山頂付近の写真でございます。この写真、4 月ぐらいですかね、麓

の乗鞍高原から見た写真ですが、この中にある動物がいるのが分かりますか？ 雪形の中になんか動物が見えてきます。このあたりです。実はこれ、ライチョウですよ。乗鞍岳はライチョウの生息地としても知られていますが、ちょうど冬毛から夏毛に変わる頃、ライチョウの雪形が出てまいります。

もう1枚写真をご覧いただきたいと思います。これも6月上旬の乗鞍高原の一ノ瀬というところから見た乗鞍岳の山頂方面ですが、この中にも何かに見えますよね。白いウサギです。地元の人たちは、ユキウサギというふうに言っています。

今度は河童橋から見た穂高岳。この写真も6月上旬です。この中にもある動物がありますが、気が付いた方もいらっしゃるかもしれません。答えは犬、プードルです。名付けて上高地のポチ。時期によっては牛にも見えるんですね。実はこの雪形、私が勝手に名付けて遊んでいるマイ雪形なのですが、穂高岳にはほかにも、前穂の東壁にビーグル犬って出るのをご存じですかね？ 塩尻あたりから遠く見ますと、まさにビーグル犬の顔そのまま出てきます。そのほかには、ウェストンと嘉門次。涸沢側にはハイジやコウモリの雪形も出てまいります。

今あまり知られていない、マイナーな3つの雪形をご覧いただいたんですが、日本では古くから、雪形を季節の変化を正確に知るための対象、つまり暦の代わりとして活用しています。農事歴といったほうがいいでしょうか。そして、様々な歴史や伝統なども生み出してきています。海外では雪形という風習はあんまりないようですし、このことから考えますと、日本の雪形というのは、世界に誇る素晴らしい文化ではないかなって私、常々考えています。この信州は、雪形の宝庫でもあります。雪形探しをしますと、山に対する見方が変わってくるというふうにも言われています。なぜ貴重な時間を費やして冒頭からこんな話をさせていただいたかと申しますと、山の日を考えると、この雪形というのは非常に分かりやすい山と人との関わりであり、山の恩恵そのものではないかな、というふうに考えているからです。とともに、人々が山と共に生きてきたなかで培われてきた、まさに貴重な山岳文化の最たるものだというふうにも考えています。ぜひ山の日を契機に、この価値を再認識していくことが重要ではないかということで、冒頭にお時間をいただきました。

本題に入りますが、みなさまご承知の通り、この山の日でございますが、国民の祝日に関する法律に規定をされます16番目の国民の祝日として、誕生したものでございます。「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する」というふうにしております。14番目の祝日として制定をされました海の日でございますが、運動が始まって制定されるまで、たしか36～37年かかっているかと思います。

この山の日ですが、本格的な運動が始まってほぼ4年程度で制定に至るという、予想外と言いましょ、極めて異例とも言えるスピードで決まったものであります。もちろん様々な環境に恵まれたということもありますが、何よりも超党派の国会議員による山の日制定議員連盟と、全国「山の日」制定協議会がまさに車の両輪として大変なご尽

力の上でなされた祝日制定である、と受け止めております。

一方、とんとん拍子で制定に至った分、山の日についてまだまだ知らない国民のみなさまが多い、というのが現状であります。ぜひ我々関係者一丸となって、周知啓発に努めながら進めていく必要が大いにあるのではないかな、と考えております。

大会の開催地につきましては、昨年の5月に開催をされます全国「山の日」協議会総会で、第1回の記念全国大会は長野県松本市上高地で開催をするということで、お決めいただいたところですよ。私たちは、その意義について、このようにまとめさせていただいております。まず長野県は、まさに日本の屋根と称されまして、多くの3000m峰を有する日本一の山岳県でもあるということ。そして松本市は、山岳の都「岳都」を標榜する、まさに日本を代表する山岳地であるということ。そして長野県も松本市もですが、いち早く「山の日」制定協議会に参画をしまして、様々な機会を通じ、山の日制定の機運醸成の後押しに努めてきたという結果がございます。

とりわけ上高地でございますが、今からちょうど120年前でございますが、みなさんご承知の通り、イギリスの登山家ウォルター・ウェストンの著書によって世界に紹介をされております。つまりウェストンが書いた『日本アルプスの登山と探検』という本が、今からちょうど120年前、イギリスで発刊をされた。これによって北アルプスが世界に紹介をされたということがございます。そして中部山岳国立公園、国の特別名勝、特別天然記念物にも指定をされている場所であるということがございます。

この山の日でございますが、世界で初めての山を対象とした祝日というふうに言われております。私も世界の祝日を調べてみました。なかなか調べきれないのですが、60カ国ぐらいの祝日を調べてみたんですが、やはり多いのは戦勝記念日とか独立記念日。君主の生誕記念日なども多い中で、日本のように、海の日とか山の日というのは極めて異例だなあということを改めて感じております。これはまさに、日本人が古くから海の民・山の民と言われる所以ではないかな、と考えております。別の言い方をすれば、日本人の文化や日本人の考え方、気質といってもいいのではないのでしょうか。これは山や自然から大きな影響を受けて創り上げてきたものであり、大げさかもしれませんが、日本人の心っていうものは、山によってできたと言っても過言ではないかなと、個人的には受け止めております。つまり、山が気象を作り、気象が風土を作り、風土が人間の気質や文化を創り上げてきたということから考えれば、そんなことが言えるのではないかな、というふうにも思っております。

この美しく豊かな自然を守って次世代へ受け継ぐことを明記すると、そういう意味も込められて山の日が制定をされたというふうに理解をしております。

こうしたことを踏まえまして、今回の第1回の記念大会でございますが、次のような理念、4点に絞って今整理をしております。1点目は、山の日への関心を高めて浸透を図ることで、山と人との関わり方を見つめ直す機会にしたいということ。2つ目は、山に関する様々な課題の解決に繋げて、地域の活性化を図る機会としていきたいというこ

とでございます。とりわけ、子どもたちへの自然体験機会をどう増やしていくかということも重要な課題ではないかなと思っておりますし、登山道や遊歩道の整備についても様々な課題がございます。3つ目は、次代を担う子どもたちと一緒に、山の未来を創造していく第一歩の日としていきたいということ。そして4つ目でございますが、世界で初めての山を対象とした祝日の制定であるということから、日本人の山に対する姿勢などについて広く世界にも発信をするとともに、幅広いネットワークを構築できるような、そんな機会にもしてまいりたいというふうに今整理をしております。

大会の概要でございますが、記念式典につきましては、山の日当日8月11日に、上高地会場を中心としまして、松本市内会場との2つの会場で実施することを今考えております。山の日宣言とか、山への感謝を表す行事などを通じまして、山の重要性、もちろん山の日制定の意味も含めてですが、山の未来の創造といったようなメッセージを発信していく機会にしたいと考えております。記念行事につきましては、主なものは、レセプションを行いたいということと、各国大使のみなさまにもご参加をいただきながら、山に関する国際的な会議なども行ってまいりたいというふうに考えております。

大会のメイン会場となります上高地についての豆知識、覚えておいていただくと上高地に行くとさらに楽しくなるというお話を若干させていただければと思います。まず、年間の観光利用客数ですが、実はこんな状況が続いております。平成に入って200万人前後で推移をしていたのですが、平成16年以降、観光バス規制が始まったということもあって150万台へと大きく減っていきまして、その後も年々減少しているという状況をたどっております。昨年には130万人を割りまして、平成に入って最も少ない利用者数を毎年更新しているという状況が、この5～6年続いています。

こんななか、上高地に外国人が非常に増えているという状況もございますが、この話は飛ばしまして、上高地について概観をお伝えさせていただきたいと思います。この上高地というのは、非常にリピーターが多いところです。全国の観光地の中でもリピーター率が極めて高いところがございます。私自身も上高地へ行くというより毎日、上高地に行っても決して飽きることはありませんし、毎回新たな発見や感動があるのがこの上高地という場所です。一瞬たりとも同じ表情がないという、何千枚、何万枚写真を撮っても同じ写真ってまったくないというところですね。まさに「感動の大自然」というタイトルにふさわしい場所だというふうに言われております。

今感動という言葉を使わせてもらったんですが、この感動というのは非常に情緒的なもので、なかなかその裏付けというのは難しいわけなんです。知床、日光、上高地、立山という全国を代表する自然山岳系と言いますでしょうか、山岳自然系の国立公園で利用者の意識調査を行ったものですが、その中に大変興味深い結果があります。いくつかの設問の中に各国立公園の比較として、総合満足度、感動度、そして人生が豊かになったかどうかというのがございます。いずれも素晴らしい観光地ですが、その中でも上高地

は満足度、感動度ともに一番高く、人生への豊かさへの貢献ではずば抜けて高いという結果になっています。

では、上高地の何が人生の豊かさ貢献をしているかということですが、実は結論から申しますと、雄大な山岳景観はもちろんですが、それに並ぶ、あるいはそれ以上の要素として、梓川の流れや池、せせらぎなど、水のきれいさや美しさが影響をしているというふうに分析をしております。どういうことかと言いますと、私たちは上高地を訪れた方を対象に、様々なアンケート調査を行っているんですね。その中で一番多かったもの、何が一番感動したかという調査結果の中で常にトップに挙がるものは、実は川や池などの水のきれいさなんですね。これは、私たちにとって意外なものでした。次に山の迫力や動植物の美しさというようなことが言われます。水のきれいさというのは、事前予測やイメージの中にあまりないということで、感動の印象度が高くなるという、そういった側面もあります。この分析は、また時間があるときにさせてもらえばいいのですが、結論から申し上げますと、上高地では親水性、つまり水に近づくとか触れるとか、または流れや池を眺めるということが、実はあまり知られていない大きな魅力である、と位置付けています。

上高地はどんなところかということですが、ごく短く申しますと、標高約 1500m の梓川に沿って開けた、この地表の溪谷全体を上高地と私たちは呼んでおります。標高や盆地状の特殊な景観ということもあって、貴重な動植物が生息する豊かな生態系を作り上げている場所であるということ。別の言い方をすれば、山と水と緑とが絶妙のバランスで作上げた、類い稀な景観を誇る場所だというふうに申し上げております。

もう 1 点だけ、ぜひお話ししたいことがあります。上高地の歴史でございます。上高地や山岳の歴史年表をよく目にするんですが、その中には播磨上人とか、ここがございます、ウィリアム・ガウランドによる槍ヶ岳登頂から始まっているものが非常に多いわけなんですね。近代登山をテーマにしたものであれば、これで十分だと思うのですが、上高地の歴史を伝えていくときに、これでは何か大事なものが抜け落ちているんじゃないかな、と私は思っております。何が抜けているかと言いますと、たとえば槍ヶ岳の頂に立たずとも上高地では杣人（そまびと）、今でいう木こりですが、その杣たちが生きるための場所として、なんと少なくとも二百数十年以上もの間、この上高地に関わってきた歴史があるということです。

つまり江戸時代ですが、松本藩直轄の木材生産事業が盛んにこの上高地で行われていたという歴史があるということでございます。当時は、上高地梓川流域の一帯の森林というのは「お立て山」というふうにも言われまして、松本藩にとっては表高に表れない、表高っていうのは 6 万石だとか 8 万石っていうのと同じですが、これには表れない、いわゆる隠し財産的な収入源であったというふうに言われています。当時、北アルプス信州側一帯というのは松本藩有林でございますが、ここからの木材生産による収入は、実は大きなウェイトを占めていまして、藩財政に大きく貢献をしていたということがござ

います。

そして、梓川が木材の流送路として盛んに使われたという事実もございます。それとともにもう1点、みなさんご承知の方も多いと思いますが、上高地は林業だけではなく、牧場としても、なんと50エーカーも使われていたという事実がございます。

上高地の地名についてのお話を、最後にさせていただきたいと思います。まずみなさんお気付きの通り、上高地には人名の付いた地名が非常に多いわけですね。実はこれは先ほどお話をしました、柚人が作業中に山や川の事故で亡くなった場所です。この地域で古来より亡くなった人の死を悼み弔うという思いから、人の名はその地に残してきたということです。徳本峠(とくごうとうげ)ってみなさんご存じの方多いと思いますが、実は徳吾(とくご)という人の名前にちなんでつけた場所です。徳吾という場所は今の明神、ちょうど白沢と梓川の合流点あたりを指す場所なんです。峠というのは、峠の向こう側の地名を付けるというのが習わしですので、まさに松本方面からは徳吾に向かう峠だったということ。この徳吾が、ある事情があつてこの「本」に変わったというふうに、私は理解をしております。

そして、奥又白、中又白、下又白とあり、前穂東壁へのルートとして有名なところですが、実はこれ、又四郎さんにちなんで付けられた。当時は又四郎の名前が付いていたところを、登山者らが「四郎」を「白」に変えたということです。この例って、シロウマからハクバになった例とまったく同じですが、実はこれが正しいのです。

もう一つ、長堀山(ながかべやま)。徳沢から蝶ヶ岳に続く尾根沿いの山ですが、今でも地域の古い人と話をしますと、ナガヘイと読みます。実は長兵衛(ながへい)が元です。長兵衛さんだったのですね。いずれも地元の人ではない、登山者の人たちがこういうふうな記載をしながら変わっていったということで、ナガカベ山ではなくて、ナガヘイさんがなまってカベにしたところが、今長堀山と呼ばれるようになったということでございます。

ここにあるように、太平(たへい)とか善六(ぜんろく)、八右衛門(はちえもん)というのはすべて柚の名前です。これはウェストン碑のところから見た霞沢岳ですが、この正面の右側の雪渓が八右衛門沢ですね。上高地には自然ばかりではなくて、山と人との関わりの歴史がたくさん残っているということを感じていただくと嬉しいです。

最後に、私たち山や自然体験活動に関わる者として、ぜひこの山の日を契機に考えなければいけないということを常日頃考えているところでございます。どうやって山に親しむ機会を増やしていけるか、ということではないかなと思います。とりわけ先ほどの、山に親しむ子どもたちへの機会をどう増やしていくかということ。これは私たちの極めて重要な責務ではないかな、というふうに考えております。現在、信州ほど学校登山が盛んな県もございませぬ。そんななか、少しずつ減ってきているということも心配なんです。山や登山というのは、子どもたちに生きる力を育む最高の教育環境であるというふうに思っております。具体的には、引率ガイド費用の公的負担等ですね、学校登山

の制度、学校登山を支える仕組みの整備も含めて、学校登山の全国への普及拡大についても大いに提唱したいな、というふうに考えております。ぜひ第1回の「山の日」記念全国大会の成功に向けまして、それぞれのお立場で最大限のご協力をいただきますよう、また盛り上げをいただきますようお願いを申し上げまして、本日の「山の日」記念大会についての提唱に代えさせていただきますと思います。ご清聴ありがとうございました。

報告 国東半島峯道ロングトレイル

みなさん、こんにちは。国東半島峯道トレイルクラブの山岡です。私たちの国東半島峯道ロングトレイルというのが、去年の3月に全コースをオープンしました。こういった場で紹介するのは、初めてです。最初にまず概要から説明していきたいと思います。

私たちの国東半島峯道ロングトレイルは、所在地が大分県豊後高田市と国東市の2市にまたがっております。総距離数が134.6kmと公称をしております。



運営団体ですけれども、国東半島峯道トレイルクラブで、こちらは現在、会員数が46名となっています。ただ、実質ガイドができるのは10人ぐらいかなと思っております。

コースのコンセプトですが、日本初、日本唯一のソウルツーリズムという形をとらせていただいております。同時に、九州初の公式ロングトレイルであること、この2本柱です。

地図を見ていただくと分かりますが、国東半島の中心にあります両子山を中心に、ぐるりと一周回るような形でコースを引いております。もともとこのコースは、国東半島で古くから行われておりました六郷満山峯入行の舞台です。白装束の天台宗のお寺の方によって過去に行われてきた、山岳宗教というか開祖の苦勞を偲んでというか、その境地に迫るという行事で、10年に1回行われているものです。私も歩いたことがあるのですが、写真には結構険しい場所が出ている一方で、実際に私が体験した峯入というのは、大体6割7割は舗装道で、実質あんまりおもしろくない。修行ですから、おもしろいという要素はいらないのですが、この道をそのまま歩かせてしまうと、ちょっと大変なのかなということで、私たちのロングトレイルでは、もっと登山道とか遊歩道を追加して、もう少し歩くのにおもしろいものを作っております。

特徴としまして、国東半島というのは、神仏習合の発祥の地でもあります。至る所に石仏等が並んでいて、俗に「み仏の里」とも呼ばれております。また同時に、世界農業遺産というものに制定されまして、昔の日本人が自然や農業との関わりから作り出していった景観、そういった日本人の原風景というものが多く見られる土地でもあります。

この日本の原風景の中を歩く旅はその昔、仏教という異文化を取り入れて、神仏習合を確立していった寛容な心など、現代では失われかけている、いわゆる日本人の豊かな精神性、いわば日本人の魂、ソウルに触れる旅になるのではないかと、そういう意味でソウルツーリズムと名付けております。

簡単に見所紹介をしていきます。こちら熊野磨崖仏といいまして、豊後高田市にあるんですけど、ここが私たちのロングトレイルの起点となるポイントになっております。これが田染荘と呼ばれるところです。非常に懐かしい風景だと思うんですけど、こちら宇佐神宮の荘園として誕生したもので、743年とか書かれておりますけど、当時の姿をそのまま残している。まさしく、ほんとに日本の原風景と呼ぶのにふさわしい場所かなと思います。

コース上には国宝もありまして、富貴寺になります。それから、ここが峯入では結構有名な場所なのですが、天念寺耶馬というところですよ。天念寺の裏山ですが、この耶馬という言葉は険しい山とか険しい岩山を表す言葉になっておりまして、国東にはほかに耶馬と付いたところがたくさんあります。これが峯入で有名になった無明橋というところですよ。

それから、コース上にはいわゆるお宿があります。スパランド真玉さん、ここは豊後高田市の一つのお宿になっておりまして、ロングトレイルができてから着実に人が増えている、宿泊客が増えていっているという報告を受けております。

次にこちらが、猪群山の山頂から東にありますストーンサークル。これは神体石ですが、過去には作家の松本清張さんなんかも登って有名になりました。こちら中山仙境ですよ。雑誌の『山と溪谷』などでよく、「何も高いばかりが山ではない」というようなキャッチコピーで何度か紹介をしていただきました。非常におもしろい岩山ですよ。その岩山の麓ですね。霊仙寺、実相院、六所宮。要はこれ、お寺が2つ、それから神社が1つ、完全に隣り合って並んでいる場所ですよ。国東にはお寺には必ず奥の院があったりする、そういったところで、このお寺は昔は1つのお寺だったそうです。それが分割され、こういった規模で残っている、非常に国東らしいところなのかな、と思います。

今までは豊後高田市側だったのですが、今から国東側に入っていきます。こちらが大不動岩屋と言いまして、山の中に大きな洞穴があって、そこに立つとこんな風景が見えるよ、という感じです。一応、国東側ではここをメインのビジュアルにしております。

それから、国東が誇る旧千燈寺の史跡ですよ。写真だと表現しきれないのですが、不思議な空気が満ちていて、それこそ僕が感じるに「静謐」という言葉を表す空間というのは、ここを超える場所はないな、と思っております。

コースの上の方から、岩戸寺などいろいろお寺はありますが、1つ2つビジュアルで紹介します。こちらが文殊仙寺というところで、3人寄れば文殊の知恵で有名な場所ですよ。それから、文殊仙寺をスタートして成仏寺、神宮寺、泉福寺と行くのですが、最後こちらが行入ダム公園というところですよ。行入寺のすぐ下にある、行入ダムのほんと

に湖畔にある公園です。この「行入」という言葉、後で話をしたいので覚えておいてください。

行入ダムを出発しまして赤松の里、それから狭間新池が含まれているこの K-4 コースというのを、私たちは世界農業遺産のコースというふうに呼んでおりまして、赤松の里であれば、クヌギ林だとか櫓場（ほだば）だとかですね。こちらの狭間新池は、国東には 800 くらいため池がありますが、そういった感じのところですよ。

梅園の里ですけど、国東側にある宿泊施設で、コース上にあります。天文台も併設させていることで有名です。両子山、いわゆる国東の最高峰で 721m ありますが、ここに登った後、中腹にあります両子寺に行って、とりあえず一周 134.6km 回ったというような感じです。

国東半島峯道ロングトレイルの成り立ちですが、国東市のほうで 2011 年から行われました地域雇用促進事業というなかから誕生しました。最初、私のほうが話をさせていただいた後、高島トレイルの前川さんにも来ていただいて、次にトレイルフォーラムを開催していただきました。そして、今年の 3 月に全コースをオープンしていったという流れになっております。

そのなかで私たちが目指したものというのは、いわゆる雇用の創出です。国東の風土を活かして商売繁盛を生み出しましょう。これが本当の目的でした。当然そのためには全国に売っていく必要があるということで、そこでロングトレイルという名前を使わせていただこう、九州初で成立させよう、ソウルツーリズムという名前で売ってしまおうという方向で、これもみなさんで考えました。登山客って僕もそうですが、なかなかお金を落とさないという感じで、お金を落とさない仕組みをなんとか緩ませないと、財布の紐を緩ませないといけないということで、登山客を「登山観光客」に変えるための仕組みっていうのを、みんなで考えていこうとしました。ツアーの造成からガイドینگ、それからグルメ、さらに登山客の心をつかむお土産とグッズですね。

現状報告です。ロングトレイルというブランドをいただきまして、どんどん人が増えています。実質的な 2015 年の実績です。ツアー等ご利用のお客さま、これはうちのクラブのほうガイドをしたお客さまの総数になっていますが、1 年間で 830 人。まだまだ少ないですけど、過去はゼロだったわけなので、進歩かなと思っております。フリーのお客さまは大体 3,500 人ぐらいから 4,000 人ぐらいは入っているだろう、ということですよ。

開催イベントですけど、これも去年の実績ですが、結構な数やらせていただいております。今日、本日、今まさにロングトレイルの豊後高田支部のほうでイベントが行われている最中です。行政さんからの補助を受けて、いろんなアイテムを作らせていただきました。ポスター 2 点、リーフレット、それからマップがないのかとよく言われるんですが、全コース分のマップが 3 コースずつ、全種類で 10 冊存在します。踏破記念品もコース別に作らせていただいております。また、スパランド真玉さんのほうには情報

発信基地として拠点整備事業というのをしていただきまして、泊まり客の方が全国のロングトレイルの情報をつかめるスペースも設けております。それからまた、国東市さんからの援助を受けまして、ソラシドエアの記念誌に向こう1年間、ロングトレイルを掲載させていただきました。

グルメのほうです。お弁当はまだまだバージョンアップの開発途中といったところです。それから国東では「お接待」という文化があります。トレイルエンジェルに通じるのではないかなと思うんですが、地元の人が歩いている方をもてなすという文化が、国東にはもともと残っております。

国東半島のロングトレイルは130kmぐらいありますが、全コースずっと歩いても大体2~3km歩けば必ず下界に降りるんですね、必ず車道に降りる。私たちのイベントのときには、基本お弁当は持っていない。降りてきたところにケータリングし、その場で食事などとしていただく仕組みを作ったりもしております。

今後の課題です。ガイドの不足、それから二次交通対策、幕営地の確保。実際こういった問題に悩んでおりますし、みなさまからメールをいただくなかには、本当にこの点に関して毎回問い合わせとお叱りをいただいております。こういった観光の課題は、私どもだけではなく、おそらくどこのトレイルさんも持っているのではないかな、と思っております。

一番の問題は、僕らの活動が本当に地域を元気にしていますか、ということです。これを僕らは求めています。国東の山の中に、タクシーが通ってほしいというわけではありません。実際にそれができているのか、もう1回成り立ちに戻ります。泊まり客が増えております。でも、宿のほうで「じゃあ何人か雇用されましたか？」NGです。まだロングトレイルで雇用は生まれておりません。それからブランド作り。これはロングトレイルの名前を使って、一応成功はしているのかなと思いますが、最後に残るのはアイテム作りと登山観光客に変えようというテーマです。私が山に行ったときに欲しかったのは、富士の金剛杖ですね。国東でもああいった杖を作りたい、杖をついてお寺に行ったら、そこのお寺の焼き印をずっと集めていく。これがあったら、登山観光客っていうか登山客でも欲しがらるかな。そんな話をすると、あるうちの委員の方が、国東には行入という地区があるじゃないか、と。行に入る、そういう地名の地区があるじゃないか、と。そこでその木材を使って行入杖っていうのを作ろうよ、と。この国東の道を歩くのであれば、この杖を使って行に入ってくださいね、というアイデアを出してくださった方もいます。

それからもう一つ、成仏（じょうぶつ）という地名があります。まさしく仏に成るとい土地ですが、お陀仏じゃありません。その成仏でも木材が取れるので、その木材を使って杖を作しましょう、そこで焼き印を全部押して満願成就したら、きっと極楽浄土のほうに成仏できますよ、というような、そういうアイテムがどんどん生まれてきているんですけども、これもまだまだ実際商品化には結び付いておりません。でも、私た

ちは諦めることはしないというふうに誓っております。何も分からないときにロングトレイルを作ろうといったときに、手を差し伸べてくださった協議会の方がいらっしゃいました。国東のことを、イベントに来てくれて好きだって言うてくださるお客さんがどんどん増えました。休日返上でコースの整備をしているうちの仲間たち、彼らの苦勞っていうのは、本当に大変なものがあるのかな、と思っております。昨年の3月に全コースオープンしたんですけれども、ここまで来られた。だから私たちは諦めません。これからも努力を続けていこうと思っております。

最後になりますが、これからは遅々としてますが、しかし止まらずに歩き続けようと思っております。このようなトレイルですけれども、ぜひとも応援をよろしくお願いします。本日はご清聴ありがとうございました。

報告 北根室ランチウェイ

北根室ランチウェイの佐伯です。北海道から来ました。ロングトレイル協議会に加盟いたしまして、長野県にこれで5回来ることができました。北海道の知床半島のほうのトレイルです。よろしくお願いします。

北根室ランチウェイというのは、中標津の交通センターからJR美留和駅まで、71.4kmのトレイルです。

どこにあるかっていうと、北海道の一番端の知床半島の根元のあたりにあります。これは、公共の交通機関から公共の交通機関に繋げるトレイルということで始めました。空港からずっと歩いているってようなキャッチコピーを作って、ポスターにしております。これが最後のJR美留和駅です。

北根室ランチウェイの年表を簡単にご紹介します。2005年に始めて、2010年、前身の日本ロングトレイル協議会に入りました。今は北根室ランチウェイという名称に統一しています。NHKの「にっぽん紀行」という番組に取り上げていただきました。今年、安藤スポーツ・食文化振興財団から支援をいただきまして、携帯のアプリの地図で供用できるようになっております。

第1ステージは23kmぐらいのコースで、中標津の交通センターからレストラン牧舎まで。そこから西別岳山小屋まで、これも27～28kmです。最後は山岳コースが西別岳山小屋から美留和駅。これは摩周湖の外輪山をぐるりと、ほぼ湖を半周するようなコースで、とても見晴らしの良いコースです。僕がこのトレイルを始めようと思ったのは、小学校の5年生のときにこのコースを歩いて、この道に続けると70kmぐらいのトレイルができるのではないか、ということで作った道です。

シルバー人材センターにお願いして、おじいちゃん方に草を刈ってもらいました。そ



れから道標を作りました。私のメンバーには看板屋さんもいて、その方が作ってくれました。サインも作りました。今手刈りの草刈りは大変なので、こういう機械 2 台で刈っております。結構これは有能で、1 日に何十 km も刈れる機械です。

秋口になると、午前中も熊とか鹿が出ますから、ハンターがたくさんいるので、ハイカーが誤射されると問題になってくるかなと、こういう看板を作りました。

この道のコンセプトは、「歩く旅は楽しい！」ということで、観光地の広域化を目指すということです。小さな町から小さな町まで歩いて旅をしようというのが、私たちのコンセプトです。それから、子どもたちに歩く楽しさを教えたい。たくさん子どもたちが利用してくれればいいんですけど、まだ子どもたちが利用してくれないのが現状です。このトレイルは、牧場の中を歩くというのが特徴で、みんなに非常に人気のあるトレイルです。牛と接近できたり、牧場の真ん中を歩けたり。トレイル上には飛び石の橋があったり、こういうサインがあったり、それから熊よけの鈴、これは熊の出るような場所にあり、自分で鳴らすということです。これはマンパスといって、牛は通れなくて、人間だけが通れるようになっています。

私は、イギリスのウェスト・ハイランド・ウェイっていう、スコットランドのトレイルに行ったときに見たものを、自分なりにアレンジして作るようにしています。これは、僕が手作りしたトレーラーハウスで、宿泊施設です。その隣にあるのがマンサードホールという、30 人から 40 人泊まれる施設になっております。

期間限定のモアン山っていう山があるのですが、その山はうちの隣の農協の所有地で、夏の間は入れないんですけど、11 月上旬から 5 月下旬まで登れます。

今私たちが取り組んでいるのは、冬の楽しみ方をたくさん提案していこうということで、スノーハイクといって、これは青森のブルーモリスという会社とランチウェイと一緒に作ったものです。雪原を歩いたり、丘の上をスキーで歩いたり、モアン山の裾をスキーで行ったり、山で弁当を食べたり、スノーシューで走ったり、西別岳という山にも登れます。

トレイルランナーっていうと、最近敬遠される方もあるのですが、私の道は、先ほど言ったように、自転車も走る人も歩く人も、ルールさえ守っていただければ誰が入ってもいいような道にしたいというのが希望で、こういうランニング禁止区間を設けています。牛は基本的にびっくりしちゃうといけいないので、走ったらダメっていう区域を設けています。最近では、ハセツネカップで優勝した日本のトップ・トレイルランナーの奥宮俊祐さんが 3~4 年前から私の農場によく来て、走りに来ています。3 月には、スノーシューのレースもやる計画をしております。

それから、今次のステップに入ろうと思っています。北海道でロングトレイルをたくさん作ってほしいのですが、北海道では観光でロングトレイルということに、みなさんがまだ気付いてないんです。私が今提案しているのは、道東地域には、阿寒国立公園、釧路湿原国立公園、知床国立公園という 3 つの国立公園があります。それからもう 1 つ、

みなさんご存じではないのですが、道東地域には100km圏内に3つの空港があります。こんな恵まれたところはないんです。その空港を結ぶトレイルを作ったらいいのではないかと考えています。それは、飛行機で降りて、また飛行機に乗って帰る、そういう歩くためだけに飛行機で来るっていう、大変な魅力の一つになるのではないかな、と思っています。

人間は歩くことによっていろんな思考が活性化するというので、「歩くことは考えること」っていうことをコンセプトに、今頑張っております。北海道の端ですけども、ランチウェイにどうぞみなさんいらしてください。よろしくお願いします。

報告 山陰海岸ジオパークトレイル

こんにちは。鳥取県からまいりました、山陰海岸ジオパークトレイルでございます。ジオパークを活用したトレイルを作ろうということで、鳥取県が平成26年度から取り組みを始めたということで、まだ2年目ですので、まだまだこれからの取り組みということで、お聞きいただきますようお願いいたします。

中村代表理事のほうから、トレイルは山の道だというようなことがございましたけれども、私どもは海のほうの道を作ろうといいましょうか、今ある道を活用して、というような格好です。向かって左が浦富海岸というところで、国立公園になっているんですけど、鳥取砂丘も歩くような形で今考えているところでございます。



ジオパークっていうのは、大地の公園というようなところで、今、後ろに出ていますのが鳥取砂丘ですけども、こういった自然のところでございます。日本ジオパークというのは8地域ございますし、世界のジオパークになっているところは8つございます。トレイルに取り組んでいらっしゃる場所も結構ありまして、糸魚川市さんなんかは、塩の道というようなテーマですし、今日は伊那市長さんが来られていましたけど、南アルプスなんかジオパークに取り組んでおられます。佐渡も日本ジオパークになっているところで、節田会長と世界ジオパークを目指して取り組んでおられるというところでございます。

世界ジオパークというのは、今、120地域33カ国にあるというような状況でございます。山陰海岸ですけども、黄色で記しているところが、今ロングトレイルを開設しているというところでございます。

また、将来構想まで説明いたしますと、京都のほうまで繋げていこうと考えておりまして、兵庫県だとか京都府にも話をしているところです。新温泉町ですと、山の関係で加藤文太郎さんの出身地でございます。また、豊岡のほうに行きますと、植村直己さん

の出身地でございまして、植村直己冒険館という施設もございます。海のほうが中心のトレイルにしようと思っているんですけども、京都のほうまで 120km、山のほうにも非常にゆかりの深い方が出てらっしゃる、というようなところです。具体的な取り組みにつきましては、担当の石上のほうから話をさせていただきます。

続きまして、私のほうから山陰海岸ジオパークトレイルについて、具体的にご説明させていただきます。

まず、このロングトレイルを始めようというきっかけは、2年前の山陰海岸国立公園の 50 周年記念イベントのときに、アウトドア専門家の方からトレッキングコースとして高い評価を受けたというところから始まっておりまして、次の年に検討調査を委託して、いろいろ調査をいたしました。それから併せて、啓発イベントや整備調査報告などをいたしまして、実際その調査報告において、海岸線沿いの鳥取砂丘―浦富海岸ルートを優先的に進めていくルートというような結果が出ました。その理由としては、自然歩道を中心とし、PR 効果も高いとか、交通利便性が高いとか、そういったこともございました。



その調査から見た本トレイルの方針というのを関係者でも話しまして、方針としては、海岸線のルートを繋いで、ジオパークの雄大な自然の風景や漁村の風景を楽しむルートをコンセプトにするということで、「海岸わたり、街つなぐトレイル」でいこうということで始めております。実際のルートについては、鳥取砂丘―浦富海岸ルートをメインルートにするとか、段階的に延長していこうとか、そういったようなことを考えております。

実際に団体として動き始めたのは、山陰海岸ジオパークトレイル協議会というものを設立しまして、今年度の 4 月 1 日に始めたばかりでございます。このときに中村代表理事にも記念講演をしていただきまして、構成機関としては観光団体、商工団体、ガイド団体、行政のほうで構成しまして、現在、鳥取県緑豊かな自然課のほうで事務局をして進めているところでございます。

実際のトレイルルートなのですが、鳥取駅がゴールになりまして、こちらの東浜駅からスタートして、こう行って鳥取駅まで行くというような形で、スタート・ゴールを駅にしております。距離としては 40.7km です。

まずルート 1 ですが、ここは東浜駅から出たらすぐ海岸線のコースになりまして、それから羽尾岬という岬を下りてきて、学習館というジオパーク拠点施設までとしております。具体的には海岸であるとか、海を見ながら山歩きが楽しめるようなコースになっております。

続きましてルート 2 ですが、こちらはほとんど海岸線と砂浜を行くルートでございまして、それから最後に田後という漁港の中を歩いていくコースでございます。こういっ

たように、浦富海岸海水浴場の浜をずっと歩いていく。田後漁港は荷捌き場がありますので、魚を積んでいる様子とか、イカを干している様子とかを見ながら行くようなことがあって、楽しめるようなコースになっています。

次にルート3です。こちらは山陰海岸ジオパークトレイルルートのメインコース、一番のハイライトになるのかなと思いますが、海岸線の自然歩道で見ていくコースです。この海岸線が、岩が侵食されていろいろな形で楽しめるような景観になっておりまして、海岸線や自然道を通りながら、岩に松が生えているのを見ながら歩くことができます。それが終わった後に漁港の中を通りまして、山の中腹あたりを通るようなコースになっています。海岸沿いの中腹を歩いて行きますと、こちらのほうに鳥取砂丘が見えてきます。

続きまして、それが終わりますと、海岸線と鳥取砂丘を歩くようになっております。こちらもハイライトの一つとなっております、こういった鳥取砂丘の中を歩くようなコースです。大体この高さも47mぐらいありまして、こういったところを上がったたり下がったり、アップダウンが激しい砂丘を歩いて楽しめるようなコースになっております。

その後は、ちょっと折り返して山のほうに入って行きまして、こちらからは多鯰ヶ池という池の南側を通りまして、梨の果樹園の中を通過して、摩尼寺という寺までをルート6としております。

砂丘を見ながら通った後に梨園。こちら辺は、途中で梨狩りをしながら楽しむこともできるのかな、と思います。最後に、摩尼寺から鳥取城跡を経て、鳥取駅に行くルートになります。

大体のルートの説明としては以上でございます。今年度の取り組みとしては、ルートを決定したり、マップを作成したり、ガイドの育成については来週、村田さんに来ていただいて、研修をする予定でございます。啓発情報発信の取り組みとしましては、ホームページを立ち上げ、11月7～8日にシェルパ齊藤さんに来ていただきまして、『BE・PAL』さんと連携イベントを催し、記事掲載のほうもさせていただいたところでございます。

今後は、兵庫県の新温泉町の海沿いか、もしくはちょっと山沿いを通るようなルートで行けないかということで、自治体や団体の方と話を始めているところでございます。

今後の課題としましては、まだまだ始めたばかりですので、受け入れ態勢の向上、啓発、情報発信とか、いろんな分野で頑張っていけないといけない、というふうに思っているところでございます。以上でございます。ご清聴ありがとうございました。

報告 奥津軽トレイル

奥津軽トレイルの伊藤と申します。青森県の津軽半島の真ん中あたりにあります、五所川原市金木町というところからやってきました。「ゆったどあさぐべ奥津軽トレイル」でございます。「ゆったどあさぐべ」というのは津軽弁で「ゆっくり歩こう」というような意味です。全部で 8 つのセクションがありまして、全長 117km でございます。



自分たちが今やろうとしているトレイルは、青森県の津軽・下北にまたがる青森ヒバ林、ヒノキアスナロという木の森でございます。これは日本三大美林と呼ばれる中で、今一番、天然林の蓄積量がございまして、かつてその中を日本初といわれる森林鉄道路線が、あちこちに網の目のように張り巡らされていました。その中をトレイルルートとして歩いていこう、というような取り組みでございます。

奥津軽と青森ヒバ、森林鉄道の繋がりというのは、そもそも青森県全域が、もともとヒノキアスナロの木で覆われていた地域であったところにあります。藩政時代から藩の財政として保護されてきまして、明治に入りましてからは、国有林として国の財産を支えるわけなんですけど、そもそも青森県の名前は青に森で、青森県の木は、ヒバでございます。

簡単に説明しますと、日本三大美林というのは、木曽の檜、秋田の杉、青森ヒバでございます。蓄積量は秋田杉の 7 倍、木曽檜の 3 倍ということで、まだまだ地域にはこういう森林資源が残っております。ヒバは真冬に花が咲き、1 月から 3 月に受粉します。氷河時代からの生き残りというような名残を持っている木でございます。

青森ヒバというのは、とにかく薬効成分があり、ヒノキチオール含有量が飛び抜けております。腐りにくく耐久力がある、湿気に強い、虫がつかない、抗菌作用が高い、リラックス効果がある、というようなことで、建築用材だけではなくて、おがくず、ヒバのオイルに至るまで、有効に活用しようとする取り組みが今進んでおります。

これは代表的な建物なんですが、左の上は私どもが運営している太宰治記念館、斜陽館でございます。総ヒバ造りです。右が青森市森林博物館、旧青森郵便局ですね。映画『八甲田山』の撮影にも使われていました。この橋は日本一長い木の橋です。青森の総ヒバ造り。日本一長い木の橋ということで、長生きの橋というようなことで、人気を博しております。弘前にはあちこちに洋館が残り、これもまたヒバでございます。青森ヒバで一番古い建物というのは、今残っているのは平泉の中尊寺の金色堂。約 900 年、まだバリバリの現役です。

昔から北前航路を使って、この青森ヒバが京都や大阪のほうまで運ばれていたわけですが、明治に入ってこの木材需要が急増して、沢という沢に森林鉄道が張り巡らされて、

ここが日本初の森林鉄道の発祥の地と言われているところです。この木材産業が地域の発展に大きな力をもたらし、奥津軽の経済基盤を作ったと言われている。

この図をご覧ください。この緑の場所が、青森ヒバの分布図です。右側が、これが森林鉄道の軌道跡です。昭和 35 年の時点では、津軽半島だけでも総延長 320km ありました。まだそのまま山に残っています。これを歩く道にしちゃおうと、自分たちは考えたわけです。森林鉄道というのは、日本全国それぞれにあるんでしょうけども、津軽の場合、こういったように毛細血管のようにあちこちに張り巡らされている点で、日本の森林鉄道の中では極めて特異性を誇っております。

これは昭和 42 年に全線が廃止になって、廃線になって 50 年になるんですけど、今これらは、ことごとく廃墟です。でも、これは地域にとってとても大事な記憶であり、近代遺産でありますので、こういう形でずっとご覧いただければと思います。それが今こういう形で山の中に入ると、いろんな遺構が出てきます。みんな崩れ果てています。でも、この中を歩くことによって、青森ヒバと接し、青森ヒバの空気感というものに接していただければ、心も体もとても健康になるというような感じです。木橋とかポイントがまだ残っております。スイッチバックの軌道跡、木橋などです。こういう形でスイッチバックさせながら、半島の山奥に入っていきます。これは滝の真ん中を突き抜ける森林鉄道です。これは海岸沿いに竜飛岬まで延びるかつての軌道跡で、枕木など出土したりしております。

奥津軽トレイルは、半島に 8 つのセクションで展開しております。パンフレットに書いてある通り、各々特徴がありまして、全部合わせると 117km という長さになります。私たちは、これをやるにあたって信越トレイルに学び、北根室ランチウェイ、そしてシエルパ斉藤さんやトレイルライターの根津さんなど、いろんな方々にお話を聞いて、少しばかり認識を改めてまいりました。3 年であります。ただ、地域の温度差がまだまだありまして、関係の 6 市町村が全部同じ方向を向いているかということ、決してそうではなくて、でも、誰かがやらないと本気にしてくれないですね。みんな模様眺めなんです。なので、東北では、民間で私どもが最初にこのトレイルの取り組みを始めたと思っております。みちのく潮風トレイルがありますが、あれは震災の復興事業です。民間としては自分たちが初めてということで、これに対して少しずつ地域のみなさんが同じような価値観を持って、たくさんの人を迎えていければな、と思っている次第であります。時間になりましたので、これで終わります。ありがとうございました。

報告 金沢トレイル

みなさん、こんにちは。金沢トレイルの理事長をやっています河崎です。よろしくお願いします。今日はこのような場を設けていただきまして、大変感謝しております。ありがとうございます。

金沢トレイルは、金沢の中を歩く道です。金沢の面積に対して60%が山林ですね。金沢トレイルは、街中を歩きながら里山を歩くという形でやっております。体制ですが、私が所属する金沢トレイル連携協議会のほうで、地域の方や行政の方、そういう方と連携をして、反対意見が出ないようにと調整をしております。そしてもう一つは、金沢トレイルレンジャークラブというクラブを立ち上げて、そちらでイベントを行ったり、チラシを作ったり、人材育成や整備などをしております。



地図でいいますと、金沢トレイルは約 70km あります。未完の 70km と書いてありますが、まだ完成しておりません。基本的には、まだまだ完成させないぞという気持ちでおります。この金沢トレイルを始めるきっかけは、北陸の富山と福井の自然体験活動をやっている友達と飲んでいまして、以前、加藤さんのアパラチアン・トレイルとかああいうのを見て、おもしろそうだからやってみたいと飲みながら語ったら「やろうやろう」ということになりました。でも、富山や福井の方々がなかなか動かなかったということで、じゃあしょうがないから石川でやろうとなりました。石川県には加賀から能登にかけて、小松空港と能登空港がありますので、それでやろうかと思ったのですが、なかなか調整を取るのが大変だったので、金沢市の助成がありましたので、じゃあとりあえず金沢トレイルでモデル的にやってみて、ほかの団体がまた頑張ってくればいいかな、という形で始めました。

とりあえず始めた団体なのですが、2011 年から道を作り、セクションハイクを繋げています。地図で言いますと、金沢城の城山から、みなさんもよく行かれる東山ですね。東山の茶屋街を通過して、あと卯辰山とか大学とか里山を歩き、医王山に向かいます。富山との県境の医王山などを通り、ブナ林とか吉次山もありますので、そういうところを通過して最後は獅子吼高原というところに繋がります。獅子吼というのは、隣の白山市になりますね。コース設定はしてあります。ここからは、白山市の人にバトンを渡そうという形で思っております。このような形で地域や能登の方、また県外の方と協力し合って、長い道を作ればいいかな、ということでやっております。

私のほうで飲みながら始まった団体なんですけど、いろいろみなさんのご協力をいただいて、行政の方も力を入れていただいているんです。基本、素人ですから、信越トレイルの真似をしようとか、信越トレイルを真似したらそれなりになるだろうということで、信越トレイルの木村さんにも来ていただいてお話を聞きました。実際、メンバーで信越トレイルのほうを歩いたりとか、ホームページをよく研究して真似したりと

か、そういうことをしています。

道標のほうも、まだできていない状態です。このコースですが、実際、私のほうで里山保全の団体を作っておりまして、気軽に森に歩いて入り、そこで遊ぶことによって、里山のことをいろいろ知ってもらえたらな、ということで始めたきっかけもありまして、このコース上には保全活動をしている場所がいくつかあります。企業さんが CSR で保全活動をしているところもありますし、行政が行っていたり、大学のほうで保全活動をしているところを通るようにして道を作っております。

金沢トレイルの一番大事なことは、「楽しい」です。「苦しい」もあります。楽しいけども苦しいということを大切に、僕が勝手に言って、みんなは巻き添えを食らっているという形でやっています。歩く楽しさもあるんですけど、これは作る楽しさってとても大切だと思っているんです。自分たちで道を探す、道を調べる、そして歩いて作って迷って、戸惑いながらずっと作っています。

正直、今まで発表された方の話を聞かせていただいて、素晴らしい風景やな、というふうに感動しておりました。私たちもファンを作ることを大事にしています。みなさんも好きな歌手とかいろいろありましたら、コンサートなどに 3 万円でも 4 万円でも出して行かれますよね。そういう意味で、やっぱりファンを作ろう、と。それは歩くだけじゃなくて、作る過程であったり、企画であったり、自分たちですること。そうすると、愛着がわきますから、そういう形で作る過程を大事にしています。

実際にみんなで作業し、一部直したりしました。道はありますが、歩きづらいところに階段を作ったりしています。歩くイベントもしています。一緒にイベントで歩いた人たちが道作りに参加してくれて、チェーンソーの免許を取りに行くぐらいになりました。自分たちで自主的にチェーンソーの免許を取って、次回から「行くぞ」という意気込みでやっております。地域の里山保全をしている人に、道作りを教えてもらいながらやっております。

今日は、金沢トレイルから 5 名のメンバーが来ました。私を含め 5 名です。いい笑顔ですね。山岳系の人にもいますけど、みなさんから一番左側の女性の方は、まったく山登りしていませんでした。この金沢トレイルでハマりまして、何万円もかけて登山道具を買っています。イベントでは、コーヒーをみなさんに飲んでほしいということで、コーヒーポットを背中に背負って、山まで登りました。なんでこんなに大きいザックを持っているのかなと思ったら、コーヒーポットが出てきたのですね。

みなさんから見て 2 番目の女性ですけど、彼女にはレンジャークラブの代表をやっていただいております。彼女が誘えばみなさん来ますし、言うことを聞くんです。僕が言っても誰も言うこと聞きませんが、彼女が言うと言うこと聞く。次の男性は、記録ですね。距離がどれくらいあるか、そういう記録をしてもらっています。オレンジ色の方ですけど、山岳の方で、元気なだけです。でも、この元気がみんなを引っ張っていく形でやっております。

こういうふうイベントをして、増殖中です。やはり子どもにも歩いていただきたいし、お孫さんとも歩いてほしいです。それから右側はインディペンデンス・ボードウォークといって、車いすの人でも歩ける道です。だから全コース歩かなくても、一部学校で使ってもらってもいいし、障害者が使ってもいいし、自由に使えればいいのかな、と思っております。みなさん、金沢トレイルと一緒に作ってください。どうもありがとうございました。

キャンプから人間性の回復を



山井 太 プロフィール



1986年に㈱ヤマコウ<現㈱スノーピーク>に入社、1996年に社長に就任。アウトドアをライフスタイルととらえ、スノーピークをオートキャンピングブランドとして展開。オートキャンピングのパイオニアとして日本のアウトドアシーンを革新する。創業以来貫き通す「自分たちもユーザーである」との原点から、ミッションステートメントとして掲げる“The Snow Peak Way”の下、革新的な新製品の開発を行い、人間と自然が豊かにふれあえるライフスタイルの提案として、徹底的にユーザーの立場に立ったプロダクトやサービスを提供し続けている。2014年、自身初の著書となる『スノーピーク「好きなことだけ！」を仕事にする経営』を執筆。また、2015年12月に東証一部へ上場を果たすなど、精力的な活動をしている。

——これまでどのような自然体験をされてきたのでしょうか？

父がロッククライマーでした。スノーピークが一番初めに作ったアウトドア用品であるハーケンやロックハンマー、アイゼンのような登攀用具を作り始めたころに、私は生まれました。このころは家と会社と一緒に、父の登山のアルバムを見て「いつの日かあの岩壁に飛びついて、ロッククライミングをやるんだ！」と思っていました。一方、僕はとても腕白な少年で、運動神経だけがとても良かったんですね。家の屋根に登ったり、塀を逆立ちで歩いたり、そんなやんちゃをやっていたわけです（笑）。

10歳のときに父に呼びつけられて、座敷で「お前、そこに座れ」と言われたことがありました。父は、10歳の少年に向かって上から「お前を山に行かせない」と言ったんですよ。「何で？」と聞き返したら、非常に怖い顔をして「お前のような性格では、必ず死ぬ！」って（笑）。僕がやんちゃをしていたのを見ていたのでしょうね。

記憶がないのですが、小学校のとき、僕は登山家の伝記や父親の登山のアルバムをずっと見たり読んだりしていたようです。明らかに山に対して憧れを抱いている自分の息子を見て、父は「これはまずい」と思っていたようです。そういう意味では、10歳のときに僕は正式に「死刑宣告」（笑）を受けたんですよ。言いたいことはたくさんありましたが、父の顔を見たら、それまで見たこともないような真面目な顔をしていたので、「これは逆らってはいけないんだな」って。でも、山に対する憧れを持っていたので、とてもショックでした。これはアウトドアとの関わりのなかで、僕にとって、人生最初の「事件」でした。

父は「山には連れて行かないけど、キャンプには連れて行ってやる」といって、アウトドアに連れ出してくれました。その一方で、山から興味を逸らそうとして、僕に野球をやらせたりして。8～9 年間は、野球で体力、気力を消耗してしまい、その間は山への興味はなくなっていました（笑）。山の写真を見ると「ああ、行きたいな」と思うことがありますけど、一度禁止されたこともあって、今は山歩きぐらいですね。

こういった幼少期の原体験があって、自然は大好きです。僕は街の子だったのですが、釣り具屋さんで箱メガネとヤスを買って、五十嵐川に行ってカジカを突いて、焚火をして食べたりしていました。野球をするか、野山でやんちゃをするかしていましたね。基本的にキャンプまでは活動範囲としては OK でした。その後、大学を出てサラリーマンをする間、東京に 8 年半いました。当時までは、アウトドアといったら山登りが主流でしたが、田舎に帰って山登りではないアウトドアをしたいな、と。それからスノーピーク、当時の会社名はヤマコウですね、に入社して、オートキャンプの道具を作り始めました。

スノーピークの由来は、父が雪を冠した谷川岳をイメージしたものだと思います。1963 年に商標登録されています。

——山井社長の少年時代、野山での子どもたちの自然遊びは、どのような様子でしたか？

よく遊んでいましたね。僕らの時代から 5 歳下くらいまではよく野遊びしていたと思いますよ。昭和 30 年代生まれは、割と街の子どもでも野山で遊んでいたと思います。「野遊び」は、スノーピークのキーワードです。アウトドアやキャンプ、また最近流行っている「アーバンアウトドア」といった英語で表現される活動、そしてアパレルなど、スノーピークが行っている事業すべて含めて、「野遊び」という日本語で表現しようと考えています。最初にスノーピークの中で野遊びという言葉を使ったのは、2001 年に「野遊びドットコム」ウェブサイトを作ったときでしたから、以前からこの言葉が好きだったんでしょうね。今ではこの野遊びを、多くの人に広めていきたいと考えています。スノーピークは、ミッションステートメントをととても大事にしています。

The Snow Peak Way

私達スノーピークは、一人一人の個性が最も重要であると自覚し、
同じ目標を共有する真の信頼で力を合わせ、
自然指向のライフスタイルを提案し実現するリーディングカンパニーをつくり上げよう。
私達は、常に変化し、革新を起こし、時代の流れを変えていきます。
私達は自らもユーザーであるという立場で考え、
お互いが感動できるモノやサービスを提供します。
私達は、私達に関わる全てのモノに良い影響を与えます。

スノーピークミッションステートメント <https://www.snowpeak.co.jp/about/01missionstatement.html>

これは経営の中核にあるものなのですが、もっと分かりやすく、今のビジネスのコアバリュー、つまり現代的な価値を表現すると、「人間性の回復」に重点を置いていると言えます。スノーピークの事業は、人と自然を繋ぐ、自然の中で人と人を繋ぐといったことを通じて、人間性の回復に貢献するものだと考えています。この意味には、教育やコミュニティといった多様な側面が含まれます。

——スノーピークのモノづくりに対する理念について、教えていただけますか。

「ユーザー思考のモノづくり」という言葉は、今では巷に溢れているかもしれませんが、例えば、僕がどれくらいこれまでにキャンプをしてきているかといったら、これまでの人生で軽く 1,000 泊以上はしているんですね。あまりこのような人はいないので、ちょっと変わってる（笑）。社内でも一番キャリアが長いんです。年間ですと国内外で 60 泊くらいはしています。これだけキャンプをしていると、雨の日もあれば暴風雨の日もあって。いろんなところで、いろんな状況下でキャンプをしてきましたが、特に日本は高温多湿で雨が多いので、約半分は雨の中のキャンプですね。その意味では、日本は、例えばカリフォルニアのように湿気がなくて晴天率が高いという状況と比較すると、キャンプをするのにはあまり好条件とは言えないんですね。そうすると、そこで使えるキャンプ道具を作るということは、その土地の天候条件などを熟知していないとできないんですね。例えば、アメリカ産のテントのボトムには、シームテープ（テントの縫い目に貼るテープのこと）が貼ってありませんが、カリフォルニアでは必要がなくても日本では雨が染みてきますので、絶対に必要ですよ。このようなモノづくりへのこだわりがあり、社長自らキャンプをするということを徹底しています。スノーピークの商品は、僕や社員の実験済み商品です。



写真提供 スノーピーク

——初心者とエキスパートでは、商品へのニーズが異なると思いますが、そのあたりの違いはどのように掌握されるのでしょうか。

スノーピーク商品のユーザーさん 5,000 人ほどの方々と、一年を通じてキャンプをしていますので、様々なユーザー層と直接的にコンタクトしています。これまでに、のべ 10 万人の方々と、様々なところでキャンプをしてきました。また、いつの日にか必ずキャンプを始める方々がいらっしゃるので、入口にいらっしゃるお客様のことは忘れないようにしています。

——日本におけるオートキャンプブームについては、その歴史に紆余曲折があったことが伝えられていますが、ご苦労があった点についてお話しいただけますか。

1986 年に入社し商品開発を行ってから、現在のようなドームテントやタープ、リビング、キッチンにかかる商品が 88 年に売り出されました。この時代、88 年の時代には、贅沢なキャンプをしている人は皆無だったと思うんですね。学校キャンプやボーイスカウトが主流で、レジャーでしている人は、9,800 円のテントに食事は安く済ませるというのが定番だったのではないのでしょうか。88 年に売り出したスノーピークのスタイルは、それまでのキャンプと一線を画したもので、オシャレで豊かなキャンプ（笑）。今、具現化されているスタイルの礎となったものです。こういったオシャレで豊かなキャンプの愛好者がゼロからスタートしたとして、この頃の時代のニーズに合っていたので、94～95 年にはその愛好者は 1,500 万人ほどになりました。統計上のピークは 96 年でしたが、スノーピークの売り上げのピークは 93 年で、94～99 年の間は売り上げをかなり落としてしまいました。この 6 年間で売り上げが下がる最中に、黙って落ち続けるのは嫌だったので、海外進出をしたり、燃焼器具を開発したり、98 年には初めてユーザーさんとのキャンプのイベントを始めました。このイベントの最初の焚火トークの夜に、ユーザーさんたちからダイレクトにフィードバックをいただきました。それが「スノーピークの製品は、非常に高い」「取扱店の品ぞろえが悪くて、欲しい商品が買えない」というご指摘でした。その当時までは、問屋さんとビジネスをしていたため、ピーク時まではたくさん並んでいた商品が、ブームが去ると店頭の商品が少なくなり、お客さんが買えないという状況がありました。それまでは、B to B to C の会社だったものですから、B to B のところでは、問屋とか小売の方々とディスカッションをしています。メーカーなので、ユーザーさんとは直接お会いしたことはありませんでした。6 年間売り上げが下がったときに、当社はもともと、相当能天気な会社なんです（笑）、我々には存在理由があるのか、といった話が出るころまで落ち込んでしまったわけです。

6 年間も低迷すると、営業マンが行っても「スノーピークさんでしょ。もうキャンプ終わったじゃない。ブームが終わったからもう来なくていいよ、次のブームまで」なんてことまで言われてしまうんです。非常にドライな業界ですから。こんな状況にみんな落ち込んでしまったのですが、我々の存在理由があるかどうかは、ユーザーさんの顔を直接見て、もう一回判断しようということになり、キャンプのイベントを行うことに

なったんです。

その夜の焚火トークで参加ユーザーのみなさんが口にしたのが「社長、ホント高いよ」「社長、店で買えないよ」でした。スノーピークの商品は、永久保証が付いているので、その分素材にお金がかかっていますし、様々なところでテストもしていますので、ハイスペックでした。当時、19,800 円くらいが相場するとき、スノーピークのテントは 80,000 円していました。19,800 円のテントはシームテープが貼ってないし、フレームもグラスファイバーで、風が吹いたら折れてしまうなどのデメリットがありました。当社の製品は永久保証が付いているため、一度購入いただければ、5～10 年は完璧に使用できるようになっていました。1 回単価で考えると安いのですが、絶対価格が 4 倍高いということですね。そうした状況のなかで、私たちが決断したのが問屋との取引をやめ、直接小売店と取引することでした。この決断により、ユーザーのみなさんから高いと指摘された 80,000 円のテントは、流通マージンをカットしたことで、35%オフの 59,800 円に下げることができました。そして「品ぞろえが悪く、買えない」というご意見に対しては、当時、全国に 1,000 店舗あったスノーピーク製品の取扱店を地域一番店の 250 店に絞り、買えないモノがないように、スノーピーク製品すべてを取り扱う正規特約店制度を設け、店頭での品ぞろえの改善を果たしました。そのように、お客様からご指摘いただいたことを経営課題として認識し、その課題を改善し続けてきた結果として、2000 年から現在まで増収を維持しています。ユーザーさんからのご意見を正面から受けて、100%言われたことはお返ししたわけですね。マーケット自体は、2010 年頃までは縮小していました。1995～2010 年の間にマーケットが半減したのですが、スノーピークの売り上げは 2 倍になりました。緩やかに 7%成長でした。この期間に売り上げを伸ばした会社は、ほかにないと思います。僕らのビジネスは、本来は B to C のビジネスなので、我々が消費者の方々を幸せにしなければならないのだと思います。



写真提供 スノーピーク

本社を作るにあたって、今日もキャンプをしている方がこの雨の中にいらっしゃいますけど※1、僕ら会社から拝見していて「俺たちはあの人たちを幸せにするためにしか、存在していないよな」と話しているんです。いつも、幸せにするべき存在を拝見しながら仕事をしている、ということです。究極の **B to C** です。スノーピークは営業系や企画系はもちろん、管理系の社員でもキャンプが好きで、全社的にアウトドアが大好き、キャンプが大好きという人の集まりです。そのため、基本的にスノーピークとお客様とのあり方は、**C to C** だと思っています。**C to C** はまだ出てきていないカテゴリーだと思いますが、思いとしては **C to C** の感覚で、「私たちもキャンプが大好き、みなさんも大好きですね」「こういうの、欲しかったんじゃないですか？ 僕らもこういうの、好きなんです。いいでしょ、これ」というような感じで、メーカーと消費者との関係性を築いています。イベントもずっと続けていますので、19年間で10万人のみなさんとコンタクトしているので、今では **B with C**、つまり消費者の方々が我々のビジネスに寄り添っている関係にあると思います。

※1 スノーピーク本社ビルディングに隣接する同社運営のキャンプフィールドで、インタビュー当日も雷雨の中、キャンプを楽しんでいるお客さんがいらっしゃった。

——スノーピーク商品の洗練されたデザインは、どのように作られていったのでしょうか。

日本は、基本的にはシンプルなデザインをモノに施す文化だと思います。10年たっても20年たっても飽きないというような。ロゴマークもそうなのですが、非常にシンプルなデザインで、20年経過しています。色褪せません。父親の時代の商品がカッコよかったかという、そうではなかった（笑）。現在のキャンプ商品群の礎である100アイテムほどは自分で開発しましたが、僕、商学部出身ですけど、入社してからCADを入れて、その勉強もして図面も引けます（笑）。スケッチだけではなく、製品図面や部品図面も引く必要があつて。カタログも自分で作って、コピーも書いて、営業も……。

僕は入社するときに二つのことを思っていました。一つは自分が参加するスノーピークを理想のブランドにしよう、と。それから、これから作る製品サービスは、自分が心から欲しいと思うものだけにしようって。例えば、壊れるのも嫌だし、不細工なのも嫌だし、もし壊れたら修理をしてくれないと嫌だし。根源的に、自分がユーザーだったら、こういうのがあったら理想的な会社だな、と思うことをすべてやっちゃったんですよ。

——さて、話は変わりますが、御社の地方創生コンサル事業について、お話しいただけますか？

アウトドアの切り口で地方創生することは、非常に素直な考え方だと思います。「自然が美しい、アウトドアの切り口で売り出しましょう」と。今はここのキャンプ場（本社に隣接されているキャンプフィールド ※1 参照）のほかに、大阪府の箕面市、大分県の日田市のキャンプ場の指定管理を行っていますし、高知県、帯広を中核とした十勝、新潟県十日町、そのほか数カ所に僕らがお伺いし、自然環境やそのバックグラウンドを

調べ、ここにこういった物を作った方がいいのでは、といったことや、キャンプ場に向いて調査し、洗練させた方が良い点などについて助言するといった形で、地方創生コンサルをさせていただいています。

オートキャンプのビジネスは物販に見えますが、実際は物販ではなく、キャンプのスタイル、実際に「体験の価値」を売っていると考えています。そのため、地方創生コンサルとして地域の自然が持つ魅力を発信することとキャンプ商品売ることは、同じなんですよ。

——海外展開をされているご経験から、日本と諸外国のアウトドア文化の違いをどのように分析しているのでしょうか？

スノーピークが最初に海外進出したのが 96 年、アメリカでした。2000 年にはドイツに進出しました。欧米で行われているアウトドアは、バックパッキングが主流ですよ。分かりやすく言うと、合理的に安く旅行するマーケットですよ。そこに小さなストーブとかチタンのコップなどの輸出を始めて、今、韓国、台湾がオートキャンプのマーケットが結構大きいので、スノーピークが 88 年に始めたキャンプのスタイルをそのままこの 2 国に文化輸出しています。韓国は一昨年までに、日本と同じくらいのマーケットに成長しました。日本が輸出したオートキャンプ文化が、この 2 つの国にそっくりそのまま受け入れられています。キャンプ場の整備も進んでいます。

欧米文化はバックパッキングが主流ですので、オートキャンプ文化は根付いていません。欧米でのキャンプは、トレーラーやキャンピングカーに寝ることが多く、日本のようにドームテントにタープ、リビング、キッチンといったスタイルは、多分これからなのではないでしょうか。

一度 90 年代後半に仕掛けていたのですが、それは空振りに終わりました。アメリカのアウトドアリテラーによると、最近、高級なファミリーキャンプのニーズが増えてきているそうなので、スノーピークのスタイルもそろそろ受け入れられるかもしれないと話しています。世界で最もクオリティが高いキャンプ文化は、日本にあると思います。

——国内では、年代別に見るとキャンプへの反応はいかがでしょうか？

いろんなキャンプが盛んになるといいと思います。根っこはすべて人間性の回復が目的ですから。従来のキャンプブームのときはファミリーキャンプが盛んで、お子さんが 1~12 歳までのファミリー層。ここ最近すごく増えているのが、キャンプをしながら野外フェスティバルで音楽を聞くといいカップル層です。ファミリーキャンプのときより、もう少し安価で手軽な商品を使う傾向があるようです。そして、ファミリーキャンプを卒業し、お父さんだけ、あるいはご夫婦でキャンプに行く層が増えています。この層は、これまで（ファミリーキャンプで）テントを散々立てたので、今はグランピングがいいかなという方々です。手ぶらで行って、キャンプのメリットだけ得たいという考えのようです。ここ 2~3 年で、日本のキャンプの愛好者は多様になっていると思います。去年、今年から盛んに耳にするのが、グランピングですね。「安価なグランピング」

というのもあって、本来のグランピングの特性がないままに行っているものもあり、玉石混交の状態です。このような多様性のなかで、新たなキャンプ文化や商品が生まれる可能性もありますね。

——日本の自然離れの兆候についてのお考えと、それらを前提とした事業展開のコンセプトについて、教えていただけますか？

潮流として自然離れの問題はあるかと思いますが、その流れだけではなく、時代が我々側に近づいてきているところもあります。スノーピークが今経験していることのなかに、「アーバンでアウトドア」という考え方があります。例えば、不動産業界の方々と共に、マンションの一階の専用庭などにキャンプグラウンドが付いているマンションを東京で販売しています。半年前に売り出した立川のマンションはすでに完売で、通常は売れ残る1階の部屋が真っ先に売れてしまいました。最上階と同等価格で販売していても、最上階よりも1階キャンプグラウンド付きの方が人気という状況です。この物件からは、従来とは異なる反応が見られました。また別の例としては、住宅産業とスノーピークの協力で、水戸市で戸建住宅の庭が専用キャンプ場になっているものが販売されている例もあります。スノーピークの商品がそこにセットされていて、もちろん畳むこともできるのですが、お子さんがキャンプしたいと思ったら毎日、庭でできるということです。キャンパーの人口は、全体の6%しかないんですよ。ですから、94%の人はキャンプをしないで死んでいく（笑）。これはとても不幸なことだと思って。ですから、この94%の人に向かって、僕らが都市に出て行ってアーバンアウトドアを提供したいと考えています。アーバンアウトドアは、2年前に商標登録されています。スノーピークはアパレルも行っていますが、「ホームとテントを行き来する」というコンセプトを持つ洋服です。野山でも着られるし、都市に行ってもカッコいいものです。スノーピークは、何かを行うと必ずトップブランドになるという会社の特性があります。現在では、ファッション感覚が高い、トレンドセッターになっているところから出店のオファーをいただいています。しかし、コンセプトはあくまでも「ホームとテントを行き来する」です。どこで着てもカッコいいけれど、機能的にはしっかりとアウトドアに対応しています。お客さまにはスノーピークのアパレル商品にまずは触れてもらい、最終的にはキャンプに出掛けてほしいな、という願いを持っています。日常生活にアウトドアが入っていくことが大切ですね。

（2016年8月 新潟県スノーピーク本社にて）

小諸ツリーハウスプロジェクト



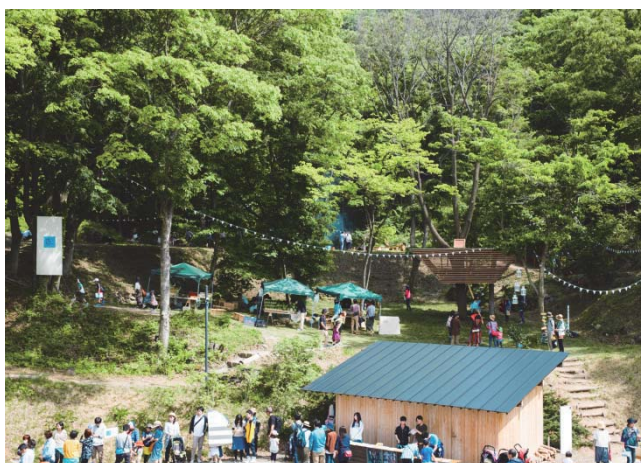
普段自然に接する機会の少ない人に、「アート」をフックにして自然体験に興味を持ってほしいという願いから立ち上げた「小諸ツリーハウスプロジェクト」。プロジェクトの活動のシンボルとして「アートツリーハウス」という、国内外で活躍するクリエイターがデザインしたツリーハウスを制作しており、現在、計7棟のツリーハウスが安藤百福センターの敷地内に展示されている。

ツリーハウスのコンセプトはアーティストにより様々で、チーズをモチーフにした「チーズハウス」や、太陽光パネルが設置されていて、蓄電した電力でお湯を沸かしたり光を灯したりできるツリーハウス「NEST」など、既存の枠にとらわれない自由な発想のツリーハウスが森の中に点在している。



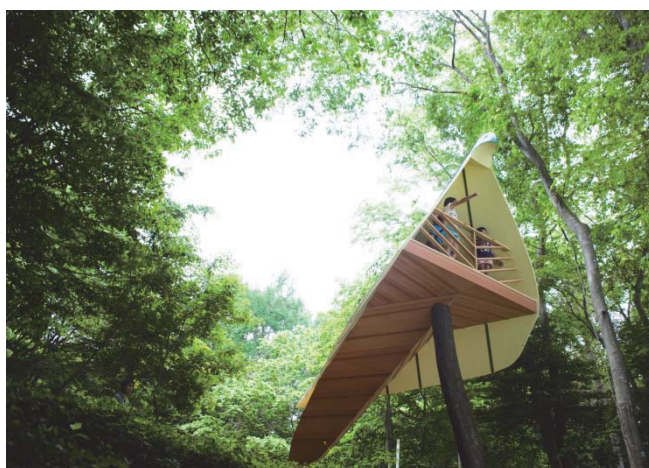
また2014年より、アートツリーハウスを鑑賞しながらアートワークショップやアウトドア料理のワークショップ等の様々な体験ができるイベントを年に2回開催しており、第1回のイベント「Debut Party」（5月24日開催）を皮切りに、2015年度までに計4回のイベントを開催している。

春は主に「アート」、秋は「食」をテーマとしたコンテンツ内容となっており、安藤百福センターの敷地内の森の中で、アート・自然と触れ合うワークショップや、地元の旬の食材を使用した地元飲食店ブースの出店、浅間・八ヶ岳パノラマトレイルを歩くトレイルイベントなど、気軽に自然に接することができるコンテンツを来場者に体験してもらい、そこから深く自然体験活動へ入ってもらうことを狙いとしている。さらに、イベント時のみアートツリーハウスに登ることができ、こちらも親子連れに大変好評を博している。





来場者は家族連れが中心で、2015年5月23日に開催された「自然で楽しむアートフェス!」、および11月7日に開催された「信州の収穫祭」では、ともに約1,000名の来場者がイベントを楽しんだ。



この「小諸ツリーハウスプロジェクト」では、自然体験活動の普及の目的とともに、地元の文化・資源を活かしたコンテンツ作りを意識し、地元の活性化および地域と都市との交流も大きなテーマとしている。本プロジェクトはその地域に住む方をはじめ様々な方の関わりにより、今後も樹のように成長し続け、形を変え、枝葉を広げ続けていくプロジェクトである。これから1人でも多くの人々が自発的に自然体験活動に触れ合い、また発展させようとする行動へ繋がることを願っている。

日清食品ホールディングス㈱
デザインルーム 今西 彩夏

報告

自然体験と防災教育 ―自然体験のボランティア体験から育む「生きる力」

一般社団法人くりこま高原自然学校

一般社団法人 RQ 災害教育センター

代表理事 佐々木 豊志

1. はじめに

1996 年に中央教育審議会答申で示された「生きる力」は、当時の文部省（現在の文部科学省）の中央教育審議会（中教審）が「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」という諮問に対する答申の中で、以下のように解説している。「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康・体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を「生きる力」と称する」。さらに、この「生きる力」は、様々な体験活動を通じて育まれるとし、社会体験、生活体験、自然体験の重要性を指摘し、その後の文部省は、様々な体験活動を展開するために学校教育、社会教育において様々な施策を展開している。

「生きる力」の変容を測定する指標として用いられる「IKR 評定用紙」は、橘直隆（筑波大学）と平野吉直（信州大学）が開発している。これは、心理的社会的能力、徳育的能力、身体的能力の 3 つの能力について、70 項目の調査項目によって「生きる力」の測定を試みることができる。その後、28 項目に絞り込んだ「IKR 評定用紙（簡易版）」も作られた。

これまでに、「IKR 評定用紙」を用いたアンケート調査は、基本的に「宿泊を伴う」「体験活動を含む」様々な自然体験活動の事業で実施され、その結果が事業主を通じて様々な形で公表されている。

2011 年 3 月 11 日に発生した「東日本大震災」では、被災各地で災害ボランティアが活躍をしている。宮城県登米市にいち早く設置された RQ 市民災害救援センター¹⁾ は、モンベルアウトドア義援隊²⁾ はじめ、日本エコツーリズムセンター³⁾ や全国の自然学校など、日頃から自然環境に向き合っているアウトドア関係者によって運営された。震災直後に被災地に集まったボランティアは、アウトドア活動が好きで、様々な自然体験を十分に経験している者ばかりであった。拠点となった廃校の体育館には何もなく、朝の気温も -10℃まで下がる極寒の環境の中でも寝食を自己完結し、寒風すさむ被災地でも黙々と活動した。震災という大きな社会の変化の中で、被災地へ赴き、被災地の現状

を把握し、自分で課題を見つけ、自ら考え、主体的に判断し、行動し、より良く問題を解決するために、ほかのボランティアとともに協力し合って支援活動に取り組んだ。そして、被災者を思いやる心で満ち溢れ、活動を終えて感動して涙して帰った。このように、被災地に集まった自然体験豊かなボランティアは、災害に生かされる、まさに「生きる力」を具えていると言える。

震災直後に RQ 市民災害救援センターに駆けつけた初期のボランティアの多くは、自然体験が豊富なアウトドア活動家であり、震災から数ヵ月が経過し、ボランティアセンターも体制が整った時期には、広くボランティアが参加している。また、災害ボランティアの体験は、ボランティアの多くが「大変勉強になりました」とミーティングで発言したように、教育の場としても貴重な環境であると言える。自然災害が多い日本列島に住む我々日本人は、これからも、災害が起こる環境に生きていることを受け止め、災害に対処できる「生きる力」を育むよう、体験から学ぶ教育手法を取り入れる必要がある。このことから、「災害教育」「防災教育」の重要性を指摘したい。

本研究では、自然体験が豊富なボランティアと、そうでないボランティアの「生きる力」の相違、さらに被災地でボランティア活動を体験することで、どのような「生きる力」が育まれるのかについて、調査を行った。災害ボランティアを対象とし、「生きる力」が育まれると言われてきたこれまでの自然体験と、今回体験したボランティア体験のインパクトから、災害ボランティアの生きる力がどのように影響を受けているのかについて、測定を試みた。

2. 調査方法

2.1. 「ボランティア IKR 評定用紙」の作成

2.1.1 災害ボランティアの生きる力のキーワード収集

まず、災害ボランティアの生きる力に関連するキーワードを、80 項目に整理した。そして、「IKR 評定用紙」に替わる、災害ボランティアの生きる力を測定するための「ボランティア IKR 評定用紙」の作成を行った。

災害ボランティアの生きる力を測定するために「災害ボランティアの生きる力とは？」という問いに対して思いつくキーワードを、ボランティア経験者の 24 名から抽出した。それらのキーワードを、KJ 法によって 80 項目に整理した。

2.1.2 プレ調査

80 項目の質問で構成したプレ調査を実施し、135 名から回答を得た。回答データ群のうち、正規分布から大きく外れている 22 項目と、正規分布に近いが、重複しているもの、質問の設定に無理があるもの 15 項目を除外し、残りの 43 項目を再度精査し、21 項目に絞り込んだ。

2.1.3 「ボランティア IKR 評価用紙」の確定

アンケート項目の並び替えと反転項目の設定を行った。反転項目は、以下の4項目で、反転させやすい項目を選んだ。

- ・失敗することを恐れない → 失敗することを恐れる
- ・好き嫌いなく食べることができる → 好き嫌いがあり偏食する
- ・思っていることを口に出せる → 思っていることを心の中に留める
- ・先入観・固定概念を持たない → 先入観・固定概念がある

最終的に、「災害ボランティアの IKR 評価用紙」として、以下の 21 項目を本調査に採用した。

表 1 災害ボランティアの IKR 評価用紙 項目一覧

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. いつでもどこでも眠れる2. 【反転】好き嫌いがあり偏食する3. 野外で排泄することができる（心身ともに）4. 失敗を恐れないでポジティブに行動できる5. 精神的にくよくよしない6. 【反転】先入観・固定概念がある7. 前後を関連づけて思考することができる8. 想像力がある9. 常に工夫する姿勢がある10. 自分で決断することができる11. 【反転】思っていることを口に出せない12. 場を仕切るのが得意である13. 【反転】失敗することを恐れる14. 他人のことを思いやることができる15. 人の話をよく聞こうとし、実際に聞くことができる16. 場面に応じた会話ができる17. 相手がおかれている状況を正しく判断してできる18. 他者・他団体と協力することができる19. 危機を予知、察知することができる20. 表面化していない課題にいち早く気がつくことができる21. 持っている情報を常に生かそうと考えている |
|---|

なお、21 項目の本調査指標は、次の通りである。

①前提条件・自己概念：

- ・身体能力（3 項目）・行動能力（3 項目）・ストレス耐性（1 項目）
- ・精神感性感覚（4 項目）

②他者・外界との関係をつくる能力

▶ソフトスキル：

- ・他者理解（1 項目）・利他性（1 項目）・コミュニケーション能力（2 項目）
- ・多様性への受容能力（1 項目）・調整能力（4 項目）

▶ハードスキル：

- ・リスクマネジメント（1 項目）

2.2. 本調査

一般社団法人 RQ 災害教育センター⁴⁾に登録している災害ボランティアの中で、RQ 災害教育センターへのアンケート協力の意思表示をしている 352 名を対象とした。調査方法は WEB アンケートを採用し、オンライン上から、対象者が「災害ボランティアの IKR 評定用紙」に直接回答した。前述した 21 項目に対するボランティア体験のインパクトを把握するため、参加前と参加後の状況を振り返ってもらい、5 件法によって回答してもらった。これに加え、自然体験活動の有無を含むプロフィール項目にも回答してもらった。

調査実施期間は、2014 年 5 月 23 日～6 月 26 日であり、回答者数は、115 名（回答率：32.7%）であった。

3. 調査結果および考察

ボランティアの「生きる力」の指標 21 項目の回答について、そのデータ群が正規分布を示さないものがあつたため、ノンパラメトリック検定によって統計処理を行った。

自然体験が育む生きる力がどのようなものであるかについて、アンケートの回答について、自然体験活動をしない・あまりしない人（以下、【グループ 1】）と、自然体験活動をしている・よくしている人（以下、【グループ 2】）を比較することによって検証した。

さらに、ボランティア体験が育む生きる力について検証するために、21 項目について、ボランティア活動における参加前・後の自身の対応力について、その変化を分析した。

3.1. 災害ボランティアが具えていた対応力を、自然体験活動の有無から分析する

まず、自然体験活動は、災害ボランティアのような緊急、かつ辛い活動を自ら行う人の、どのような対応力を高めていたのかについて分析した。これは、ノンパラメトリッ

ク検定によって、ボランティア活動に参加する前の自身の対応力を、【グループ 1】【グループ 2】の観点から比較することによって検証した。

その結果、21 項目中 12 項目に有意差が認められ、【グループ 2】の方が【グループ 1】よりも、いずれも対応力が高かったことが明らかになった。自然体験が豊富な人は、そうでない人よりも、「いつでもどこでも眠れる」「自分で決断できる」「ポジティブに行動できる」「前後を関連づけて思考することができる」「危機を察知することができる」「好き嫌いがなく偏食しない」「想像力がある」「他人のことを思いやられる」「野外で排泄できる」「常に工夫をする姿勢がある」「他者・他団体と協力することができる」「持っている情報を常に生かそうと考えている」について、心理的・技術的余裕を持ち、災害ボランティアに志願していたことが分かる。このことから、自然体験活動は、災害時に通じる実践的な対応力を具えるため、レジャー・レクリエーション、または一般的な目標を持つ教育を超えて、重要な側面を含んでいることが指摘できる。

一方、その他の 9 項目には有意差は認められず、自然体験活動の有無による違いは、見られなかった。

3.2. 災害ボランティア後の対応力を、自然体験活動の有無から分析する

次に、事前に具えていた自然体験活動の豊富さは、ボランティア参加後の対応力にどのように作用するのか、について分析した。前述と同様に、ボランティア参加後の回答を、【グループ 1】【グループ 2】の観点から、ノンパラメトリック検定によって比較した。

その結果、「前後を関連づけて思考することができる」「場面に応じた会話ができる」「危機を予知、察知することができる」「好き嫌いなく、偏食しない」「野外で排泄することができる」に有意差が認められ、災害ボランティア活動後、【グループ 2】の方が、これらの対応力が高いことが分かった。また、これら 5 項目以外の 16 項目については、災害ボランティア後の対応力に違いはなかった。

有意差が認められた 5 項目のうち、3.1.の分析結果と重複しているものは、「前後を関連づけて思考することができる」「好き嫌いなく偏食しない」「野外で排泄することができる」であり、重複しないものは、「場面に応じた会話ができる」「危機を予知、察知することができる」であった。このことは、「前後を関連づけて思考することができる」「好き嫌いなく偏食しない」「野外で排泄することができる」については、自然体験活動の有無によって生じていると考えられる対応力の違いを、災害ボランティア体験後にもそのまま残していたことを意味しており、事前には【グループ 1】【グループ 2】の間に違いがなかった、「場面に応じた会話ができる」「危機を予知、察知することができる」については、自然体験活動の豊富な人は、そうでない人よりも、これらに対する潜在能力を蓄えており、災害ボランティア活動を通じてこれらの能力を向上させ、より優れた対応力を持つことが分かった。

3.3. 災害ボランティアの現場で配慮すべきこと

災害ボランティア参加前では、21 項目中 9 項目が同水準の対応力だったが、参加後では、21 項目中 16 項目が同水準となっている。このことから、参加後に向けて、ボランティア参加者群としての対応力は、全体的に均質化していったことが推測できる。

また、事前調査に示されている、自然体験活動が豊富な人が、そうでない人よりも対応力が高い 12 項目から、同じく事後調査に示されている、自然体験活動が豊富な人が、そうでない人よりも対応力が高い 5 項目を除いた、「いつでもどこでも眠れる」「自分で決断できる」「創造力がある」「他人のことを思いやれる」「常に工夫する姿勢がある」「他者・他団体と協力することができる」「持っている情報を常に生かそうと考えている」の 7 項目に対する対応力は、災害ボランティア体験によって培われたと言えるが、それは、特に自然体験活動があまり豊富でなかった人に作用していることが分かった。

災害ボランティア参加者の自然体験活動の有無から、災害ボランティアの現場について考察すると、被災地における活動で、対応力を育みながら自然体験活動の豊富な人の対応力レベルに近づく人と、すでに持っている対応力を発揮しながら、潜在能力を部分的に開発させる自然体験活動の豊富な人は異質であり、大別できることを指摘したい。つまり、これらの人々が混在する災害ボランティアの現場では、自然体験活動の豊富さの観点から、災害ボランティアを導き、より効果的な運営を目指す必要があると考えられる。

4. 今後の課題

自然体験や冒険体験からの学びを利用して災害教育へ展開するためには、体験学習法という学びの方法を理解する必要がある。「体験学習」は、言葉としては知っている人が多いが、正しく理解をしている人は少ないように思う。単なる体験活動を指して体験学習と言っている例も少なくない。体験を通じて深い学びにするためには、学びの循環過程を経なければならない。

体験をただだけではなく、体験をした後にふりかえり、そのときに何が起こったのか事実を挙げる。そして、なぜそのようになったのか分析する。さらに、新しい方法を生み、次の体験へ活かす。このように、最初の体験から循環過程を経て、次の体験へと繋げることが大切である。特に失敗したときは、学びのチャンスになる。この体験学習を諦めずに続けることで、失敗が失敗でなくなり、いつか成功へ導かれる。途中で諦めると、失敗として残るのである。自然体験活動は、「冒険の要素と体験から学ぶ要素に溢れている自然環境の中」での活動だと言える。無限大の冒険と、無限に広がる学びの世界が、自然体験活動には存在している。

災害時の被災地の様々な状況は、刻々と変化する。前述した RQ 市民災害救援センターのボランティアセンターでの活動は、体験学習法の連続であった。毎日朝夕開かれるミーティングでは、活動をふりかえり、現状を把握し、課題や問題を見つけ、その課題・

問題の要因を分析する、そして、改善をして翌日の支援活動を行う。この繰り返しであった。

「生きる力」の中の「主体的に判断し、行動する」ということが、災害時では大変重要なのではないだろうか。最終的には、行動へと繋がらなければならないのである。

災害が起こる前、災害が起こったときに自分を取り巻く状況を受け止めて、自分の意志でその課題に取り組むことができる姿勢、そして、それが仮にうまくいかなくても、課題を見つけ、再び取り組むこと。このような姿勢が身につくための「防災教育」には、自然体験活動の要素を取り入れる意義があるのである。

5. 熊本地震を受けて

災害や震災には、一つとして同じものはない。今回の熊本地震もそうである。これまでの地震の例にない余震の激しさが、今回の特徴である。4月14日の震災発生以来、情報を収集し対応を検討した。16日未明の最大震度7の本震直後となった17日に、RQ九州の設置を検討し、九州の関係者に連絡を取り、打診し、支援拠点の設置の模索を始めた。

アウトドア関係者が中心に結成された RQ 市民災害救援センターが、一般社団法人 RQ 災害教育センターという法人になり、次の3つのミッションを掲げて活動を続けている。

- ①大きな災害が発生した際に、災害現場で様々な救援活動をする仲間たちを支援する
- ②「災害教育」を推進し、これからの社会を生き抜く人材を育成する
- ③「災害教育」という教育分野を、調査・研究によって確立する

今回の熊本地震も、九州の自然学校やアウトドアの関係者と連携をしながら RQ 九州を設置し、美里町と宮崎県五ヶ瀬町の2つの拠点で被災地の支援をスタートさせたが、強い余震が収まらない状況が続くなかで対応している。まさに、自然体験活動で育む「生きる力」を、被災地の現場で発揮することになる。

「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康体力」。このコンセプト通り、東日本大震災の災害ボランティアの「生きる力」が自然体験によって育まれることと、災害ボランティア体験によっても育まれる結果にあるように、自然学校の関係者のこれまでの活動や体験が、災害で変化した社会に向き合い、課題を見つけ、よりよく解決する行動を起こしているのである。自然体験活動と防災教育・災害教育と連動した、災害に強い人づくりと社会づくりに期待が寄せられる。

1) RQ 市民災害救援センター

<http://www.rq-center.net/>

東日本大震災の発生直後に、エコツーリズムや自然学校などアウトドア関係のネットワークを通じて構成された、災害ボランティアセンター。宮城県登米市東和町の旧鱒淵小学校体育館に東北本部を設置し、その後、気仙沼市の唐桑・本吉小泉、南三町歌津、石巻市河北にサテライトを設置し、1年半にわたりボランティア 45,000 名、支援物資 400t を被災地に届け、さらに多岐にわたる被災地の支援活動を行った。

2) モンベルアウトドア義援隊

http://about.montbell.jp/social/support/od_gientai/

アウトドアメーカーであるモンベルグループが様々な形で展開する被災地支援活動。1995 年に発生した阪神・淡路大震災の震災直後に、辰野会長の指揮でボランティア活動を行い、その後、大規模災害発生直後に支援活動を行っている。モンベルクラブの会員が間接的に被災地支援に関われる仕組みを構築し、多岐にわたる支援活動を行っている。熊本地震でも、南阿蘇村を拠点に支援活動を行った。

3) 日本エコツーリズムセンター

エコツーリズム推進のために専門家による効果的なアクションを実施することを目的に、全国 of 自然体験・環境教育の分野で活躍をしている方々をネットワークしている。東日本大震災後は、そのネットワークのメンバーに呼びかけ、RQ 市民災害救援センターを立ち上げている。

4) 一般社団法人 RQ 災害教育センター

任意団体で被災地の支援活動を行ってきた RQ 市民災害救援センターを母体に法人化し、多くのボランティアが被災地で支援活動する体験が教育的に意義があることから、災害教育というキーワードで被災地の支援、教育活動、研究活動を行っている。東日本大震災後、ネットワークを活用し 2014 年の広島土砂災害、2015 年の常総の水害、2016 年の熊本地震と、それぞれ「RQ 広島」「RQ 常総」「RQ 九州」を立ち上げ、支援活動を行っている。

事 業 報 告

自然学校新入職員研修会

2015 年 11 月 25 日-27 日 / 12 月 7 日-9 日 / 12 月 14 日-16 日 / 2016 年 1 月 20 日-22 日

全国の自然学校（アウトドアでの教育活動などを行う団体等）に所属する新入職員を対象とした集合研修会を開催した。昨年度から行っているが、全国各地での開催を望む声が多く、今年度は 4 カ所（長野、東京、京都、熊本）で企画。コミュニケーションスキル（伝える技術）の習得と、自然学校の職員として身に付けておきたい基礎教養の学習に取り組んだ。

■研修会タイトル

新入職員のための「自然学校的コミュニケーションの基礎」が身に付く研修会
～書く・話す・まとめるをとことん鍛える 3 日間～

対象：自然学校（または類する団体）の 1 ～ 2 年目職員（インターン実習生含む）。
また、半年以上の現場経験を積んでいること。

定員：各会場 20 名

参加費：9,800 円

講師：伝える技術（1） 文章の書き方

赤羽 博之 氏（書きものナビゲーター、耕文舎代表社員）

伝える技術（2） インタープリテーション

山田 俊行 氏（トヨタ白川郷自然学校 学校長）※東京

田中 啓介 氏（ホールアース自然学校 執行役員）※長野、京都、熊本

伝える技術（3） KP 法

川嶋 直 氏（公益社団法人 日本環境教育フォーラム 理事長）

《e ラーニング》

環境教育論 阿部 治 氏（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授）

自然学校原論 岡島 成行 氏（安藤百福センター センター長）

終了後、安藤百福センターより修了証を授与

主催：安藤百福センター

共催：公益社団法人 日本環境教育フォーラム、九州自然学校協議会（熊本会場のみ）

■各回の概要

(1) 長野 2015 年 11 月 25 日（水）～27 日（金）

会場：安藤百福センター 受講者数：20 名

コーディネーター：砂山 真一 氏

（一般財団法人 ポジティブアースネイチャーズスクール 代表理事）

(2) 京都 2015 年 12 月 7 日（月）～9 日（水）

会場：宇多野ユースホステル 受講者数：17 名

コーディネーター：砂山 真一 氏

（一般財団法人 ポジティブアースネイチャーズスクール 代表理事）

(3) 東京 2015 年 12 月 14 日（月）～16 日（水）

会場：オリンピックセンター 受講者数：20 名

コーディネーター：辻 英之 氏

（NPO 法人 グリーンウッド自然体験教育センター 代表理事）

(4) 熊本 2016 年 1 月 20 日（水）～22 日（金）

会場：元気の森かじか 受講者数：13 名

特別講師：山口 久臣 氏（九州自然学校協議会 代表）

岡島 成行 氏（安藤百福センター センター長）

コーディネーター：辻 英之 氏

（NPO 法人 グリーンウッド自然体験教育センター 代表理事）

■活動レポート（長野会場を中心に報告）

1 日目の様子



研修会開始

2015 年度の皮切りとなる新入職員研修会がスタート。

全体進行は関西を中心に活動する、一般財団法人 ポジティブアースネイチャーズスクール（PENS）代表理事の砂山真一氏。



活動紹介

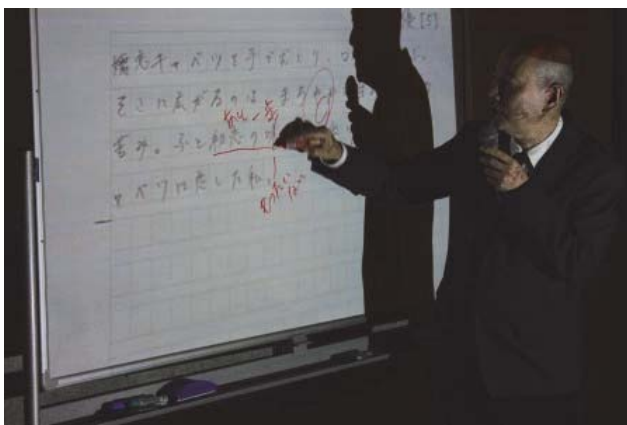
甲信越地域だけでなく、関西や四国など遠方からの参加者もいた。この研修会に期待することを共有し合った。



文章の書き方

講師の赤羽博之氏から、伝わる文章にするための7つのポイントを学ぶ。一人ひとりの課題作文を題材にして、いかに負荷をかけず内容を届かせるか――。

文章にも思いやりが大切なことを実感する時間となった。



後半は、白熱の“添削ライブ”！書いた文章が投影され、3分間の間に赤ペンで添削されていく。

文章力が確実にアップする方法も学び、書くことへのモチベーションが上がったようだ。

■2日目の様子

インタープリテーション

講師は田中啓介氏（ホールアース自然学校執行役員）。インタープリテーションという手法で、「伝える」から「伝わる」にするためには、どのようなことを意識するのが良いか、体験を繰り返しながら学んでいった。



後半は素材を決めて、1人3分でインタープリテーションの実践。

1人の発表に対し、19人の参加者と講師からフィードバックが飛び交った。

とことん体験&たくさんの失敗を通して、伝わることの本質を考える1日だった。



■3日目の様子



KP法

最終日、川嶋直氏（公益社団法人 日本環境教育フォーラム理事長）から、KP（紙芝居プレゼンテーション）の実演を通して、思いや考えを「まとめて」伝える方法を学んでいく。

5分に1回は笑いが起き、楽しみながら学ぶことの大切さも感じる事ができた。



各自でテーマを設定し、KP を作成。グループごとにエネルギー溢れるプレゼンテーションを行った。紙芝居のデザイン、構成、色使い、話し方などの工夫をこらし、相手に伝わることを、とにかく意識した



3 日間の研修を通して、確実に火がついたことが伝わってくる様子だった。新入職員という横の繋がりもできた。良き仲間、良きライバルとして、各地での活躍が波及していくことを期待したい。



京都会場

世界で一番居心地の良いホテル「Most Comfortable Hostel」を受賞したことのある宇多野ユースホテルで開催。紅葉の残る風情ある景観の中、快適に行うことができた。



東京会場

一番、参加団体の多様性があった。そのせいか、かなりの緊張感でスタートしたが、参加者の積極的なアイスブレイクによって、良い雰囲気の間が作られた。



熊本会場

地域色が最も強く、「九州」というまとまりを強く感じることができた会場だった。



東京・熊本会場の全体進行
辻英之氏 (NPO 法人 グリーンウッド
自然体験教育センター代表理事)



東京会場インタープリテーション講師
山田俊行氏 (トヨタ白川郷自然学校学
校長)



熊本会場特別講師
山口久臣氏（九州自然学校協議会 代表）



熊本会場特別講師
岡島成行氏（安藤百福センター センター長）

自然学校中堅職員研修会

2016年1月13日-14日 / 1月28日-29日 / 2月6日-7日

自然学校の可能性を広げていくために、事業の企画担当者（概ね3～10年の中堅職員）を対象とした研修会を開催した。コンセプトは、「ビジネスマインドを鍛える」。自然学校業界として初めての講師陣を迎え、これまでなかった自然学校×社会企業家とのコラボレーション企画を実現することができた。

■研修会タイトル

「自然系ビジネス・スタートアップセミナー～ビジネスマインドを鍛え、新時代の幕開けへ～」

■各テーマの概要および活動レポート

セミナー（1）「情報発信力を鍛える」

日程：2016年1月13日（水）～14日（木）

講師：山田 泰久 氏（CANPAN センター 代表理事）

会場：オリンピックセンター

参加者：15名

コーディネーター：

田中 啓介 氏（ホールアース自然学校 執行役員）

砂山 真一 氏（一般財団法人 ポジティブアースネイチャーズスクール 代表理事）

辻 英之 氏（NPO 法人 グリーンウッド自然体験教育センター 代表理事）

セミナー（2）「顧客の巻き込み力を鍛える」

日程：2016年1月28日（木）～29日（金）

講師：但馬 武 氏（ホーム 代表）

会場：オリンピックセンター

参加者：17名

コーディネーター：田中啓介氏、砂山真一氏

セミナー（3）「共感力を鍛える」

日程：2016年2月6日（土）～7日（日）

講師：井上 英之 氏（INNO-Lab International 共同代表／慶應義塾大学特別招聘
准教授）

会場：安藤百福センター

参加者：13 名

コーディネーター：田中啓介氏、辻英之氏

【各回共通】

対象：事業の企画担当者（概ね 3～10 年の中堅職員） 定員：20 名

参加費：10,000 円

主催：安藤百福センター

共催：公益社団法人 日本環境教育フォーラム

終了後、安藤百福センターより修了証を授与

■活動レポート セミナー（1）情報発信力を鍛える



第1回の中堅職員研修会は、自然学校×ITのハイブリットセミナー。山田泰久氏(CANPANセンター代表理事)を講師に迎え、ITを活用した効率的で効果的な組織運営について、ワークを通じて学んでいく。



使えるITツールや最近のトレンドなど、初めて聞く内容も踏まえつつ、自然学校として発信していきたいコンテンツについてアイデアを出し合った。



各団体で抱えている問題や、使用しているツールについても共有した。また、各団体としてこれから取り組みたいことを整理した。



まとめとして、IT を活用して自然学校を進化させていくためのアイデアを発表し合った。



「知らないことがこれほどあるのか」ということを身に染みて感じる参加者が多かったようだ。逆に、情報発信力を鍛えることが、自然学校のさらなる飛躍に結び付くことを予感できる2日間になった。

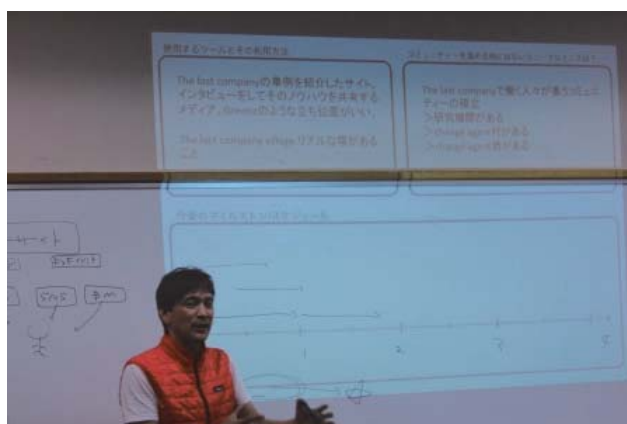
■活動レポート セミナー（2）顧客の巻き込み力を鍛える



講師は但馬武氏（ホーム代表）。
いかにファンを作り、巻き込んでいくか——。そのためのビジョンと戦略を、ストーリーとして考えることを目標に、研修会が始まった。



グループワークでは、①今の職場で誇りに思うこと・残念に思うこと ②こういう未来だったらいいと思うことを、テーマごとに分かれてアイデアを出し合った。



団体が大切にしているコア・バリュー（価値観）を整理しながら、人を巻き込むためのビジョンとアクションを「はっきりと」思い描くためのワークショップ。

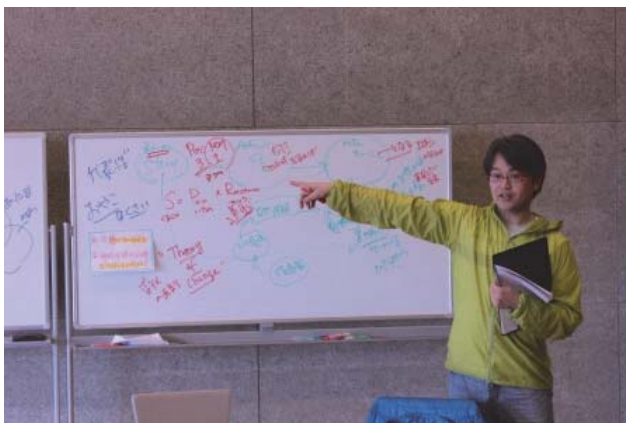


最後は、相手を投資家に見立てた 5 分間プレゼンテーション。自分のビジョンにどこまで相手を巻き込んでいけるか、顧客エンゲージメント戦略をどこまで考えたか、が問われる実践となった。



まとめとして、今後 1 ヶ月で行う具体的なアクションを全体でシェア。今回考えた戦略が、どのようにブラッシュアップされていくのか楽しみである。

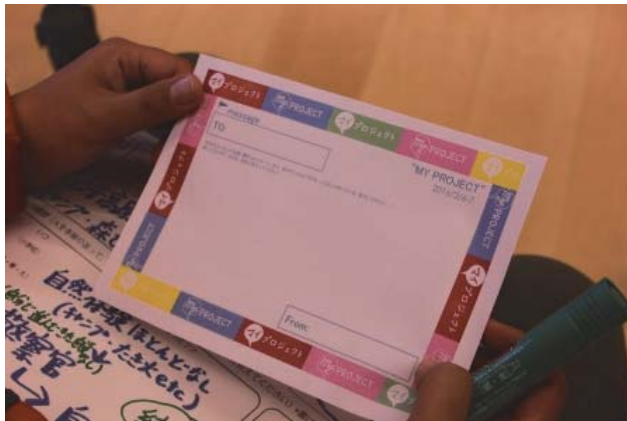
■活動レポート セミナー（3）共感力を鍛える



「私」の経験の中から、「私」のミッションを生み出していくマイ・プロジェクト。組織としての義務感ではなく、自分で始めたいことを実現するために、まずは自分のストーリーに目を向ける。講師は国内の社会起業家育成・輩出に取り組む井上英之氏（INNO-Lab International 共同代表）。



一人ひとりプロジェクトを発表していく。個人の思いが、周りからの質問や新しいアイデアによって、どんどん具現化していく。エネルギー溢れる発表の場は、深夜まで続いた。



発表後に渡される「メッセージカード」。どうやったらプロジェクトがうまくいくか、相手の力になれる応援メッセージが全員から届く。



最後はアートワーク。雑誌を切り抜いたりしながら、自分の思いを作品として表現していく。これまでの研修会では見られなかった、独創的なふりかえりの方法だった。



自分自身が持っている可能性をふりかえり、その物語が社会を変えていくことに繋がる可能性を強く実感できる2日間となった。今回踏み出した小さな一歩が、次への大きな一歩になることを期待したい。

自然学校経営者・管理者研修会

2016年2月4日-5日

高い経営能力を持つ人材を養成するため、安藤百福センターとして初の自然学校経営者・管理者向け研修会を開催した。ドラッカーのマネジメント理論に触れながら、成果とは何か、時間をどう考えるかを中心に、ダイアログ（対話）を重視した研修会を行った。

■研修会タイトル

「自然学校経営者のためのドラッカースクール」

日程：2016年2月4日（木）～5日（金）

会場：オリンピックセンター

対象：入職10年以上の自然学校経営者・管理者

参加者：7名（定員8名）

講師：清水 功也 氏（フリーランス、九州社会デザイン研究所準備室長）

主催：安藤百福センター

共催：公益社団法人 日本環境教育フォーラム

終了後、安藤百福センターより修了証を授与

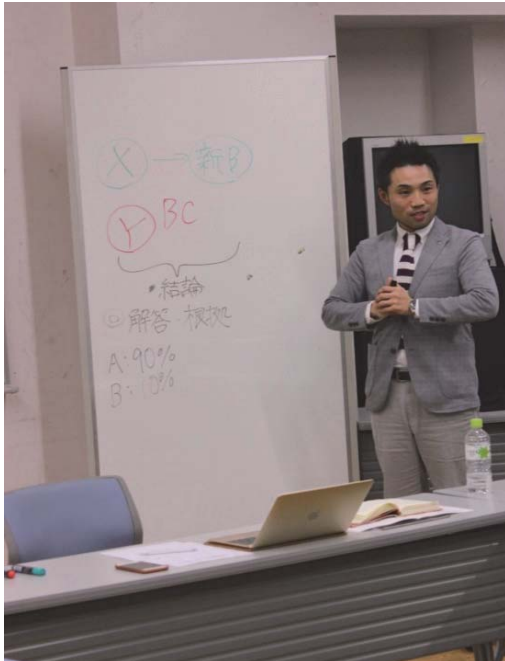
■活動レポート



各地から自然学校の経営者・管理者が集まり、「自然学校×ドラッカー」をテーマとした研修会が始まった。全体進行は辻英之氏（NPO 法人 グリーンウッド自然体験教育センター代表理事）。



1人8分で自己紹介プレゼンテーションを行い、課題や研修に期待することなどを全体で共有した。



講師は清水功也氏（九州社会デザイン研究所準備室長）。『経営者の条件』をベースとしたオリジナルテキストを使い、一人ひとりとのダイアログ（対話）を中心とした展開で進めていった。



書籍の読み合わせを行いながら、1人ずつにコメントを求める。抽象的な言葉が多いが、それを自分の状況に置き換えて考えるということをして、とことん行った。



次に繋げられるように、アクションプランを作成。異なる分野や業種からもたくさんのヒントを学ぶことができたようだ。続編の開催を望む声が多かった。



これからの自然学校業界は、他業種の方ともっと繋がる機会をつくるべきだ、と強く実感した研修会だった。今回の学びが、組織だけでなく社会を変えていくことになると信じたい。

平成 27 年度

自然ガイドステージⅠ 登山ガイドステージⅡ 安全管理技術研修会

2015 年 6 月 23 日-26 日 / 12 月 15 日-18 日

6 月 23～26 日

1. 実施報告と結果

開催場所 安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
参加者 10 名（自然ガイドⅠ：9 名、登山ガイドⅡ+スキーガイドⅠ：1 名）
公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団助成事業
担当講師 長内 覚、平木 順
結果 自然ガイドⅠ：9 名とも合格
登山ガイドⅡ+スキーガイドⅠ：1 名合格

2. 講義及び実技内容・研修プログラム

第 1 日目	9 時 30 分 開講式 オリエンテーション（机上 0.5h）（平木） 公益社団法人日本山岳ガイド協会の資格制度について 本研修会の位置付け	
	10 時 00 分～12 時 00 分（机上 2h）（平木） フィールドにおける安全管理 安全管理の基本認識 自然界における危険の認識と評価	2h
	13 時 00 分～17 時 00 分（実習 4h）（平木、長内） 危険を回避する基本的な方法 ロープを使って、参加者の安全を守る方法 簡単な結び方、危険箇所にロープを固定するアイデア ツエルト設営（デモンストレーションと解説） ザック搬送	4h
	19 時 00 分～20 時 50 分（机上 2h）（長内） 講義 自然解説技術	2h
第 2 日目	8 時 00 分～12 時 00 分（机上 4h）（平木） 危急時対応技術 リスクアセスメントの方法 リスクアセスメント実習	4h
	13 時 00 分～17 時 00 分（実技 4h）（長内） 講義 事例検証データ分析 登山を例にした、山岳事故の分析 講義 ガイドの法的責任 講義 地図とコンパスの使い方	4h

☆課題	慣れていくものと思われる。 個人で活動している者と、団体で活動している者に分かれるが、今後自分のフィールドに戻ってから、それぞれのエリアで、今回学んだ安全管理についての意識を、周りの指導者に対してどう啓蒙していくのが課題である。
☆改善策	12月の研修会の案内書を、修了時に配れるようにする。
☆今後の要望	CONE、SIA、SAJともに告知が不十分で、それぞれの会員にこの講習会のことがよく知られていない様子。広報・告知にもう少し力を入れてもいいと思う。

＜報告 2＞ 長内 覚

講習内容	講義（自然解説術・山岳事故の分析・山の気象・読図・法的責任など） 実技（基本ロープワーク・ツェルトの設営・フィックスロープ・ローリング・ロアダウン・搬送・ショートロープ、ルートガイディングなど）
☆感想	各地域での自然学校勤務者や体験指導者の経験がある方の参加者が多く、モチベーションも高く講習態度はまじめだった。少人数のため効果的な研修を提供できた。
☆理解度・習得度	仕事の内容が違うため、特に安全管理の意識が低い方が多かったが、実技や講義で指導し、危機意識を持たせることを伝えられた。
☆課題	自然解説の解説方法のバラツキがあり、その標準化、およびいかに安全管理意識の必要性を理解できるかが課題である。
☆改善策	特になし。
☆今後の要望	参加者を増やすこと（各組織に効果的に告知する）。 しっかりと情報を届けること。

12月15日～18日

1. 実施報告と結果

開催場所	安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
参加者	7名（自然ガイドⅠ：6名、登山ガイドⅡ+スキーガイドⅠ：1名） 公益財団法人 安藤スポーツ・食文化振興財団助成事業
担当講師	長内 覚、平木 順
結果	自然ガイドⅠ：6名とも合格 登山ガイドⅡ+スキーガイドⅠ：1名合格

2. 講義および実技内容・研修プログラム

第 1 日目	9 時 30 分 開講式 オリエンテーション 担当 (平木)	0.5h
	公益社団法人日本山岳ガイド協会の資格制度について 本研修会の位置付け	2h
	10 時 00 分～12 時 00 分 (机上 2h) (平木)	
	フィールドにおける安全管理 安全管理の基本認識 自然界における危険の認識と評価 危急時対応技術 リスクアセスメントの方法	4h
	13 時 00 分～17 時 00 分 机上 4h 担当 (平木)	
第 2 日目	危急時対応技術 リスクアセスメント実習 危急時の初期対応 応急手当の標準実技確認	2.5h
	18 時 30 分～21 時 00 分 実技 担当 (平木)	
	危険を回避する基本的な方法 (その 1) ロープを使って、参加者の安全を守る方法 簡単な結び方、危険箇所にロープを固定するアイデア ショートロープシステムの導入	
	8 時 00 分～16 時 00 分 実習 担当 (平木、長内)	8h
	フィールド実習 ルートガイディングの実践 (浅間・八ヶ岳パノラマトレイル)	
第 3 日目	16 時 00 分～17 時 00 分 机上 担当 (平木)	1h
	地図とコンパスの使い方	
	17 時 00 分～18 時 00 分 机上 担当 (長内)	1h
第 4 日目	講義 自然ガイドの業務	
	AM 講義 山岳事故検証 ガイドの法的責任	4h
	PM 実習 固定ロープ・ロアリング・ツエルトの設営・搬送等 夜 山の気象と地形	
4 日間の 研修時間	AM 講義 運動生理学 自然解説技術	3h
	PM 実習 危機回避の方法 確認試験 まとめ (ふりかえり)	
	机上講習 実技講習 試験 研修時間合計	12 時間 19 時間 1 時間 32 時間

3. 講師報告

<報告 1> 平木 順

講習内容 講義（安全管理技術・危急時対応技術・地図とコンパスの使い方など）
実技（基本ロープワーク・ツエルトの設営・フィックスロープ・ショートロープ基礎・危急時対応シミュレーショントレーニング・ルートガイディングなど）

☆感想 すでに各地で体験指導者としての実績や経験のある方が多く、実践的な話ができた。素直でまじめな方ばかりという印象だった。また、積極的な受講態度が印象的だった。

☆理解度・習得度 今回ロープワークについては今までで一番習熟度が高かったように感じた。事前練習や日常的にロープを扱い慣れている者が多いためと思った。一方、ルートガイディング的なことは、まだまだこれから習熟していかなければならないことが多いと感じた。ただ、毎回感じることであるが、自ら学ぼうという態度の方が多かったのもので、徐々に慣れていくものと思われる。

☆課題 毎回、参加者がだんだん減っていくことが課題である。

☆改善策 JMGA の資格を取るとこんなに良いことがあるということを、はっきり謳えるように、メリットを強調する。

☆今後の要望 CONE、SIA、SAJ とともに告知が不十分なのか、すでにニーズがないのか、今一度調査をする必要があるように感じる。

<報告 2> 長内 覚

講習内容 講義（自然ガイドの業務・自然解説術・山岳事故の分析・山の気象・法的責任など）
実技（基本ロープワーク・ツエルトの設営・フィックスロープ・ロアリング・ロアダウン・搬送・ショートロープ・ルートガイディングなど）

☆感想 若い世代が多く、モチベーションの高さを感じた。

☆理解度・習得度 特にロープワーク等は前もって練習して来ている方が多く、習得度は高い。

☆課題 資格取得後、いかに自立するか。

☆改善策 特になし。

☆今後の要望 参加者を多く集める（情報を届けさせる・告知する方法）。

第 5 回浅間大学院生セミナー

2015 年 7 月 17 日-19 日

環境教育や野外教育、自然体験活動など広く「環境の分野」を研究している研究者たちが集まり、研究を通して研鑽と交流を図ることを目的に第 5 回浅間大学院生セミナーを開催した。今回も分野を超えた交流を求めて大学院生が集まり、環境への関心を共有する 3 日間となった。

期日：2015 年 7 月 17 日（金）～7 月 19 日（日） 2 泊 3 日

内容：1 日目＝野外アクティビティ、講義

2 日目＝講義、研究発表、ティートン・サイエンス・スクール（以下、TSS）
短期留学報告、TSS 流・リーダーシッププログラム体験

3 日目＝TSS 流・環境教育プログラム体験

参加者数：大学院生 10 名、教員 4 名、事務局 3 名

参加費：6,000 円（食費、宿泊費込み）

参加教員（順不同、敬称略）：

安藤昭一（千葉大学教授）

朝岡幸彦（東京農工大学教授）

結城正美（金沢大学教授）

岡島成行（安藤百福センター センター長）

■ 1 日目



台風が近づくなか、東京や大阪など各地から参加者が集まり、3 日間にわたるセミナーが始まった。



今年は浅間・八ヶ岳パノラマトレイルを活用して、ロゲイニングという野外スポーツを行った（コミュニケーション促進のため）。地図とコンパスを手に、チームでチェックポイントを目指した。

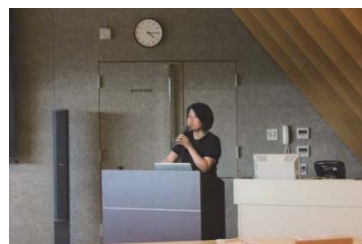


夜は教員の講義を行った。環境について研究するに当たり、考え方や価値観の根底となる環境思想の重要性を考える時間となった。

■ 2 日目



大学院生の研究発表を行った。意見交換をじっくり行いたいという声が多かったので、今年は1人に付き30分程度の持ち時間とした。それを午前、午後とグループを変えて実施。異分野の研究者から意見をもらえる機会は滅多にないので、これからの研究を進めるためのヒントも得られたようだ。



教員のみなさまからは、各30分ほどの講義を行っていただいた。一流の専門家から様々な領域の内容を、一気に学ぶことができる貴重な時間となった。



昨年度 TSS 派遣者の松岡宏明さん（立教大学大学院）と辻梨花さん（9 月から北テキサス大学）から、短期留学の報告を受けた。

初の試みとして、TSS で学んだプログラムを 2 人が実践し、参加者と内容のシェアを行った。報告だけでなく実践を伴うことで、TSS で行っていることをより身近に感じることができた。前半はリーダーシッププログラムとして、4つのアクティビティを体験。初めて見るものもあれば、日本でもよく見るものもあった。



■ 3 日 目

TSS 流プログラム体験の後半、野外も使って環境教育プログラムを体験した。英語を交えることで、アメリカの雰囲気も加わった。最後は教員も含めてチーム対抗アクティビティ。この3日間で一番の盛り上がりだった。



修了証授与後、教員のみなさまから講評をいただき、セミナーは幕を閉じた。今回も活発な議論が行われ、新しいネットワークもできた。環境に関心のある研究者の繋がりが、日本だけでなく世界の環境分野を動かす原動力になることを期待したい。



学生発表要旨

氏名: 小林 佳史

所属: 東京農工大学大学院・環境教育学研究室

発表テーマ:

リニア中央新幹線開通に伴う地域づくりの展望



概要:

リニア中央新幹線の開通に伴って行われる地域づくりは、これから 10 年以上も後になる超長期的な計画である。その超長期的な地域づくりを明確に定められるのか、地域づくりが将来世代にわたりいかに継続して行えるか、それをどれだけ広域的に効果を出すことができるかが課題となってくる。そこで市民や自治体、企業等が連携して、広域的かつ超長期的な地域づくりを、効果的にかつ持続可能に行えるかを考えている。

氏名: 松岡 宏明

所属: 立教大学大学院環境コミュニケーション領域

発表テーマ:

自然系観光地の現状を“教育”の視点から再考する
～ハナウマベイの事例を中心に～



概要:

観光地による自然資源の食い潰しや自然の適正利用が叫ばれるなか、地域とボランティアといった観光客を受け入れる側の人たちを、自然公園の中で教育するプログラムを作り上げることにより、学習の中で自然公園の価値の共有と創造を行い、自然公園を適正利用するといった合意形成に成功した事例がある。その事例は、ハワイ州オアフ島にあるハナウマベイ自然保護区である。日本の自然公園は地域性自然公園の仕組みを導入しており、自然保護と観光の両方を成立させるためには、自然公園地域に住む人々、その中で働いている人々、自然公園の周辺に住む人々の協働、協力なくして実現は難しいだろう。本研究テーマでは、日本とアメリカの国立公園の歴史と現状をまとめ、ハナウマベイのような事例を取り上げ、日本の自然系観光地のあり方を今一度再考したいと思う。

氏名:辻 梨花

所属:北テキサス大学 博士課程 哲学・宗教学科

発表テーマ:

環境哲学・環境教育



概要:

昨年度は”An Ethics-Based Approach to Environmental Education”という、環境哲学、倫理の視点を中心に置いた環境教育という研究テーマを発表した。哲学的問いは環境教育の理論と実践のなかで重要な役割を果たすのではないかと考えていたが、ティートンへのインターンを経て、それへの考えはさらに強いものとなった。ティートンでは、science というツールで自然を知るということを大切にしており、また、それと同様にリーダーシップや精神というソフトな部分も同時に育てるということを行っていた。経験や活動といった要素と、活動を支える、またそれによって育まれる精神というのは、相互に働くものだと考えている。関西大学大学院を修了してから、新たな研究というのはまだ行えていないが、アメリカに行ってから、この方向で進もうと現時点では考えている。

氏名:高橋 宏斗

所属:大阪体育大学大学院 スポーツ科学研究科

発表テーマ:

登山のストレス場面におけるソーシャル・サポートが参加者の
ストレスコーピングに及ぼす影響



概要:

野外教育における冒険教育は、自然環境や生活環境、冒険的要素などからストレス的な状況を意図的に作り出し、あるいは利用して行われる教育である。それらのストレスを克服する体験を積み重ねることで、自己概念の変容など様々な教育的効果を生み出している。また近年、個人を取り巻く重要な他者からの様々な形の援助である、ソーシャル・サポートによるストレス緩衝効果も報告されてきた。そこで、本研究では、大学生のある部活を対象に、ソーシャル・サポートがストレスコーピングにどのような影響を及ぼすのかを調査した。結果としては、参加者は、ストレスに対して気持ちの調整を行うようなコーピングが多く見られた。また、他者からの感情的なサポートが、回避的なコーピングに影響を及ぼしていることが明らかになった。

修士論文でもストレスとその克服体験、成功体験に着目した研究を行い、社会にある様々な教育の場面の、どこかしらにアプローチができる論文を作成したいと考えている。

氏名:徳田 真彦

所属:大阪体育大学大学院

発表テーマ:

野外活動の効果測定および成長プロセスの構築



概要:

近年では、野外活動の効果に影響する「要因」にアプローチする研究がなされてきているが、なかでも伊原ら(2009)は冒険教育プログラムにおける自己効力感の変容過程について、質的研究を用いてそのプロセスモデルを提唱している。しかし、野外教育の一つである「冒険キャンプ」は体験そのものが非常に特殊なものであり、一般的に普及している組織キャンプや教育キャンプといった形式のキャンプとは異なる一面を持つ。組織キャンプや教育キャンプにおける効果向上へ繋がる体験・要因を示唆する研究はいくつか見られるが、伊原らのように、プロセスモデルを提唱している研究は見当たらない。そこで本研究では、伊原らのプロセスモデルを参考に、キャンプの種類による成長プロセスの違いやプログラム特性の検討など、さらに詳細な成長プロセスモデルを構築することを目的とする。現在、成長プロセスを計る指標を何にするのか、どのように検討していくのかについては検討中である。

氏名:横川 恵理

所属:大妻女子大学大学院・生活環境学専修

発表テーマ:

有機農業による持続可能な環境共生型社会の実現に向けて



概要:

農業は食料生産だけでなく、水田の貯水機能による洪水防止や水資源の涵養、生物多様性保全などの多面的機能がある。しかし、農薬や化学肥料の投入により生産拡大を図る慣行農業が主流となって以降、農業は土壌汚染、水質汚染、生物多様性の破壊などの深刻な環境汚染を作り出した。持続可能な社会形成に向けて、環境と共生できる農業へ移行を進める必要がある。2006年に「有機農業の推進に関する法律」(有機農業推進法)が議員立法で制定されたことにより、有機農業が自然循環機能を大きく増進し、環境負荷を低減する農業として国によって認められた。

本研究では、環境共生型社会の実現に向けて、有機農業への移行を進めるための方法を確立することを目的としている。現地調査、土壌微生物多様性の測定を行い、収量、経営、労働生産性、環境負荷低減レベルを調査、比較することで有機農業の実態と普及を妨げている原因を明らかにし、持続可能な環境共生型社会に最も適した有機農業形態の確立を目指す。

氏名: 田開 寛太郎 所属: 東京農工大学大学院 連合農学研究科 農林共生社会科学専攻 発表テーマ: 環境教育×コウノトリ×湿地	
概要: 現在、兵庫県豊岡市を事例に、コウノトリ野生復帰に関する研究を行っている。 農薬散布や圃場整備の影響により、コウノトリの生息環境が悪化したため、1971年に日本国内の野生コウノトリが一度消滅した。そのため、最後の生息地であった豊岡市では、コウノトリの人工繁殖や放鳥など野生復帰事業が進められた。その結果、野外でもう一度コウノトリが暮らすようになり、今ではその風景に親しむことができるようになった。しかし、コウノトリとともに暮らす地域社会に向けては、人と関わることに关してある程度の”緊張”があったのも確かである。この問題意識の解決には直接結び付かないが、以下の点を目的に、研究課題を立てた。 「コウノトリ生息地保全のための水田ビオトープ維持管理活動に焦点を当て、地域住民、行政と学校等が連携し、コウノトリと共生する地域づくりを目指した総合的な『学びの場』を前提とした、創発される環境教育の意義とコウノトリに関する教育実践の具体的な効果を明らかにすること。」 これらの研究を通じて、コウノトリと共に生きる未来(図)、ひいては、人間と自然との関わりのある方を、具体的に描けるようになっていたいと思っている。	

氏名: 飯田 輝 所属: 大阪体育大学大学院 発表テーマ: 内発的動機付け・ストレス・成功体験	
概要: 【内発的動機付け】 「内発的な動機付けができているキャンパーは、様々な効果を有意に向上する」といった研究は多くされている。しかし、内発的な動機付けを促すためのプロセス(桜井の作成したモデル)を実証した研究は少ない。そこで、プロセスを証明するような研究を行いたい。 【ストレス・成功体験】 ストレスが成功体験とどのような関係があるのか研究したいと思っている。ストレスコーピングやストレスの種類についての研究は多くある。具体的にどのコーピングが成功体験と深い関係があるのか、また、身体的ストレスや意識的ストレスなど、どのストレスが効果的な成功体験をもたらすのかを研究したいと思っている。	

氏名:南里 翔平

所属:首都大学東京・都市環境科学研究科 地理環境科学域

発表テーマ:

赤城火山5万年前頃の噴火／地学教育における「自然を見る眼」の育て方



概要:

大学院では火山地質学を専攻しており、現在、群馬県中部にある赤城火山の約5万年前頃の噴火について調べている。赤城山は国内では富士山に次ぐ規模を持つ大型の成層火山で、約7～5万年前頃の噴火で山頂部にカルデラを形成したことが分かっている。約4.4万年前の噴火では「鹿沼土」として知られている鹿沼軽石を噴出した。この噴火は、軽石が約150km離れた茨城県日立市でも見つかることから、規模の大きな噴火であったことが推測できる。多くの大規模な噴火では火砕流を伴うことが知られているが、鹿沼軽石の噴火ではこれが見つかっておらず、軽石の上位には火山岩をほとんど含まない黒色の砂が堆積している。今後、山麓から日立市にかけての地域で、鹿沼軽石と正体不明の砂について分布や層の厚さを調べる予定である。

また、大学院で研究を続けながら、高校で理科(地学)の非常勤講師として勤めている。理科の、とりわけ地学は自然を観察することを重視している科目であるから、実際の自然を見せながら、どのように自然をとらえたらよいかを指導している。子どもたちは元来、感覚的に自然をとらえる力を持っていると考えている。それを上手く引き出せないか、実験的にいろいろと試している。

氏名:中村 菜摘子

所属:東京農工大学農学府共生持続社会学専攻

発表テーマ:

維持可能な地域づくりに向けた肉食文化継承活動の意義と可能性



概要:

食育基本法や食育推進計画では、規則正しい食生活や農業体験、伝統文化の保存継承などが盛り込まれているが、そこには載せられていない食文化もある。まだ地域の食文化としての認識が浅いものもあり、それらの継承活動の意義も考えることが必要ではないか。調査地とする長野県飯田市遠山郷南信濃地区では、地元で採れた山肉(ジビエ)を扱うお店がある。もともと貴重なたんぱく質源として食されていたジビエであるが、現在では獣害対策の一環として食べようという動きがある。だが、ジビエを畜産以外の新しい肉(高級品にもなっている)としてとらえるのではなく、日常食として受け継がれてきた食文化の上に、時代に合わせた新たなものを加えるという視点から論じていきたい。

橋谷晃さんと歩くトレッキング講座

2015 年 6 月 20 日-21 日 / 8 月 29 日-30 日 / 2016 年 1 月 16 日-17 日

第 4 回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座

主催：安藤百福センター 運営協力：ネイチュアリングスクール木風舎

自然の美しさ、雄大さ、繊細さに触れるガイドウォークを行い、ただ歩くだけではなく、トレッキングの深い魅力を伝える体験講座を開催した。今回も、幅広い世代の登山者に人気のある橋谷晃氏にご協力いただき、自然写真術をテーマとして、湯の丸高原レンゲツツジ群落での自然解説、安藤百福センターでの講演、および軽井沢での自然観察を行った。

期日：2015 年 6 月 20 日（土）11 時 ～ 21 日（日）15 時

プログラム：

- 6 月 20 日（土） ・湯の丸高原レンゲツツジ群落での自然観察と写真術解説
・橋谷晃氏講演「コンパクトカメラでも撮れる自然写真術」
- 6 月 21 日（日） ・雲場池での野鳥観察と軽井沢の自然観察

参加者数：9 名（男性 2 名、女性 7 名）、講師 1 名、事務局 2 名、
サポートスタッフ 1 名（木風舎）

参加費：19,500 円（食費、宿泊費、期間中のプログラム体験費込み）

講師：橋谷 晃（ネイチュアリングスクール木風舎代表）

■活動の様子（1 日目）



今回のテーマは「自然写真術」。満開のレンゲツツジをモデルに、ねらった通りの写真を撮るためのコツを分かりやすく解説いただいた。



カメラの性能に頼らなくても、少し視点を変えるだけで素敵な写真を撮ることができる。コンパクトカメラや携帯電話のカメラでも、そのとき感動したものを上手く写真に残すコツを学ぶことができた。



自然写真術の講演では、これまで橋谷氏が訪れた世界各地の写真をご紹介いただき、撮影時の状況を解説しながら、感動を伝えやすい撮影術についてお話しいただいた。

■活動の様子（2日目）



雨天でも楽しめるよう、プログラムを軽井沢での自然観察に変更した。まずは雲場池の周囲をゆっくりと歩きながら、池周辺の植物や野鳥などを解説いただいた。



軽井沢が避暑地として有名になるきっかけとなった宣教師の礼拝堂や、文人たちが愛した中山道の古い宿などの周辺には、今も豊かな自然が多い。苔むした地面の上には季節外れのカエデの葉が落ちており、格好の撮影モデルとなっていた。



メインストリートから一本横道に入ると、閑静な別荘地が続く。そこでは時間がゆっくりと流れている。豊かな自然と歴史ある建物が共存する初夏の軽井沢を散策した。

第5回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座

主催：安藤百福センター 運営協力：ネイチュアリングスクール木風舎

自然の美しさ、雄大さ、繊細さに触れるガイドウォークを行い、ただ歩くだけではなく、トレッキングの魅力を伝える体験講座を開催した。今回も、幅広い世代に人気のある山岳ガイド・橋谷晃氏にご協力いただき、山ごはんをテーマに、箆ノ登山や池の平湿原のトレッキングを行った。

期日：2015年8月29日（土）11時～30日（日）15時

プログラム：

- 8月29日（土）
 - ・カップヌードルを使ったお手軽ワンバーナー山ランチ
 - ・箆ノ登山トレッキング
 - ・信州の食材でBBQ料理
- 8月30日（日）
 - ・即席でできる夏野菜の梅茶漬け
 - ・池の平湿原トレッキング
 - ・ワンバーナーで作る甘栗のミルクリゾット

参加者数：参加者13名（男性3名、女性10名）、講師1名、事務局1名、サポートスタッフ1名（木風舎）

参加費：19,500円（食費、宿泊費、期間中のプログラム体験費込み）

講師：橋谷 晃（ネイチュアリングスクール木風舎代表）

■活動の様子（1日目）



今回のテーマは「山ごはん」。まずはバーナーの組み立て方や火のつけ方などを分かりやすく解説いただき、カップヌードルに一工夫加えたお手軽ワンバーナー山ランチを作った。



バスで池の平に移動し、箆ノ登山を目指す。雨上がりのため360度の大展望は望めなかったが、霧が懸かった幻想的な原生林と、高山植物を愛でながらの山行となった。



夜は、信州の選りすぐりの食材を使った **BBQ** 料理。炭火を使った燻製や焼き肉、ダッチオーブン料理などが披露され、大満足の宴となった。

■活動の様子（2日目）



朝食は、夏野菜の梅茶漬け。山での携帯に便利な食材を使い、即席でできる技を伝授していただいた。



あいにくの天候の中、バスで再び池の平に上がって湿原の周囲をトレッキング。雨はときに激しく降ったが、初秋の高山植物を楽しむことができた。



センターに帰還後、山の中で調理する予定だった甘栗のミルクリゾットをワンバーナーで作り、舌鼓を打った。山ごはんで気を付けるポイントなどの説明もあり、これから実践デビューをしたいと思う方も多かったのではないかな。

第6回橋谷晃さんと歩くトレッキング講座

主催：安藤百福センター 運営協力：ネイチュアリングスクール木風舎

自然の美しさ、雄大さ、繊細さに触れるガイドウォークを行い、ただ歩くだけではなく、トレッキングの魅力を伝える体験講座を開催した。今回も、幅広い世代に人気のある山岳ガイド・橋谷晃氏にご協力いただき、冬のトレッキングをテーマに、高峰山と箆ノ登山に登った（当初はスノーシューを使う予定だったが、暖冬で雪があまりなかったので、変更を余儀なくされた）。

期日：2016年1月16日（土）11時～17日（日）16時

プログラム：

1月16日（土） ・高峰山（2106m）トレッキング
・信州の食材を使った鍋料理

1月17日（日） ・箆ノ登山（2227m）トレッキング

参加者数：参加者11名（男性6名、女性5名）、講師1名、事務局1名、
サポートスタッフ1名（木風舎）

参加費：19,500円（食費、宿泊費、期間中のプログラム体験費込み）

講師：橋谷 晃（ネイチュアリングスクール木風舎代表）

■活動の様子（1日目）



まずはバスで車坂峠に向かい、昼食後、登山口を出発。動物の足跡やシャクナゲの冬越しの様子などを観察しながら、尾根へとゆっくり登っていった。



尾根からは地面が凍結している箇所があるため、シューズスパイクなどの滑り止めを装着。佐久盆地と八ヶ岳の雄大な眺めを横目に歩くと、1時間ほどで高峰山山頂に到着。富士山からアルプスまでの絶景を堪能することができた。



夜は、信州の食材をふんだんに使った鍋料理。講師も交えて参加者同士で和気あいあいと鍋をつつき、舌鼓を打った。

■活動の様子（2日目）



朝食後、バスで地蔵峠に向かい、籠ノ登山の頂上を目指す。少しずつ雲が広がり始めるなか、原生林の中を緩やかに登っていく。この時期ならではの静かな山行である。



頂上近くは急登となるが、眼下にはアルプスから富士山まで、日本列島の幅を体感できる眺望が広がり、それに励まされながら登っていく。



出発から 2 時間半ほどで籠ノ登山の頂上に到着。風は穏やかで、360 度の展望を存分に楽しむことができた。今回、雪不足のためスノーシューを楽しむことはできなかったが、冬山の魅力を知る良い機会となったようだ。

浅間・八ヶ岳パノラマトレイル新コース体験ツアー

2015 年 7 月 4 日 / 10 月 24 日-25 日 / 10 月 31 日-11 月 1 日

浅間・八ヶ岳パノラマトレイルに、新たなコースを設定することになった。地元を中心とした参加者とともに歩き、コースを検討するために様々な意見を聞いた。

(1) 千曲川コース

第 1 回は、千曲川流域を舞台とした自然と歴史を感じることができる「千曲川コース」(約 16km) の体験ツアーを行った。

期日：2015 年 7 月 4 日 (土) 8 時 30 分 ～ 15 時 30 分

行程：8:45 安藤百福センター→鵜久保→干間無池→大杭橋→小諸大橋→久保→戻り橋
→懐古園→大久保→氷→安藤百福センター15:10

参加者数：参加者 12 名、事務局 2 名



ビオトープ (鵜久保)



御牧ヶ原から崖に沿って下る



眼前に迫る御牧ヶ原の断崖 (久保)



大杭橋 (小諸市で唯一の吊り橋)



懐古園から千曲川へ向かう散策路



冷気を感じる風穴 (氷)

（２）蓼科コース（仮）

第２回は、大河原峠から蓼科山北麓を下り、春日温泉や旧望月宿を経由して安藤百福センターまで、約 40km の体験ツアーを行った。

期日：2015 年 10 月 24 日（土）8 時 30 分 ～25 日（日）16 時

行程：

1 日目／（8:30 バスでセンター出発）10:00 大河原峠→虹の平→望月少年自然の家→
春日の森→春日温泉 16:15

2 日目／8:30 春日温泉→五郎兵衛用水跡→望月城址→農業大学校→安藤百福センター
15:40

参加者数：参加者 8 名、事務局 2 名



トキンの岩



望月少年自然の家付近



春日の森（馬道）



竹の城からの浅間連峰



望月城址への急登



御牧ヶ原台地

(3) 軽井沢コース(仮)

第3回は、軽井沢から御代田を経由して小諸まで、約35kmの体験ツアーを行った。

期日：2015年10月31日(土)9時～11月1日(日)14時30分

行程：

1日目／9:15 軽井沢駅→雲場池→離山→南原→釜ヶ淵→信濃追分駅 14:15

2日目／8:30 信濃追分駅→旧追分宿→大谷地→真楽寺→南ヶ原→松井→小諸駅 14:30

参加者数：参加者11名、事務局2名



離山の展望台



南原別荘地に行く



釜ヶ淵付近からの浅間山



旧追分宿



真楽寺・大沼の池



南ヶ原からの眺望

人と自然 特別講演会

2015 年 8 月 7 日

山形県真室川町に残る、生業としての鷹匠の伝統を受け継ぐ鷹匠・松原英俊氏をお迎えし、野生の生き物との豊かな関わりを通じて構築された氏の世界観についてお話しいただいた。

当日は、松原氏の新たな狩りのパートナー（イヌワシとソウゲンワシのハイブリッドで、当時はまだ名前が付いていなかった）とともに登壇、会場を沸かせた。

タイトル：「鷹とともに」

講師：松原英俊氏（鷹匠）

日程：2015 年 8 月 7 日（金） 9 時～10 時 30 分

会場：安藤百福センター カンファレンスホール

参加者：約 55 名（講師、事務局員含む）

主催：安藤百福センター



幼い頃から生き物が大好きで、野生の生き物と濃密に関わってきた松原氏。大学卒業後、氏は最後の鷹匠と呼ばれる沓沢朝治（くつざわあさじ）氏の弟子となり、山形県にて厳しい修行生活を始めた。その後、独立。約 10 年間を人里離れた山奥に暮らし、自給自足の暮らしを続けながら、独学で鷹狩りの技を究めていく。

講演会では、その数十年間にわたる自然体験のなかで、松原氏がどのように生き物と心を通わせ、鷹匠という一生涯の仕事にめぐりあい、そして、狩りを通じて鷹とどのように一体化していったのか、について語られた。パートナーの鷲とともに現れた松原氏は、自然界を知悉する鉄人のインパクトを会場に与え、聴講者を魅了した。

なお、講演内容の詳細については、『人と自然』第 3 号、特別インタビュー第 2 回「鷹とともに 鷹匠 松原英俊」をご参照ください。

卷 末 資 料

安藤百福センター 運営組織

顧問

荒牧 重雄	東京大学名誉教授、火山学者
林 貞行	元外務事務次官、元駐英特命全権大使
丸山 庄司	元全日本スキー連盟 専務理事

運営委員会

委員長	安藤 宏基	公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団 理事長 日清食品ホールディングス株式会社 代表取締役社長・CEO
副委員長	安藤 徳隆	公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団 副理事長 日清食品ホールディングス株式会社 代表取締役副社長・COO
委員	岡島 成行	学校法人青森山田学園 理事長 安藤百福センター センター長
	飯田 稔	仙台大学 上級研究アドバイザー
	水野 正人	ミズノ株式会社 相談役会長
	小泉 俊博	小諸市長

専門委員会

委員長	節田 重節	特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会 会長
委員	磯野 剛太	公益社団法人日本山岳ガイド協会 理事長 一般財団法人全国山の日協議会 理事長
	河原塚達樹	公益財団法人日本レクリエーション協会 スポーツ振興政策チームマネジャー
	小林孝之助	アウトドアチャレンジ協議会 事務局
	佐藤 初雄	特定非営利活動法人自然体験活動推進協議会 代表理事
	佐藤 博康	松本大学 名誉教授
	中村 達	アウトドアジャーナリスト・プロデューサー 安藤百福センター 副センター長
	橋谷 晃	木風舎 代表
	平川 仁彦	八海山スキースクール 校長
	平野 吉直	信州大学 理事・副学長
	山田 俊行	トヨタ白川郷自然学校 学校長

(2016年6月現在)

2015 年度 事業

■安藤百福センター主催事業	
5/23	ツリーハウスイベント「自然で楽しむアートフェス」
6/20～21	第4回 橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
7/4	トレイル新コース体験ツアー「千曲川コース」
7/17～19	第5回 浅間大学院生セミナー
8/7	人と自然の特別講演会「鷹とともに」
8/29～30	第5回 橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
10/24～25	トレイル新コース体験ツアー「蓼科コース(仮)」
10/31～11/1	トレイル新コース体験ツアー「軽井沢コース(仮)」
11/7	ツリーハウスイベント「信州の収穫祭」
11/25～27	自然学校新入職員研修会（長野）
12/7～9	自然学校新入職員研修会（京都）
12/14～16	自然学校新入職員研修会（東京）
1/13～14	自然学校中堅職員研修会 セミナー1（東京）
1/16～17	第6回 橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
1/20～22	自然学校新入職員研修会（熊本）
1/28～29	自然学校中堅職員研修会 セミナー2（東京）
2/4～5	自然学校経営者・管理者研修会
2/6～7	自然学校中堅職員研修会 セミナー3（長野）
■共催事業	
2/19～21	特定非営利活動法人日本ロングトレイル協会 「第3回 ロングトレイルシンポジウム」
3/15～16	特定非営利活動法人自然体験活動推進協議会 「自然体験活動研修会講師養成講座」
■賛助・後援	
6/23～26	公益社団法人日本山岳ガイド協会 「自然ガイドのための安全管理技術研修会」
12/15～18	公益社団法人日本山岳ガイド協会 「自然ガイドのための安全管理技術研修会」
3/5～6	公益社団法人日本山岳会 「第3回 登山教室指導者養成講習会」

2015 年度 上級指導者研修会利用状況

期間	研修会名	受講生	講師	スタッフ	備考
6/1～2	公益社団法人日本山岳ガイド協会 「危急時対応技術講習会」	28	8	0	
6/11～12	公益社団法人日本山岳ガイド協会 「危急時対応技術講習会」	31	5	0	
6/23～26	公益社団法人日本山岳ガイド協会 「自然ガイドのための安全管理技術研修会」	10	2	0	
7/1～2	公益社団法人日本山岳ガイド協会 「危急時対応技術講習会」	5	3	0	
7/17～19	安藤百福センター「第 5 回 浅間大 学院生セミナー」	10	4	3	
9/12～15	公益社団法人日本山岳ガイド協会 「ファーストエイド講習会」	16	9	0	
9/19～20	公益社団法人日本山岳会「親子登 山教室指導研修会」	6	2	2	
11/9～10	公益社団法人日本山岳ガイド協会 「自然ガイドのためのロープアク ティビティ」	1	1	0	
11/14～15	公益社団法人日本山岳ガイド協会 「危急時対応技術講習会」	27	4	0	
11/25～27	安藤百福センター「自然学校新入 職員研修会」(長野)	20	3	2	
12/7～9	安藤百福センター「自然学校新入 職員研修会」(京都)	17	3	2	
12/14～16	安藤百福センター「自然学校新入 職員研修会」(東京)	20	3	2	
12/15～18	公益社団法人日本山岳ガイド協会 「自然ガイドのための安全管理技 術研修会」	7	2	0	
1/13～14	安藤百福センター「自然学校中堅 職員研修会 セミナー1」(東京)	15	1	3	

期間	研修会名	受講生	講師	スタッフ	備考
1/20～22	安藤百福センター「自然学校新入職員研修会」(熊本)	13	3	2	
1/28～29	安藤百福センター「自然学校中堅職員研修会 セミナー2」(東京)	17	1	2	
2/4～5	安藤百福センター「自然学校経営者・管理者研修会」(東京)	7	1	5	
2/6～7	安藤百福センター「自然学校中堅職員研修会 セミナー3」(長野)	13	2	3	
3/5～6	公益社団法人日本山岳会「第3回登山教室指導者養成講習会」	25	3	3	
3/12～15	公益社団法人日本山岳ガイド協会「ファーストエイド講習会」	26	4	3	
3/15～16	特定非営利活動法人自然体験活動推進協議会「自然体験活動研修会講師養成講座」(東京)	12	2	2	

326 名

2015 年度 研修利用状況表

月	日	団 体 名	事 業 名
4	3～5	東京農工大学環境教育学研究室	環境教育学ゼミ合宿
	13～14	日清食品ホールディングス（株）	小諸ツリーハウスイベント下見
5	9～13	森環境教育事務所	NEAL リーダー養成講習会（中国人対応）
	15～16	南山大学外国語学部英米学科芝垣ゼミ	文化と環境合宿
	17～19	スポーツ名人塾	「山菜採り」を通じて小諸の自然を研究する会
	22～24	安藤百福センター	ツリーハウスイベント 「自然で楽しむアートフェス」
	25～29	日清食品ホールディングス（株）	新入職員研修
6	1～2	公益社団法人日本山岳ガイド協会	危急時対応技術講習会
	5	信州外あそびネットワーク	信州型自然保育連携会議
	7	上田市教育委員会生涯学習課	野外活動リーダー養成講座
	11～12	公益社団法人日本山岳ガイド協会	危急時対応技術講習会
	13～14	植村冒険館	植村冒険館アドベンチャー講座
	20～21	安藤百福センター	第4回 橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
	23～26	公益社団法人日本山岳ガイド協会	自然ガイドのための安全管理技術研修会
	27～28	北信レクリエーション協会	東・北信レク協会合同レク・フォローアップ研修会
7	1～2	公益社団法人日本山岳ガイド協会	危急時対応技術講習会
	3～4	INHOUSE DESIGN MEETING	IDM 小諸会議
	4	安藤百福センター	トレイル新コース体験ツアー「千曲川コース」
	5	日本ボーイスカウト長野県連盟東信地区	ボーイスカウト講習会
	15～16	日清食品ホールディングス（株）	視察
	17～19	安藤百福センター	第5回浅間大学院生セミナー
	20～21	株式会社バリューブックス	全体社員会議

月	日	団 体 名	事 業 名
7	23～24	公益社団法人日本環境教育フォーラム	東京シニア自然大学
	25～26	長野県レクリエーション協会	夏学習会&全国レクリエーション大会打ち合わせ
	27～28	日清食品ホールディングス（株）	研修会
8	2	一般社団法人小諸青年会議所	「小諸ふれ愛道場」～親子でつけよう絆の火～
	4～8	慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス	特別研究プロジェクト「自然体験をベースとした環境思想の考察」
	7	安藤百福センター	人と自然の特別講演会「鷹とともに」
	7～9	柏の葉アーバンデザインセンター	ピノキオプロジェクトリーディングチーム研修
	17～19	清泉女学院短期大学	保育特別講座（自然体験活動指導者養成）
	19～20	モリンダ	リーダー育成トレーニング
	22～23	ASLE-Japan／文学・環境学会	第21回 ASLE-Japan／文学・環境学会全国大会
	24～25	大妻女子大学大学院	野外教育特論演習
	27～29	日清食品ホールディングス（株）	自然体験活動指導者養成研修会
	29～30	安藤百福センター	第5回 橋谷晃さんと歩くトレッキング講座
9	1～3	東京造形大学デザイン学科	小諸の食と自然を学ぶ研修会
	4～6	JUON NETWORK（樹恩ネットワーク）	エコサバーバー・リーダー養成講座
	8～10	千葉大学分子生体機能学研究室	分子生体機能学研究室ゼミ
	11～13	立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科	異文化コミュニケーション研究科ゼミ夏期合宿
	12～15	公益社団法人日本山岳ガイド協会	ファーストエイド講習会
	19～20	公益社団法人日本山岳会	親子登山教室指導研修会
	21～23	清泉女学院短期大学	保育特別講座（自然体験活動指導者養成）
10	2～4	株式会社ゴールドウィン	THE NORTH FACE KIDS NATURE SCHOOL presents FAMILY CAMP

月	日	団 体 名	事 業 名
10	10～12	日本ボーイスカウト長野県連盟	団委員研修所長野第 27 期
	19～21	一般社団法人婦恋軽井沢自然倶楽部	自然体験活動指導者養成講習 (NEAL リーダー)
	22～24	日清食品ホールディングス（株）	インターンシップ研修
	24～25	安藤百福センター	トレイル新コース体験ツアー「蓼科 コース(仮)」
	26～27	信州外あそびネットワーク	フェスティバル実行委員会会議
	26～27	株式会社 ON-WIPPS	野外教育指導者研修
	29～30	小諸市役所	自然観光地域資源開発研修
11	31～1	安藤百福センター	トレイル新コース体験ツアー「軽井 沢コース(仮)」
	5	長野県シェアリングネイチャー協会	ネイチャーゲームデモンストレーシ ョンセミナー
	6～8	安藤百福センター	ツリーハウスイベント 「信州の収穫祭」
	9～10	公益社団法人日本山岳ガイド協会	自然ガイドのためのロープアクティ ビティ
	14～15	公益社団法人日本山岳ガイド協会	危急時対応技術講習会
	17	霧ヶ峰植物研究会	植生調査研修
	18～19	長野県教育委員会教学指導課	日韓アートアカデミー
	19～20	特定非営利活動法人浅間山麓国際 自然学校	インタープリターミーティング
	21～22	小諸市役所	小諸市の地域資源の利活用について 考える
	25～27	安藤百福センター	自然学校新入職員研修会（長野会場）
	29	自然観察指導員長野県連絡会	フォローアップ研修会「地域の自然 を理解する（動物編）」
	30～1	有限会社ビーネイチャー	ビーネイチャー合宿
12	4～5	信州外あそびネットワーク	事務局運営会議
	5～6	長野県県民文化部次世代サポート 課	信州型自然保育研修交流会
	9～10	特定非営利活動法人蓼科・八ヶ岳国 際自然学校	インタープリター研修会

月	日	団 体 名	事 業 名
12	10～14	特定非営利活動法人国際自然大学 校	スキートレーニング
	15～18	公益社団法人日本山岳ガイド協会	自然ガイドのための安全管理技術研 修会
	17～18	特定非営利活動法人日本ロングト レイル協会	打ち合わせ
	19～20	麻布大学	ゼミ環境教育合宿
1	8～11	NVC ジャパン	ホリスティックネイチャーコミュニ ケーション
	16～17	安藤百福センター	第6回 橋谷晃さんと歩くトレッキ ング講座
2	6～7	特定非営利活動法人自然体験活動 推進協議会	自然体験活動指導者（NEAL リーダ ー）養成研修会
	6～7	安藤百福センター	自然学校中堅職員研修会セミナー3
	16～18	日清食品ホールディングス（株）	インターンシップ研修
	19～21	特定非営利活動法人日本ロングト レイル協会	第3回ロングトレイルシンポジウム
	23～25	慶應義塾大学	環境革命講座
3	5～6	公益社団法人日本山岳会	第3回登山教室指導者養成講習会
	12～15	公益社団法人日本山岳ガイド協会	ファーストエイド講習会
	27～28	信州外あそびネットワーク	NEAL リーダー養成会

『人と自然 第7号』への投稿論文を募集します

投稿論文規程

1. 投稿の内容

- (1) 「人と自然（以下、本誌）」に掲載される内容は、人と自然に関わる原著論文、研究報告、総説、評論、実践報告、資料として完結していること。なお、投稿論文に対しては審査を行う。
- (2) 本誌へ筆頭として投稿できる論文数は、原著論文その他すべてを含み1人2編以内に限る。
- (3) 本誌の発行回数は原則として年1回とする。投稿は年間を通じて随時受け付け、指定の締切日に投稿されたものを編集、審査、製本、発送する。

2. 編集委員会

- (1) 本誌の編集その他の責任は、「人と自然 編集委員会」が行う。当委員会は事務局員を含む編集委員若干名によって構成される。
- (2) 当委員会は次の活動を行う。
 - a 本誌の編集、製本、発送などに関すること。
 - b 投稿論文の審査員の選考、依頼などに関すること。
 - c 投稿規程などに関すること。
 - d その他、本誌に関すること。

3. 論文の形式

- (1) 原著論文は、タイトル、執筆者名とその所属、キーワード、欧文要約、本文のすべてが揃っていることとし、原著論文以外のものは欧文要約を省略することができる。
- (2) 製本はA4判、1ページ1段とし、各段は42字×36行とし、1論文につき刷りあがり8頁（図表、写真その他すべてを含む）以内を原則とする。ただし、1頁目はタイトルおよび執筆者名、所属、キーワードで5行ほどのスペースをとるものとする。

4. 投稿の方法

- (1) 投稿は、「である」調でのワープロ原稿とする。提出部数は3部（2部は複写可）、その他2部（1部は複写可）とし、Microsoft Word またはその他のワープロソフトで上記製本のフォーマットに則って作成し、電子メールにて『人と自然』編集委員会、info@momofukucenter.jp まで送付すること。締切日は2017年4月末日。
- (2) 図表、写真などはそれぞれに必ず通し番号とタイトルを付けること。
- (3) 引用の箇所の右肩に(1)、(2)のように該当する文献番号を付け、その順に引用および参考文献リストを原稿の最後に掲載すること。記載の順序は、単行本の場合、著者、書名、頁、発行所、西暦発行年月日の順とし、雑誌および研究誌の場合、著書、題目、雑誌名、巻号、頁、西暦発行年月日とする。

5. その他

- (1) 本誌に投稿した論文の別刷りを希望する場合、各執筆者が行うこととする。

あとがき

子どもたちが群れて遊ばなくなって久しい。町の公園でも子どもたちの姿を見かけなくなった。まして、野山や川などで歓声を上げている子どもたちは皆無に等しい。安藤百福氏は、こうした子どもたちの様子を気にしておられた。◆生前、お会いするたびに、子どもたちの将来について心配し、日本の行く末を憂えていた。そして、子どもたちが野山を自由に走り回ることを願い、自然体験活動の指導者養成を支援してくださった。その結晶が安藤百福センターである。◆自然体験活動という言葉は文部科学省が作ったのだが、今ひとつしっくりこない。これに対し「野遊び」という言葉が最近使われるようになっていく。アウトドアメーカーのスノーピーク社長・山井太氏は、この言葉を会社のキャッチフレーズにしている。古くから使われている日本語だ。懐かしい響きを感じる。◆長い間、自然体験活動という言葉を使ってきたが、一般社会には浸透できないような気がする。それはこの言葉によるのではないかと思う。◆森の中の秘密基地作りや川遊び、釣り、木登りといった野遊びを復活させたい。自由に遊び回る間にいろいろな筋肉が付き、集団生活の秩序を覚える。自然の摂理を理解し、人間の小ささを感じる。そして成長していく。遊びを通じての文武両道である。安藤百福氏の思いを新たにしたい。(S)

人と自然

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター紀要
第6号

発行日：2016年11月20日

発行人：安藤 宏基

編集人：岡島 成行

安藤百福記念 自然体験活動指導者養成センター
〒384-0071 長野県小諸市大久保 1100

Tel：0267-24-0825

Fax：0267-24-0918

URL：<http://momofukucenter.jp/>

E-Mail：info@momofukucenter.jp